

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第185集

おぼな
尾花 A 遺跡 I

旧石器時代～縄文時代編

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 62

2009

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を平成 11 年度より実施しています。本書は、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

本書に掲載した尾花 A 遺跡は、平成 16～18 年度の 3 箇年に渡り発掘調査を行い、旧石器時代、縄文時代にはじまり、弥生時代、古墳時代、中世から近世の遺構や遺物を確認することができました。これらの発見は、遺跡が長い期間、人々の住みやすい環境であったことを示しています。

本報告書では、旧石器時代と縄文時代について掲載しております。特に、縄文時代では縄文時代草創期の住居跡かとも考察されている竪穴状遺構は県内でも例の少ないものです。また、200 基を超える縄文時代早期の集石遺構は、長期間、縄文時代の人々が住み続けたことを物語っており、その風景は圧巻です。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待しております。

最後になりましたが、調査にあたってご協力をいただいた関係各機関や地元の人々、ご指導やご助言を賜りました先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

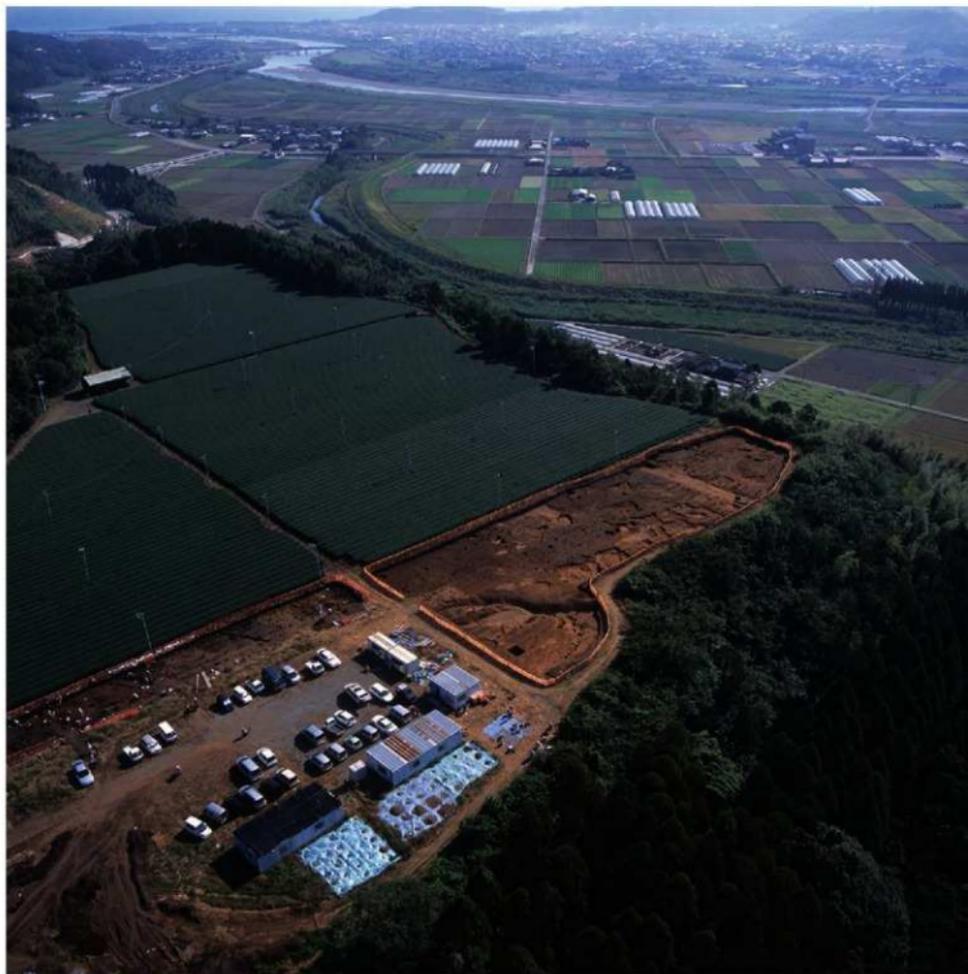
平成 21 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 福永 展幸



尾花 A 遺跡より尾鈴山系を望む
(遺跡南方上空より)



尾花 A 遺跡南を流れ、太平洋に注ぐ小丸川（奥）と切原川（手前）
（遺跡西方上空より）



谷を隔て立地する尾花 A 遺跡（写真右上）と
尾花坂上遺跡（写真中央、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 101 集 2005）



小丸川・切原川を挟み、立地する縄文時代の遺跡群

(小丸川に架かる高速道路橋梁奥より、南中原第1遺跡、野首第2遺跡、野首第1遺跡、崩戸(青木)遺跡)
(遺跡西上空より)



三次調査A区の状況(遺跡北端)



一次調査区の状況(遺跡南端)



縄文時代草創期 整穴状遺構 (SC256) 出土遺物



例言

- 1 本書は平成16～18年度に調査した東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う尾花A遺跡の発掘調査報告書である。ただし、本書では、旧石器時代から縄文時代までの時期についての報告とし、以後の時期については尾花A遺跡Ⅱ（弥生時代以降編）に掲載している。
- 2 発掘調査は日本道路公団から委託を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。
- 3 尾花A遺跡の概要について既に以下の文献で紹介しているが、報告内容については本書が優先される。
 - ・宮崎県埋蔵文化財センター2005『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第111集
 - ・宮崎県埋蔵文化財センター2006『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第131集
- 4 現地での実測図作成は埋蔵文化財センター職員が主として行ったが、遺構実測の一部に関しては、㈱国際航業に委託した。
- 5 現地での写真撮影に関しては、埋蔵文化財センター職員が行った。
- 6 尾花A遺跡では、以下の業務に関しては委託を行った。
 - 空中写真撮影：㈱九州航空、㈱ふじた、㈱スカイサーベイ九州
 - 測量杭設置：㈱タイユー測量設計、㈱川南技術コンサルタント
 - 自然科学分析：㈱古環境研究所
- 7 遺物の実測図作成は、整理作業員の補助を得て埋蔵文化財センター職員が行った。また、石器実測及びトレースの一部は㈱九州文化財研究所、㈱パスコに委託した。また、遺物の写真撮影は竹田が行った。
- 8 本書に利用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の1/50,000図（川南）を利用した。また、第2図ではカシミール3Dを用いた作図を行った。
- 9 土層断面の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠った。
- 10 本書で用いた標高は海拔絶対高である。また方位は座標北（G.N.）を基本とするが、遺構実測図などには磁北（M.N.）を用いた。
- 11 本文の執筆は分担して行い、各文責は目次及び文末に示している。なお、本書のデジタルデータ作成・編集は岸田が、写真図版資料の編集は竹田が行った。
- 12 出土遺物及び諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡例

- 1 本遺跡は、調査区を6つに分け調査を行ったが、遺構については、原則として発掘調査時の遺構番号として掲載している。そのためにおこる遺構番号の重複に関しては、遺構番号の前に調査区名を明記している。なお、本書で使用する各調査区の略称は以下の通りである。

一次調査区→A1 二次調査区→A2 三次調査A区→A3 三次調査B区→A4 三次調査C区→A5

- 2 遺構名略号についてはSを基本としたが、集石遺構についてはSIとし、一部の土坑、炉穴についてはSC(土坑)、SP(炉穴)としたものもある。また、弥生時代以降の遺構については、尾花A遺跡Ⅱ(弥生時代以降編)に譲るため、本書観察表内に調査時の遺構番号を〔 〕で囲い示した。

- 3 遺構実測図、遺物実測図の基本的な縮尺は次のとおりである。

遺構：礫群・集石遺構・炉穴・土坑(1/30)

土器：(1/3)、石器：石鏃(1/1)、ナイフ形石器等(2/3)、石斧・礫器・敲石・剥片等(1/3)、台石(1/4)

- 4 本書で用いた火山灰略号は、以下のとおりである。

K-Ah：鬼界アカホヤ火山灰、Kr-Kb：霧島小林軽石、AT：始良 Tn火山灰、Kr-lw：霧島イワオコシ軽石

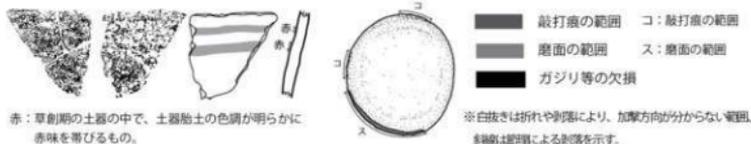
- 5 掲載した石器に関してはレイアウト番号右に続く表記を石器観察表に変えた。器種、出土グリッド(出土遺構)、出土層位、石材、重量の順に記している。なお、出土地不明のものに関しては、一括と表記し層位が不明なものは「一」と表記している。

- 6 石器の石材については以下のように表記している。

黒曜石：黒曜石、安山岩：安山岩、流紋岩：流紋、蛇紋岩：蛇紋、チャート：チャート、玉髄：玉髄
頁岩：頁、珪質頁岩：珪質、ホルンフェルス：ホルン、砂岩：砂、尾鈴山酸性岩類：尾鈴

なお、肉眼観察により黒曜石産地が判別可能なものは桑ノ木津留(桑)、姫島(姫)、腰岳(腰)とした。

- 7 実測図では表現しづらい色調や磨面等については、下図のような表現を実測図中に含めた。



- 8 巻中に掲載した遺構観察表には、本書には図化し得なかった遺構も掲載した。また、遺物観察表については、土器は図示したものを掲載し、石器は上記5のとおり遺物レイアウト番号右に続く表記に譲った。

- 9 巻末写真に記される番号は、図化した遺物レイアウト番号と同じものであるが、スペースの関係上掲載順とはなっていない所もある。

- 10 本書で用いる略号、表現は全て尾花A遺跡Ⅰ(旧石器時代～縄文時代編)で用いられるものであり、尾花A遺跡Ⅱ(弥生時代以降編)では異なる略号等を用いることがある。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯(松林)・	1
第2節 調査の組織(松林)・	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境(竹田)・	3
第2節 歴史的環境(竹田)・	3
第Ⅲ章 調査の方法と経過	
第1節 確認調査の概要(松林)・	6
第2節 発掘調査の概要(松林)・	8
第3節 整理作業及び報告書の作成(松林)・	10
第4節 教育普及活動(結城)・	12
第Ⅳ章 調査の記録	
第1節 基本順序(竹田)・	13
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	15
1 概要(岸田)	
2 旧地形と遺物分布状況(岸田)	
3 遺構(岸田)	
4 遺物(岸田)	
第3節 縄文時代草創期の遺構と遺物	24
1 概要(福田)	
2 遺構(福田)	
3 遺物(福田)	
第4節 縄文時代早期の遺構と遺物	33
1 概要(日高)	
2 遺構(岸田)	
3 遺物(1) 土器(出山)	
(2) 石器(日高)	
第5節 縄文時代前期～後期の遺構と遺物	117
1 概要(高橋)	
2 遺構(高橋)	
3 遺物(1) 縄文時代前期の土器(高橋)	
(2) 縄文時代中期～後期の土器(高橋)	
第6節 縄文時代晩期の遺構と遺物	123
1 概要(岸田)	
2 遺構(高橋・岸田)	
3 遺物(1) 土器(高橋・岸田)	
(2) 石器(日高・岸田)	
第Ⅴ章 まとめと考察	
第1節 旧石器時代(岸田)・	192
第2節 縄文時代草創期(福田)・	192
第3節 縄文時代早期	193
1 集石遺構について(岸田)・	193
2 土器埋設遺構について(福田)・	196
3 早期土器について(出山)・	197
4 早期石器について(岸田・日高)・	199
第4節 縄文時代前期～後期	201
1 遺構について(高橋)・	201
2 前期～後期土器について(高橋)・	201
第5節 縄文時代晩期	201
1 晩期土器について(岸田)・	201
2 晩期石器について	
a. 局部磨製石鏃について(日高)・	203
b. 遺構内出土の石器について(岸田)・	206

※ ()内は文責者を表す。なお、文責者が複数の場合は先頭(左)の文責者が主となり執筆を行った。

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	4
第2図 道路開断面模式図	4
第3図 確認調査トレンチ位置図及び調査区・グリッド設定図	7
第4図 三次調査A区土層断面図	14
第5図 オ41Gr.土層断面図	14
第6図 A1S1124実測図	17
第7図 V層・VI層調査範囲及び三次調査A区遺物分布図	17
第8図 旧石器時代石器実測図(1)	18
第9図 旧石器時代石器実測図(2)	19
第10図 旧石器時代石器実測図(3)	20
第11図 旧石器時代石器実測図(4)	21
第12図 旧石器時代石器実測図(5)	22
第13図 縄文時代草創期遺構分布図	25
第14図 隆帯土器重量分布図	25
第15図 竪穴遺構(A1 SC256)及び出土遺物実測図	26
第16図 竪穴遺構(A1 SC256)出土遺物実測図	27
第17図 縄文時代草創期土器実測図(1)	28
第18図 縄文時代草創期土器実測図(2)	29
第19図 縄文時代草創期土器実測図(3)	30
第20図 縄文時代草創期土器実測図(4)	31
第21図 縄文時代草創期土器実測図(5)	32
第22図 縄文時代早期遺構分布図	35・36
第23図 集石遺構(AⅠ類・AⅡ類)残差対比図	38
第24図 集石遺構内部雜構成図	39
第25図 三次調査A区遺構分布図	46
第26図 集石遺構実測図(1)	47
第27図 集石遺構実測図(2)	48
第28図 イ36Gr.周辺遺構分布図	49
第29図 集石遺構実測図(3)	49
第30図 二次調査区・三次調査B区遺構分布図	50
第31図 三次調査C区・一次調査区遺構分布図	51
第32図 集石遺構実測図(4)	52
第33図 集石遺構実測図(5)	53
第34図 集石遺構実測図(6)	54
第35図 集石遺構実測図(7)	55
第36図 集石遺構実測図(8)	56
第37図 H10Gr.周辺遺構分布図	57
第38図 集石遺構実測図(9)	58
第39図 集石遺構実測図(10)	59
第40図 一次調査区遺構分布図	60
第41図 J8Gr.周辺遺構分布図	61
第42図 集石遺構実測図(11)	62
第43図 集石遺構実測図(12)	63
第44図 L5Gr.周辺遺構分布図	64
第45図 K5Gr.周辺遺構分布図	65
第46図 集石遺構実測図(13)	66
第47図 集石遺構実測図(14)	67
第48図 集石遺構実測図(15)	68
第49図 集石遺構実測図(16)	69
第50図 集石遺構実測図(17)	70
第51図 集石遺構実測図(18)	71
第52図 土器埋設遺構(SC210)及び出土遺物実測図、土坑(SC211～213)及び出土遺物実測図	73
第53図 竪穴及び出土遺物実測図	74
第54図 竪穴・土坑及び出土遺物実測図	75
第55図 土坑及び出土遺物実測図(1)	76
第56図 土坑及び出土遺物実測図(2)	77
第57図 土坑及び出土遺物実測図(3)	78
第58図 土坑実測図	79
第59図 具段文系土器重量分布図	82

第 60 図	押型文系土器 (楕円文) 重量分布図	83
第 61 図	押型文系土器 (山形文) 重量分布図	85
第 62 図	縞糸文・菱形縞糸文土器重量分布図	85
第 63 図	その他の押型文系土器 (格子目・菱形・枝回転) 重量分布図	86
第 64 図	無文土器重量分布図	87
第 65 図	縄文時代早期土器実測図 (1)	88
第 66 図	縄文時代早期土器実測図 (2)	89
第 67 図	縄文時代早期土器実測図 (3)	90
第 68 図	縄文時代早期土器実測図 (4)	91
第 69 図	縄文時代早期土器実測図 (5)	92
第 70 図	縄文時代早期土器実測図 (6)	93
第 71 図	縄文時代早期土器実測図 (7)	94
第 72 図	縄文時代早期土器実測図 (8)	95
第 73 図	縄文時代早期土器実測図 (9)	96
第 74 図	縄文時代早期土器実測図 (10)	97
第 75 図	縄文時代早期土器実測図 (11)	98
第 76 図	縄文時代早期土器実測図 (12)	99
第 77 図	縄文時代早期土器実測図 (13)	100
第 78 図	縄文時代早期土器実測図 (1)	104
第 79 図	早期石礫石片割合 及び黒曜石製石礫産地別割合図	105
第 80 図	縄文時代早期石器実測図 (2)	106
第 81 図	縄文時代早期石器実測図 (3)	107
第 82 図	縄文時代早期石器実測図 (4)	108
第 83 図	縄文時代早期石器実測図 (5)	109
第 84 図	縄文時代早期石器実測図 (6)	110
第 85 図	縄文時代早期石器実測図 (7)	111
第 86 図	縄文時代早期石器実測図 (8)	112
第 87 図	縄文時代早期石器実測図 (9)	113
第 88 図	縄文時代早期石器実測図 (10)	114
第 89 図	縄文時代早期石器実測図 (11)	115
第 90 図	縄文時代早期石器実測図 (12)	116
第 91 図	縄文時代前期～後期遺構・遺物分布図	118
第 92 図	縄文時代前期～後期遺構実測図	119
第 93 図	縄文時代前期土器実測図	120
第 94 図	縄文時代中期～後期土器実測図	121
第 95 図	縄文時代前期～晩期土器片割合図	123
第 96 図	縄文時代晩期遺構・遺物分布図	126
第 97 図	A1 SC318 及び出土遺物実測図	127
第 98 図	A1 SC318 出土遺物実測図 (1)	128
第 99 図	A1 SC318 出土遺物実測図 (2)	129
第 100 図	A4 S104 及び出土遺物実測図、 A4 S203 及び出土遺物実測図	130
第 101 図	A2 S226 及び出土遺物実測図	131
第 102 図	A2 S226 出土遺物実測図	132
第 103 図	A2 S226 出土遺物実測図、 A4 S222 及び出土遺物実測図	133
第 104 図	A5 S118 及び出土遺物実測図、 A2 S2501 及び出土遺物実測図	134
第 105 図	A2 S2501 出土遺物実測図	135
第 106 図	I～V 類割合図	136
第 107 図	I 類重量分布図	138
第 108 図	IV 1～IV 4 類土器片割合図	139
第 109 図	縄文時代晩期土器実測図 (1)	142
第 110 図	縄文時代晩期土器実測図 (2)	143
第 111 図	縄文時代晩期土器実測図 (3)	144
第 112 図	縄文時代晩期土器実測図 (4)	145
第 113 図	縄文時代晩期土器実測図 (5)	146
第 114 図	縄文時代晩期土器実測図 (6)	147
第 115 図	縄文時代晩期土器実測図 (7)	148
第 116 図	縄文時代晩期土器実測図 (8)	149
第 117 図	縄文時代晩期土器実測図 (9)	150

第 118 図	縄文時代晩期土器実測図 (10)	151
第 119 図	縄文時代晩期土器実測図 (11)	152
第 120 図	縄文時代晩期土器実測図 (12)	153
第 121 図	縄文時代晩期土器実測図 (13)	154
第 122 図	縄文時代晩期土器実測図 (14)	155
第 123 図	縄文時代晩期土器実測図 (15)	156
第 124 図	縄文時代晩期土器実測図 (16)	157
第 125 図	縄文時代晩期土器実測図 (17)	158
第 126 図	深鉢 (IV 1 類～IV 4 類) 重量分布図	159
第 127 図	刻目尖突帯文を有する鉢 (V 7 類・V 8 類) 重量分布図	161
第 128 図	縄文時代晩期土器実測図 (18)	162
第 129 図	縄文時代晩期土器実測図 (19)	163
第 130 図	縄文時代晩期土器実測図 (20)	164
第 131 図	縄文時代晩期土器実測図 (21)	165
第 132 図	晩期石礫石片割合 及び黒曜石製石礫産地別割合図	166
第 133 図	石材別石礫分布図 (点数)	167
第 134 図	縄文時代晩期石器実測図 (1)	172
第 135 図	縄文時代晩期石器実測図 (2)	173
第 136 図	縄文時代晩期石器実測図 (3)	174
第 137 図	縄文時代晩期石器実測図 (4)	175
第 138 図	縄文時代晩期石器実測図 (5)	176
第 139 図	縄文時代晩期石器実測図 (6)	177
第 140 図	縄文時代晩期石器実測図 (7)	178
第 141 図	縄文時代晩期石器実測図 (8)	179
第 142 図	縄文時代晩期石器実測図 (9)	180
第 143 図	縄文時代晩期石器実測図 (10)	181
第 144 図	縄文時代晩期石器実測図 (11)	182
第 145 図	縄文時代晩期石器実測図 (12)	183
第 146 図	石斧 (I～IV 類) 分布図 (点数)	184
第 147 図	石錘 (打欠・切目)・ 敲石 (I 類・II 類) 分布図	185
第 148 図	縄文時代晩期石器実測図 (13)	186
第 149 図	縄文時代晩期石器実測図 (14)	187
第 150 図	縄文時代晩期石器実測図 (15)	188
第 151 図	縄文時代晩期石器実測図 (16)	189
第 152 図	縄文時代晩期石器実測図 (17)	190
第 153 図	縄文時代晩期石器実測図 (18)	191
第 154 図	尾花 A 遺跡と尾花坂上遺跡位置関係図	195
第 155 図	早期土器重量割合図	197
第 156 図	押型文系土器重量割合図	197
第 157 図	敲石・磨石類樹系図	199
第 158 図	凹み計測図	200
第 159 図	凹石 (543) 断面図	200

表目次

第 1 表	東九州自動車道 (都農～西都農) 関連 旧石器時代・縄文時代遺跡一覧表	5
第 2 表	基本順序	13
第 3 表	集石遺構類型別先後関係表	38
第 4 表	縄文時代早期集石遺構観察表	40
第 5 表	縄文時代早期砂穴観察表	80
第 6 表	縄文時代早期土坑観察表	80
第 7 表	縄文時代早期石器種組成表	105
第 8 表	縄文時代晩期石器種組成表	176
第 9 表	集石遺構炭素 14 年代測定結果一覧表	193
第 10 表	県内局部磨製石礫集成表	205
第 11 表	縄文時代早期土器観察表	208
第 12 表	縄文時代早期土器観察表	211
第 13 表	縄文時代前期～後期土器観察表	217
第 14 表	縄文時代晩期土器観察表	218

図版目次

巻頭図版 1	尾花 A 遺跡より尾鈴山系を望む	
巻頭図版 2	尾花 A 遺跡南を流れ、太平洋に注ぐ小丸川(奥)と切原川(手前)	
巻頭図版 3	谷を隔て立地する尾花 A 遺跡と尾花坂上遺跡	
巻頭図版 4	小丸川・切原川を挟み、立地する縄文時代の遺跡群	
巻頭図版 5	三次調査 A 区の状況、一次調査区の状況	
巻頭図版 6	縄文時代草創期整穴状遺構 (SC256) 出土遺物	
巻頭図版 7	大量に出土した打製石斧	

〈土層・遺構〉

図版 1	各調査区の土層堆積状況	225
図版 2	旧石器時代 礫群	226
図版 3	縄文時代草創期 整穴状遺構	227
図版 4	縄文時代早期 集石遺構 (1)	228
図版 5	縄文時代早期 集石遺構 (2)	229
図版 6	縄文時代早期 集石遺構 (3)	230
図版 7	縄文時代早期 集石遺構 (4)	231
図版 8	縄文時代早期 集石遺構 (5)	232
図版 9	縄文時代早期 集石遺構 (6)	233
図版 10	縄文時代早期 集石遺構 (7)	234
図版 11	縄文時代早期 集石遺構 (8)	235
図版 12	縄文時代早期 集石遺構 (9)	236
図版 13	縄文時代早期 集石遺構 (10)	237
図版 14	縄文時代早期 集石遺構 (11)	238
図版 15	縄文時代早期 集石遺構 (12)	239
図版 16	縄文時代早期 集石遺構 (13)	240
図版 17	縄文時代早期 集石遺構 (14)	241
図版 18	縄文時代早期 集石遺構 (15)	242
図版 19	縄文時代早期 集石遺構 (16)	243
図版 20	縄文時代早期 集石遺構 (17)	244
図版 21	縄文時代早期 集石遺構 (18)	245
図版 22	縄文時代早期 集石遺構 (19)	246
図版 23	縄文時代早期 集石遺構 (20)	247
図版 24	縄文時代早期 集石遺構 (21)	248
図版 25	縄文時代早期 集石遺構 (22)	249
図版 26	縄文時代早期 集石遺構 (23)	250
図版 27	縄文時代早期 集石遺構 (24)	251
図版 28	縄文時代早期 集石遺構 (25)	252
図版 29	縄文時代早期 集石遺構 (26)	253
図版 30	縄文時代早期 土器埋設遺構	254
図版 31	縄文時代早期 炉穴 (1)	255
図版 32	縄文時代早期 炉穴 (2)	256
図版 33	縄文時代早期 炉穴 (3)	257
図版 34	縄文時代早期 炉穴 (4)、土坑 (1)	258
図版 35	縄文時代早期 土坑 (2)	259
図版 36	縄文時代早期 土坑 (3)	260
図版 37	縄文時代前期～後期 土坑	261
図版 38	縄文時代晩期 土坑 (1)	262
図版 39	縄文時代晩期 土坑 (2)	263
図版 40	縄文時代晩期 土坑 (3)	264
図版 41	縄文時代晩期 土坑 (4)	265

〈遺物〉

図版 42	旧石器 (1) 1～35、37～40	266
図版 43	旧石器 (2) 36、41～44、46～49	267
図版 44	旧石器 (3) 45、50～71	268
図版 45	縄文時代草創期 (1)	
	整穴状遺構 (A1 SC256) 72～97	269
図版 46	縄文時代草創期 (2)	
	整穴状遺構 (A1 SC256) 98～102	270
図版 47	縄文時代草創期 (3) 103～136	271
図版 48	縄文時代草創期 (4) 137～157	272

図版 49	縄文時代草創期 (5) 158～176	273
図版 50	縄文時代草創期 (6) 177～199	274
図版 51	縄文時代早期 (1) 土器埋設遺構 200、土坑 201～203	275
図版 52	縄文時代早期 (2) 炉穴 204～211、土坑 213～227	276
図版 53	縄文時代早期 (3) 土坑 212、(4) 228～246	277
図版 54	縄文時代早期 (5) 247～280	278
図版 55	縄文時代早期 (6) 281～307	279
図版 56	縄文時代早期 (7) 308～345	280
図版 57	縄文時代早期 (8) 346～381	281
図版 58	縄文時代早期 (9) 382～409	282
図版 59	縄文時代早期 (10) 410～437	283
図版 60	縄文時代早期 (11) 438～490	284
図版 61	縄文時代早期 (12) 491～509	285
図版 62	縄文時代早期 (13) 510～519、521～524	286
図版 63	縄文時代早期 (14) 520、525～538	287
図版 64	縄文時代早期 (15) 539～557	288
図版 65	縄文時代早期 (16) 558～572	289
図版 66	縄文時代早期 (17) 573～585	290
図版 67	縄文時代早期 (18) (上)588・591・592、(下)586・587・589・590	291
図版 68	縄文時代早期 (19) 593～596	292
図版 69	縄文時代前期～後期 597～636	293
図版 70	縄文時代晩期 (1) 土坑 637～650	294
図版 71	縄文時代晩期 (2) 土坑 651～656	295
図版 72	縄文時代晩期 (3) 土坑 657～669、675～678	296
図版 73	縄文時代晩期 (4) 土坑 670～674、679～688	297
図版 74	縄文時代晩期 (5) 土坑 689～699	298
図版 75	縄文時代晩期 (6) 土坑 700、701、(7) 702～732	299
図版 76	縄文時代晩期 (8) 733～782	300
図版 77	縄文時代晩期 (9) 783～811	301
図版 78	縄文時代晩期 (10) 812～832	302
図版 79	縄文時代晩期 (11) 833～849	303
図版 80	縄文時代晩期 (12) 850～877	304
図版 81	縄文時代晩期 (13) 878～904	305
図版 82	縄文時代晩期 (14) 905～920	306
図版 83	縄文時代晩期 (15) 921～939	307
図版 84	縄文時代晩期 (16) 940～962	308
図版 85	縄文時代晩期 (17) 963～1061	309
図版 86	縄文時代晩期 (18) 1062～1080	310
図版 87	縄文時代晩期 (19) 1081～1096	311
図版 88	縄文時代晩期 (20) 1097～1112	312
図版 89	縄文時代晩期 (21) 1113～1140	313
図版 90	縄文時代晩期 (22) 1141～1172	314
図版 91	縄文時代晩期 (23) 1173～1208	315
図版 92	縄文時代晩期 (24)	
	(上)さまざまな石材で作られた打製石鏝	
	(下)磨製石斧刃部形態	316
図版 93	縄文時代晩期 (25)	
	(上)敲石・磨石類と尾鈴山酸性岩類	
	(下)大量に出土した石鏝	317
図版 94	縄文時代晩期 (26) 1209～1231	318
図版 95	縄文時代晩期 (27) 1232～1244、1249～1252	319
図版 96	縄文時代晩期 (28) 1245～1248、1253～1258	320

※ (図版名)の図版名の後に示された番号は、本書に掲載した遺物レイアウト番号と同じ遺物を示している。



東九州自動車道（都農～西都間）路線内遺跡分布図

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点として大分・宮崎両県の東海岸部を經由し鹿児島県鹿児島市に至る総延長436kmの自動車専用道路である。宮崎県内では延岡～清武間が平成元年2月に基本計画決定されて以降、平成13年3月に供用が開始された西部～清武間を除く各区間において、有料道路方式と新直轄方式の併用により、道路建設事業が進行中である。

尾花A遺跡が所在する川南町は東九州自動車道の都農～西都間に含まれ、平成9年3月に国土開発幹線自動車道建設審議会において整備計画区間（門川～西都間）に決定された。同年12月には都農～西都間25kmについて建設大臣（現国土交通大臣）により日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）へ施行命令が発令され、事業が本格化している。

東九州自動車道の建設計画が具体化される中、宮崎県教育委員会では、国の補助を得て、平成3年度に西部～清武間、平成6年度に延岡～西都間及び延岡道路、平成9年度に清武～日南間を対象とした広域的な分布調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の周知化を図るとともに各区間に関する路線協議を進めた。都農～西都間に関しては、施行命令が発令された翌年（平成10年）に計画路線上の25km区間を対象として更に詳細な分布調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の把握に努めた。これらの成果をもとに、日本道路公団と埋蔵文化財の保護に関する協議を重ねた結果、道路建設によって影響を受ける79遺跡896,000㎡について、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成11年度から調査に着手し、現在も継続中である。

尾花A遺跡は平成16年5月から確認調査を開始し、平成18年12月に現地調査を終了した。

なお、本調査にあたっては、調査面積や遺構密度、調査期間の都合により、調査対象地を6箇所に分けて調査を実施した。総調査面積は23,400㎡である。確認調査及び本調査の内容等については、第三章を参照されたい。（文責：松林）

第2節 調査の組織

本遺跡の調査・整理報告は以下の組織において実施された。

調査主体	宮崎県教育委員会
事業調整	文化財課
課長	福島順二（平成16年度） 米良弘康（平成17・18年度） 井上 貴（平成19年度） 清野 勉（平成20年度）
課長補佐	福元雅彦（平成16年度） 菓子野信男（平成17・18年度） 野中一樹（平成19・20年度）
主幹兼埋蔵文化財係長	石川彬雄（平成16年度）
主幹兼埋蔵文化財担当リーダー	石川彬雄（平成17・18年度） 谷口武範（平成19・20年度）
主査	和田理啓（平成16・17年度） 柳田晴子（平成18年度） 日高弘人（平成19・20年度）
調査実施	宮崎県埋蔵文化財センター
所長	宮崎享一（平成16・17年度） 清野 勉（平成18・19年度） 福永展幸（平成20年度）
副所長	岩永哲夫（平成16～18年度） ：兼調査第二課長 大藪和博（平成16年度） ：兼総務課長 加藤吾郎（平成18～20年度） 長友英詞（平成20年度） ：兼総務課長
総務課長	宮越 尊（平成17～19年度）
調査第一課長	高山富雄（平成16～18年度） 長寿宗重（平成19・20年度）
主幹兼総務係長	石川史史（平成16・17年度）
主幹兼総務担当リーダー	高山正信（平成18～20年度）

主幹兼調査第一係長

長井宗重 (平成 17 年度)

主幹兼調査第一担当リーダー

長井宗重 (平成 18 年度)

副主幹兼調査第一担当リーダー

南中道隆 (平成 19・20 年度)

確認調査 (一次)

主事 福田 聡 (平成 16 年度)

確認調査 (二次)

主事 福田 聡 (平成 17 年度)

確認調査 (三次)

主査 竹田享志 (平成 17 年度)

主査 松林豊樹 (平成 17 年度)

本調査 (一次)

主事 大野義人 (平成 16・17 年度)

主事 福田 聡 (平成 16・17 年度)

主事 日高優子 (平成 17 年度)

調査員 土屋崇夫 (平成 17 年度)

調査員 河野雅人 (平成 17 年度)

調査員 田中達也 (平成 17 年度)

調査員 児玉 幹 (平成 17 年度)

調査員 小船井順 (平成 17 年度)

本調査 (二次)

主査 河野康男 (平成 17 年度)

主査 小川太志 (平成 17 年度)

主査 竹田享志 (平成 17 年度)

主事 天野玄善 (平成 17 年度)

調査員 福田光宏 (平成 17 年度)

本調査 (三次A区)

主査 永田順久 (平成 17 年度)

主査 山田洋一郎 (平成 17 年度)

主査 小川太志 (平成 17・18 年度)

主査 結城 修 (平成 18 年度)

主査 松林豊樹 (平成 18 年度)

主事 岸田裕一 (平成 17 年度)

主事 佐竹智光 (平成 18 年度)

調査員 土屋崇夫 (平成 17 年度)

調査員 河野雅人 (平成 17 年度)

調査員 児玉 幹 (平成 17 年度)

調査員 小船井順 (平成 17・18 年度)

本調査 (三次B区)

主査 日高博司 (平成 18 年度)

主任主事 高橋浩子 (平成 18 年度)

主事 堀口悟史 (平成 18 年度)

調査員 田中達也 (平成 18 年度)

調査員 児玉 幹 (平成 18 年度)

本調査 (三次C区)

主査 出山真次 (平成 18 年度)

主査 山田洋一郎 (平成 18 年度)

主事 岸田裕一 (平成 18 年度)

調査員 福田光宏 (平成 18 年度)

整理作業及び報告書作成

主査 出山真次 (平成 19・20 年度)

主査 日高博司 (平成 19・20 年度)

主査 小川太志 (平成 19 年度)

主査 竹田享志 (平成 18～20 年度)

主査 結城 修 (平成 19・20 年度)

主査 松林豊樹 (平成 19・20 年度)

主査 高橋浩子 (平成 19・20 年度)

主事 大野義人 (平成 18・19 年度)

主事 福田 聡 (平成 18・19 年度)

主事 岸田裕一 (平成 19・20 年度)

主事 佐竹智光 (平成 19 年度)

調査員 金丸琴路 (平成 18 年度)

東九州自動車道発掘調査指導委員 (五十音順)

泉 拓良 (京都市大学)

小畑弘己 (熊本大学)

田崎博之 (愛媛大学)

広瀬和雄 (国立歴史民俗博物館)

本田道輝 (鹿児島大学)

柳沢一男 (宮崎大学)

調査指導・協力等 福宜田雅男 (文化庁)

清野孝之 (文化庁)

八木澤一郎 (鹿児島県埋蔵文化財センター)

内山伸明 (鹿児島県埋蔵文化財センター)

黒川悦弘 (鹿児島県埋蔵文化財センター)

福永若琥 (南さつま市埋蔵文化財センター)

宮崎市教育委員会

川南町教育委員会

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡の所在する川南町は、宮崎平野北端に位置し、東は黒潮が北流する日向灘を臨み、南は小丸川の北岸で高鍋町と、北は名貴川南岸で都農町と接する(巻頭図版2・4)。

町の北西部に位置する上面木山(標高1040m)からは丘陵が派生し、その東麓から海岸にかけて広がる唐瀬原・高城・国光原・川南・三財原等の14の段丘面が、町域の大半を占める。本遺跡が所在する高城段丘面は、小丸川北岸の下流域に、東西方向に細長く延び、小丸川支流の切原川支流に沿い、海岸方向に傾斜する。縁辺部は急崖となっており、隣接する沖御也とは比高約45mを測る(巻頭図版2・3)。

本調査区は、北東から南西に延びる。南及び西側は急崖に接し、東側は、現在は畑となる平坦地に接する。調査区北から南端部に向かって緩やかに下り、東から西崖に向かって緩やかに上る。地域住民からの聞き取りによると、調査区南端付近は茶畑が広がっていた。小丸川・切原川方向から吹き付ける冬の冷風が調査区南端部面に当たり、上空に吹き上がるために、南端付近の台地上の冷え込みは弱く、そのため茶畑に適しているらしい。本遺跡の崖下には、湧水の跡と思われる穴が点在し、切原川とともに水源利用の可能性がある。(文責：竹田)

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には、以前から多くの遺跡が周知されているが、近年の東九州自動車道関連の発掘調査によってより詳細な様相が分りつつある。ここでは、旧石器時代及び縄文時代の遺構・遺物が確認されている周辺遺跡を紹介する。なお、本遺跡以外の東九州自動車道(都農～西都賀)関連の発掘調査のうち、旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物が確認された遺跡については、第1表に示している。

旧石器時代は、国光原遺跡(40)では、A T上位で礫群が1基確認されるとともに、A T上下から石器が出土している。また、同一丘陵に位置する湯牟田遺跡(41)では細石刃等の出土が確認されている。

本遺跡北端、谷を挟んで隣接する西ノ別所遺跡(42)からは、ナイフ形石器等が確認されている。

小丸川を挟んで位置する野首第1遺跡(46)、野首第2遺跡(47)は、礫群とともに、多種多様な石器群が出土する旧石器時代の大規模遺跡が存在する。

また、南中原第1遺跡(48)では、A T下部黒色層のさらに下層から打製石斧が1点出土している。老瀬坂上第3遺跡(50)では礫群、ナイフ形石器等が確認されている。東九州自動車道関連の調査ではないが、本遺跡より400mと近接する尾花坂上遺跡(81)では二次加工剥片等が確認されている。

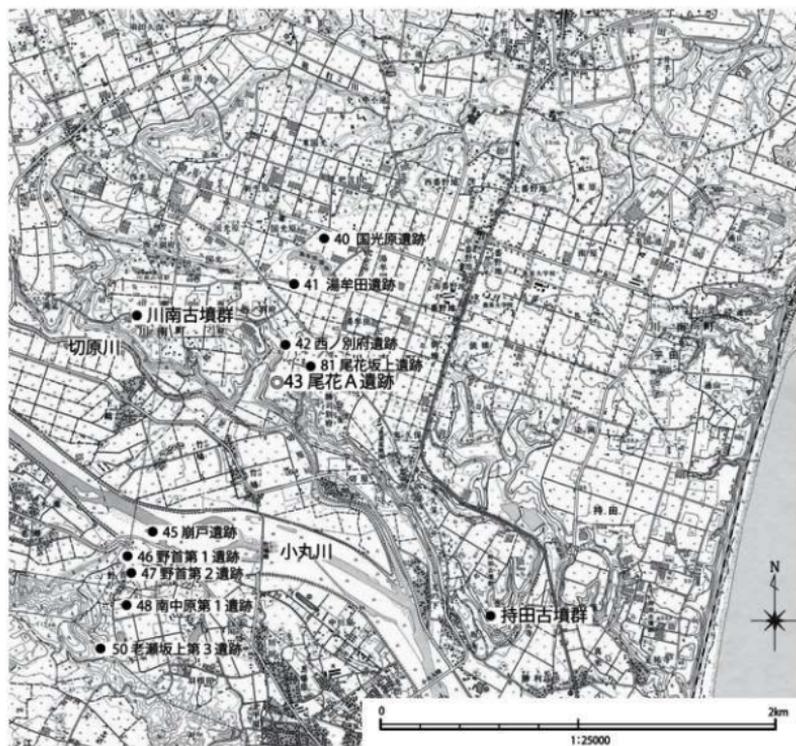
旧石器時代に触れた遺跡の多くからは、縄文時代早期の遺構・遺物が確認され、遺構数、遺物量は旧石器時代に比べて顕著的に増加する。

国光原遺跡では、縄文時代草創期～早期の集石遺構、竈穴、土坑が検出されている。遺物は縄文時代草創期では爪形文土器、縄文時代早期では壺ノ神式土器、下刺釜式土器等が出土している。湯牟田遺跡では、縄文時代早期の無文土器、押型文土器が出土している。西ノ別所遺跡では、縄文時代早期の集石遺構、押型文土器、条痕文土器、無文土器が確認されている。尾花坂上遺跡では、調査面積380mから34基の集石遺構が確認され、深さが70cmを超えるような集石遺構も存在することが特徴的である。

野首第1遺跡では早期の集石遺構、縄文時代早期～晩期の遺物が、野首第2遺跡では集石遺構、竈穴、ピット群、陥し穴状土坑が確認されている。野首第2遺跡の遺物としては、縄文時代早期～晩期の土器が出土し、縄文時代晩期の土器には、無刻目突帯文、刻目突帯文の深鉢等がある。

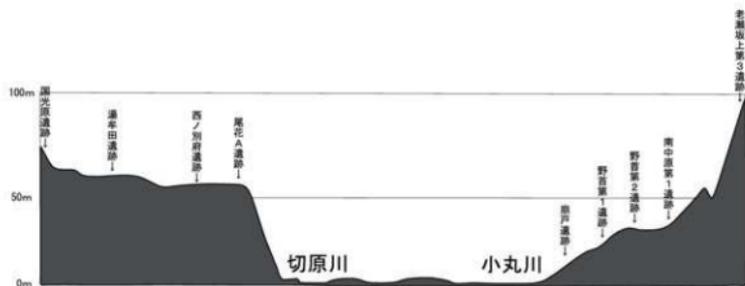
南中原第1遺跡では縄文時代早期、縄文時代後期～晩期の遺物が出土している。老瀬坂上第3遺跡では、縄文時代草創期～早期、縄文時代晩期の土器、石器等が出土している。戸戸遺跡(45)では、縄文時代草創期～早期の遺構・遺物が確認されている。

(文責：竹田)



40 国光原遺跡 41 湯牟田遺跡 42 西ノ別府遺跡 43 尾花A遺跡 45 崩戸遺跡 46 野首第1遺跡 47 野首第2遺跡
48 南中原第1遺跡 50 老瀬坂上第3遺跡 81 尾花坂上遺跡 [40～50は東九州自動車道(都農～西都間)開通遺跡]

第1図 周辺遺跡位置図



第2図 遺跡間断面模式図

第1表 東九州自動車道(都農～西都間)関連旧石器時代・縄文時代遺跡一覧表

(中略)縄文文化は宮崎県埋蔵文化財センターを示す)

番号	遺跡名	所在地	旧石器	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	報告書
2	尾立第2	都農町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第169集 2008
4	新草原	都農町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第147集 2007
5	尾立第3	都農町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第147集 2007
8	立野第5	都農町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第156集 2007
9	立野第1	都農町	○		○					県埋文セ 発掘調査相関報告書 第131集 2006
10	立野第2	都農町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第156集 2007
14	八幡第2	川南町		○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第148集 2007
15	上ノ原・北分	川南町			○					県埋文セ 発掘調査相関報告書 第131集 2006
16	銀座第1	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第120集 2006
17	銀座第2	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第115集 2005
19	銀座第3A	川南町			○					県埋文セ 発掘調査報告書 第80集 2003
20	登り口第1	川南町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第141集 2007
21	登り口第2	川南町			○					県埋文セ 発掘調査報告書 第141集 2007
24	市納上第1	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第121集 2006
25	市納上第2	川南町			○	○	○	○	○	県埋文セ 発掘調査報告書 第170集 2008
27	市納上第4	川南町						○		県埋文セ 発掘調査報告書 第121集 2006
29	虚空蔵免	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第122集 2006
30	赤石・天神本	川南町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第122集 2006
31	天神本第2	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査相関報告書 第123集 2006
33	中ノ途第1	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第143集 2007
34	中ノ途第2	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第167集 2008
35	中ノ途第3	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第144集 2007
37	前ノ田村上第1	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第116集 2005
38	前ノ田村上第2	川南町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第161集 2007
40	国光原	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第149集 2007
41	湯牟田	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第107集・154集 2005・2007
42	西ノ別野	川南町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第124集 2006
43	尾花A	川南町	○	○	○	○	○	○	○	本報告書
45	瀬戸(青木)	高鍋町		○	○	○				県埋文セ 発掘調査報告書 第103集 2005
46	野首第1	高鍋町	○		○	○	○	○		県埋文セ 発掘調査報告書 第86集・157集 2004・2007
47	野首第2	高鍋町	○		○	○	○	○		県埋文セ 発掘調査報告書 第158・172集 2007・2008
48	南中原第1	高鍋町	○		○	○	○	○		県埋文セ 発掘調査報告書 第162集 2007
50	老瀬坂上第3	高鍋町	○	○	○	○	○	○		県埋文セ 発掘調査報告書 第118集 2005
51	下耳切第3	高鍋町	○		○	○	○	○		県埋文セ 発掘調査報告書 第125集 2006
52	北牛牧第5	高鍋町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第80集 2003
53	鹿木戸第1	高鍋町			○					県埋文セ 発掘調査報告書 第92集 2004
54	鹿木戸第2	高鍋町		○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第100集 2005
55	鹿木戸第3	高鍋町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第105集 2005
56	鹿木戸第4	高鍋町	○	○	○			○		県埋文セ 発掘調査報告書 第126集 2006
58	小笠第1	高鍋町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第159集 2007
60	牧内第1	高鍋町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第163集 2007
61	牧内第2	高鍋町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第108集 2005
62	吾明寺第1	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第102集 2005
63	吾明寺第2	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第84・94集 2003・2005
64	東畦原第1	新富町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第127集・128集・140集 2006・2007
65	東畦原第2	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第98集 2005
66	東畦原第3	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第87集 2004
67	西畦原第1	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第82集 2004
68	西畦原第2	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第82・106・109集 2004・2005
69	上新簡	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第129集 2006
71	勤大寺	新富町	○	○	○					県埋文セ 発掘調査報告書 第110・153集 2005・2007
72	永年田第1	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第114集 2005
73	永年田第2	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査報告書 第134集 2006
74	尾小原	新富町	○		○	○		○	○	県埋文セ 発掘調査報告書 第117・133・150集 2005・2006
75	向原第1	新富町	○		○				○	県埋文セ 発掘調査報告書 第119集 2006
77	藤山第1	新富町	○		○				○	県埋文セ 発掘調査報告書 第142集 2007
78	藤山第2	新富町	○		○					県埋文セ 発掘調査相関報告書 第49集 2001
79	宮ノ東	西都市	○	○	○	○	○	○	○	県埋文セ 発掘調査報告書 第173集 2008

第三章 調査の方法と経過

第1節 確認調査の概要

本遺跡における確認調査は、都合3回に分けて実施した。調査期間及び面積は第3図のとおりである。

以下、調査毎にその内容を記す。

1回目の確認調査は、調査対象地の南半部（一次・三次調査B・C区）について行った。調査対象地は従前茶畑等の耕作地であり、既に多くの弥生土器等が表層採集されていたことから、まず、1m×1mの人力によるトレンチを数箇所掘削して土層や遺構・遺物の状況を確認した。各トレンチでは表土下に遺物を多く含むⅡ層と安定したⅢb層の堆積が確認された。そこで、調査区の形状及び地形から、南北及び東西方向を基本とする幅4m×長さ20～25mのトレンチ（第3図T1～6）を設定してⅢb層上面までの掘削を開始した。各トレンチではⅡ層中から多量の遺物が確認されたが、樹根等の影響により、Ⅱ層中における遺構検出は困難であった。Ⅲb層上面においては、堅穴住居跡30軒以上、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構等が確認されたが、遺構自体の掘削は本調査時に行うこととしたため、この時点では遺構の時期は不明であった。しかし、遺物には多量の弥生～古墳時代の土器・石器、少量の縄文時代晩期の土器、古代の須恵器、中近世の陶磁器等がみられたことから、弥生～古墳時代にかけての集落を中心とする大規模な複合遺跡であることが予想された。

なお、T1～T6では遺構密度が高かったため、より下層についての確認調査も行わなかった。しかし、T1・2では耕作による攪乱がⅢb層下まで及んでおり、IV層（明黄褐色土）上面で集石遺構が確認されていた。そこで、IV層以下の状況を確認する目的で改めて4m×4mのトレンチを7箇所（第3図T7～13）設定して調査を行った。その結果、T7においてIV層上面付近から集石遺構と縄文時代早期の土器、T8でⅢb層直下から散礫が確認された。このことから、調査区南側（一次調査区）付近には縄文時代早期の遺構・遺物が存在する可能性が高いと予想された。その他のトレンチでは縄文時代早期以前の遺構・遺物を確認することはできなかったが、

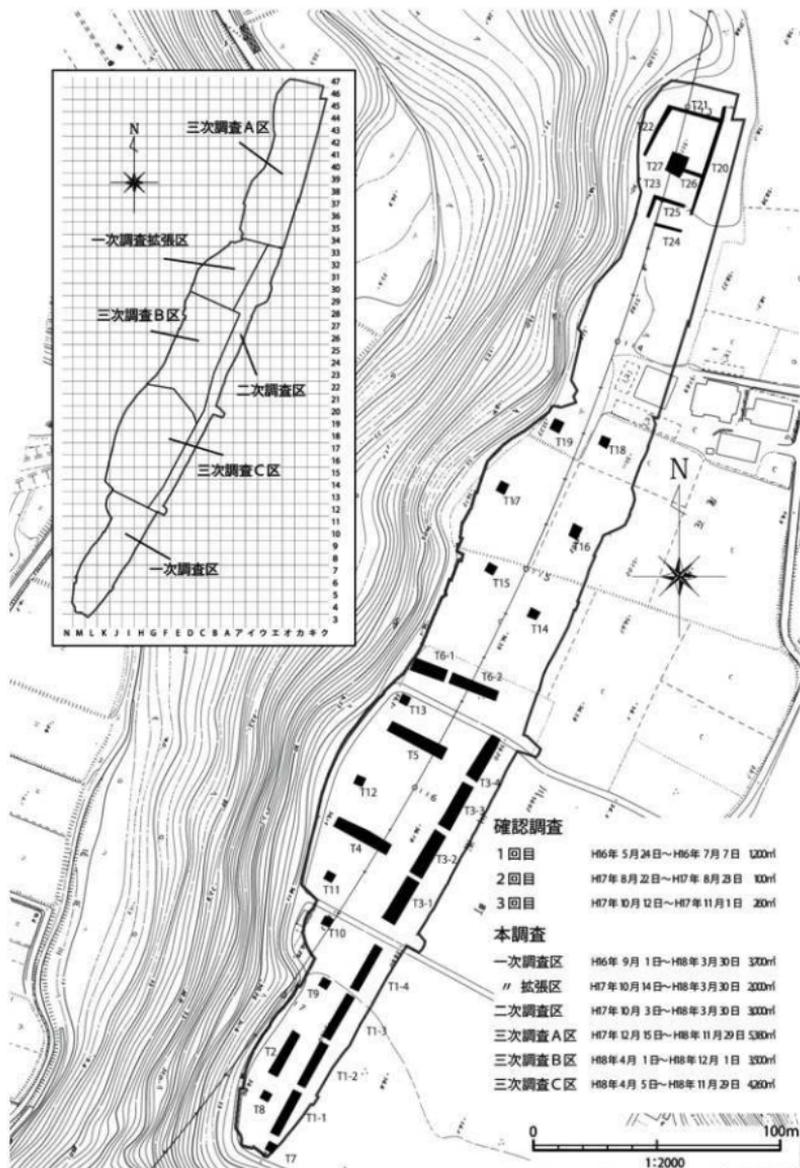
いずれも局所的な確認にとどまっており、弥生～古墳時代を中心とするⅢ層上面での遺構調査が終了しなければこれ以上の確認は困難であると判断されたため、Ⅲ層以下については、本調査時に変更して確認することとして調査を終了した。

2回目の確認調査は、後述する一次調査と併行して、調査対象地の中央部付近について行った。現況の畑等の区画に応じて4m×4m、4m×5mのトレンチを6箇所（第3図T14～19）設定して調査を進めた。いずれのトレンチにおいてもⅢb層上面において堅穴住居跡とみられる遺構が確認されたため、調査対象地の南側2/3程度の範囲には弥生～古墳時代にかけての集落が連続と広がっていることが確実となった。また、前記同様、縄文時代晩期から中近世にかけての遺物が少量ながら出土した。

なお、ここではⅢb層上面における遺構密度が高かったため、それ以下の層位に関する確認調査は実施できなかった。

3回目の確認調査は後述する一次・二次調査区と併行して、調査対象地の北端部について行った。東西方向及び南北方向を基本とする8箇所のトレンチ（第3図T20～27）を設定して調査を進めた。トレンチでは全てに著しい攪乱がみられ、深いところでは現地表から15m程下のX層まで掘削が及んでいる部分もみられた。トレンチの大半では、表土直下にIV、V層がみられ、既にかかなりの削平を受けていることが伺われた。この削平や攪乱の影響からか、これまでの確認調査で多く検出された弥生～古墳時代の遺構・遺物ほとんどみられなかった。しかし、この調査では、前回までほとんど把握できなかったIV・V層の状況が確認され、調査区北端部にも焼礫や剥片等の旧石器時代から縄文時代早期の遺物が比較的多く分布することが明らかとなった。

以上、3回に渡った確認調査の結果、調査対象地全域に旧石器時代～近世に及ぶ複合遺跡の存在が確認され、全面的に本調査を実施することとなった。ただし、IV層以下については、Ⅲ層上面の調査後にトレンチで遺構・遺物を確認した上で、必要に応じて調査をすることとした。（文責：松林）



第3図 確認調査トレンチ位置図及び調査区・グリッド設定図

第2節 発掘調査の概要

1 調査区及びグリッドの設定

本遺跡は調査対象面積が広く遺構密度が高かったため、排土置き場や事務所用地の確保、調査期間等の兼ね合いから調査対象地を大きく6分割して調査を進めた。調査区の分割状況及び各調査区における調査期間・調査面積は第3図のとおりである。

なお、各調査区では、排土置き場や進入路確保のため、便宜的な小調査区を設定して調査を進めた。

また、調査対象地全域に対して国土座標（新測地系）に基づいた10m×10mのグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットもしくはカタカナを付与してマス目の北西隅の交点をグリッド名とした。

2 調査の方法

■遺物包含層掘削と遺構検出

確認調査の結果から、まずⅡ層における遺構検出を行ったが、地山層（Ⅱ層）と遺構埋土の峻別が困難を極め、やむなくⅢb層上面において遺構検出を行った。ただし、三次調査A区の北側や一次調査区の南側ではⅡ層下にⅢb層が残存していない部分があり、その部分ではⅡ層下に堆積していた地山層上面において遺構検出を行った。この結果、調査区の大半では縄文時代前期～近世までの遺構を同一面で検出する形となり、遺物が出土しなかった遺構の時期を決定することが事実不可能となってしまった。

なお、Ⅱ層中から出土した遺物の取り上げはグリッドを更に4分割して北西をa、北東をb、南西をc、南東をdとして一括取り上げを行った。ただし、遺物の集中する部分や遺物の形状から時期の特定が可能であったものについては、原位置に留めた状態で地山層まで掘り下げ、極力、下位に存在する遺構へ帰属させる努力をした。

前節で述べたように、三次調査A区の北側を除いてはⅣ層以下の状況が必ずしも把握できていなかった。しかし、ほとんどの調査区で弥生時代～古墳時代の集落が広がっていたため、竪穴住居跡等の掘削がⅣ層以下まで及んでおり、層位的な状況は容易に確認できた。また、それら縄文時代前期以降の遺構

壁面や基底面、遺構埋土に焼礫や遺物等が見られたことから、ある程度Ⅳ層以下の遺構・遺物の分布状況も予測可能であった。Ⅳ層については、第22図のように調査区中央部（三次調査B～C区）とⅢb層上面検出遺構の密度が高かった部分を除き、遺構検出及び包含層掘り下げを行った。

Ⅳ層以下については、二次及び三次調査A区北半部と縄文時代早期の遺構・遺物が確認されたグリッドを中心に掘り下げを行った（第7図）。

Ⅳ層以下の調査の結果、調査区の西側縁部及び一次調査区を中心として縄文時代早期の集石遺構が検出され、三次調査A区北半部からは旧石器時代の遺物が一定量出土した。

■遺構掘削

遺構の掘削については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半截もしくは4分法により埋土の状況を確認しながら掘削することを基本とした。ただし、竪穴住居跡や遺構同士の切り合いが激しい部分については、先行してサブトレンチを掘削し、床面の認定や遺構の先後関係を認定した上で掘削を進めた。

なお、貼床を有する遺構については、床面上の調査後、貼床を除去し、地山面までを完掘した。

また、フローテーションによる炭化種夾の回収を目的として、多くの遺構床面付近の土をサンプリングした。

■作図記録

遺構の作図記録に関しては、1/10もしくは1/20個別図作成を基本としたが、小穴や溝状遺構については、平板測量による1/50や1/100の遺構分布図を作成し、断面記録が必要な場合は個別図を作成した。ただし、遺構密度が高かった一次調査区及び一次調査拡張区、調査区幅が狭く遺構の空容把握が困難であった二次調査区ではグリッド杭を基軸とした1/20割付図を作成した。

なお、個別図作成の際に設定した主軸ポイントについては、トータルステーションにより座標値を記録している。

また、集石遺構が多数検出された一次調査区では、(株)国際航業に測量業務を委託し、1/10 個別図作成を行った。

■写真記録

全調査区ともに 35mm 白黒ネガ・カラーリバーサルフィルムを用いた撮影を基本として、一部中判カメラによる白黒ネガ・カラーリバーサルフィルム撮影を行った。また、メモ記録写真として 35mm カラーネガフィルム及びデジタルカメラによる撮影を併用した。各撮影に使用した器材は以下のとおりである。

ニコン F100	35mm 白黒ネガ・カラーリバーサル
ペンタックス 6×7 II	120 白黒ネガ・カラーリバーサル
トヨフィールド 4×5	白黒ネガ・カラーリバーサル
コニカ 現像監督	35mm カラーネガ
ソニーサイバershoot	デジタル 320 万画素

なお、全調査区において業者委託による複数回の空中写真撮影を行った。各調査区における委託業者は以下のとおりである。

一次調査区	(有)スカイサーベイ九州 (有)ふじた
二次調査区	(有)スカイサーベイ九州
三次調査A区	(株)九州航空
三次調査B区	(有)ふじた
三次調査C区	(有)スカイサーベイ九州

3 調査の経過

尾花A遺跡の調査は平成16年度から18年度に渡って実施した。以下、年度毎に調査の経過を記す。

[平成16年度]

5月から実施した確認調査(1回目)の範囲の内、南端部に当たる3,700m²について、同年9月1日から一次調査を開始した。確認調査結果から予想されたとおり、Ⅲ層上面で多数の遺構が確認されたため、平成17年度まで調査を継続することとなった。

[平成17年度]

継続調査となった一次調査区では、8月からⅣ層下の調査に着手したが、当初の予想を上回る集石遺構等が確認されたため、調査期間の長期化が懸念さ

れるとともに、残りの調査対象地への早急な対応が必要となった。そこで、残りの調査対象地の一部について、8月に2回目の確認調査を実施した。

9月には一次調査区への進入路や排土置き場の確保、今後の調査への配慮から調査対象地の東側の幅約10m長さ約300m程の細長い調査区を設定して二次調査に着手した。二次調査区では調査区全域についてⅧ層まで掘削したが、縄文時代早期の集石遺構が4基確認されたのみで、丘陵中央部付近では縄文時代早期以前の遺構・遺物が少ない状況が明らかとなった。

二次調査着手後、一次調査区ではⅣ層以下の調査を進める一方で、2回目の確認調査対象範囲を一次調査拡張区として、10月14日から調査に着手した。Ⅲb層上面では非常に高い密度で遺構が検出されたが、Ⅳ層以下ではわずかな遺構・遺物しか確認されなかった。

10月には調査対象地の北端部についても確認調査(三次)を行い、12月15日から三次調査A区として調査に着手した。この調査区は削平が激しく、縄文時代前期以降の遺構・遺物はあまり確認できなかった。しかし、Ⅳ層以下の遺存状況は比較的良好で、特に本遺跡における旧石器時代の遺物の大半がこの調査区からの出土である。

一次(拡張区を含む)・二次調査区については本年度で完全に調査を終えたが、三次調査A区については調査区の北半部のみを終了し、南半部は次年度に継続調査することとなった。

[平成18年度]

4月当初から三次調査A・B・C区の3箇所を同時着手した。

三次調査A区では北半部ほどではなかったが削平を受けており、Ⅲb層が部分的にしか遺存していなかった。しかし、北半部とは異なり、表土下の地山層上面で弥生時代から古墳時代の遺構が多く検出された。その後、遺構密度が低かった部分や既に集石遺構が露出していた部分等についてⅣ層下の調査を進めたところ、調査区西側縁辺部を中心として縄文時代早期の遺構・遺物が多数確認された。

三次調査B区ではII層がある程度安定して堆積していたため、II層中における遺構検出を試みたが、地山と埋土の識別が困難であったため、やはりIII b層上面において遺構検出を行った。本調査区のIII b層上面における検出遺構は非常に多く、一次調査区に匹敵する程の遺構密度であった。

III b層上面の調査終了後、遺構密度が低かった部分や、調査区西側の台地縁辺部を中心にIV層以下の調査を進めた。調査の結果、やはり調査区西側を中心にV層上面で20基程の集石遺構が検出された。

なお、本調査区ではVI層以下にXV層が堆積しており、旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性は低いと判断されたため、土層確認トレンチを除いてVI層以下の掘削は行わなかった。

三次調査C区ではB区に隣接する北側で表土下にII層の堆積がみられたが、一次調査区に隣接する南側では礫層が確認され、III b層の堆積はみられなかった。しかし、この部分でも縄文時代前期以降の遺構が検出されたことから、旧地形自体が高かったために礫層よりも上層の土が流出した可能性が高いと考えられた。本調査区でもIII b層もしくは表土下の地山層で遺構検出を行ったが、遺構は調査区北半部に集中する傾向がみられ、南半部は比較的少なかった。

III b層上面の調査終了後、IV層について掘削を行い、調査区西側を中心に縄文時代早期の集石遺構を32基検出した。V層以下については良好な堆積がみられた部分をグリッド単位で掘り下したが、旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。

本年度に実施した3箇所の調査は12月1日をもって全て終了した。(文責:松林)

第3節 整理作業及び報告書の作成

1 整理作業

尾花A遺跡の調査が始まった平成16年度は東九州自動車道(都農～西都賀)建設に伴う発掘調査の全盛期で、当センターにおける整理作業もピークを迎えていた。しかし、尾花A遺跡では、確認調査等の状況から多量の遺物が出土することが予想されたため、調査事務所と整理作業棟(以下、現地整理棟)を併設して一部の作業を行うこととなった。したがっ

て、現地調査が終了した調査区から順次作業が開始され、結果的に全ての整理作業を調査区毎に進めることとなった。以下、整理作業行程毎にその方法と経過を記すが、ここでは重複する部分を除き、本書で報告する旧石器時代から縄文時代の遺構・遺物に関する記憶に留める。

■水洗作業

一次・二次・三次B・三次C調査区の遺物水洗は、それぞれの現場事務所併設した現地整理棟で行った。現地整理棟で積み残しとなった遺物及び三次A調査区の遺物については、埋蔵文化財センター本館(以下、本館)において水洗作業を実施し、平成19年3月までに全て終了した。

■注記作業

一次・二次調査区の遺物注記は現地整理棟において実施したが、一次調査分については終了しなかったため、本館に持ち帰って実施した。その他の調査区については全て本館で実施したが、作業効率の向上を図るため、自動注記機を賃借して作業を進め、平成19年10月に全てを終了した。

なお、調査区毎に作業を進めたため、遺跡名略号については、以下のようにした。

- オバナA = 一次調査区・拡張区(本報告ではA1と表記)
- オバナA2 = 二次調査区
- オバナA3 = 三次調査A区
- オバナA4 = 三次調査B区
- オバナA5 = 三次調査C区

また、遺構名略号についてはSを基本としたが、集石遺構についてはS1とし、一部の土坑、灰穴については、SC(土坑)、SP(灰穴)としたものもある。

■土器接合

各調査区における遺構・グリッド・層位毎に行った。ただし、隣接する調査区にまたがる遺構やグリッドについては、同層に接合を試みた。

なお、縄文土器については、水洗から接合までの段階で陶師抽出し、出土地点や層位、土器自体の特徴から分類を行い、その上で接合を試みた。

■石器整理

石器については、全てを器種及び石材別に分類して一覧表を作成し、形態や出土した層位・遺構から縄文時代以前の遺物と考えられるものを抽出した。

■燧石整理

各調査区では、集石遺構の構成礫について、現場で総重量や石材の確認を行った。礫については計測後廃棄したが、その際、使用痕等が認められたものについては持ち帰り、石器として整理した。

■その他の整理作業

本遺跡の調査では、全調査区にわたり遺構埋土のサンプリングを行った。それらの試料は、三次調査B区事務所を設置したフローテーション用の機器による1次選別後、本館に持ち帰って肉眼及び実体顕微鏡による2次選別を行い、多数の炭化種実等を抽出した。

また、遺構埋土中から出土した炭化物等についても自然科学分析用の試料として持ち帰った。

2 報告書作成

■遺物の選別

土器は接合段階の分類を元に更に細分し、遺存状況や遺構との関係等に配慮して報告書掲載遺物を選別した。

石器も整理段階における分類の細分化を試み、その上で、遺存状況や形態、遺構との関係等に配慮して報告書掲載遺物を選別した。

■遺物実測等

土器の実測・拓本については調査員・整理作業員で行った。

石器の実測についても調査員・整理作業員で行ったが、打製石鏃等の刺鏃の細かい石器については九州文化財研究所、㈱バスコに業務委託した。

■製図

遺物・遺構実測図の製図はパソコンとソフトウェアを用いたデジタルトレースを基本として、調査員

と整理作業員が行った。ただし、集石遺構図については製図ペン（ロットリング）を用いて製図したものをスキャナーでパソコンに取り込み、ソフトウェアで加工したものもある。

また、拓本についてもスキャナーでパソコンに取り込み、ソフトウェアで加工した。

なお、デジタルトレースにおいて使用したソフトウェアは、㈱アイシン精機株式会社（現：㈱CUBIC）製のトレースくん、Adobe社製のIllustrator(CS2)、拓本の加工にはAdobe社製のPhotoshop(CS2)を使用した。

■遺物写真

遺物写真は1000万画素相当のデジタルカメラで撮影し、Adobe社製のPhotoshop(CS2)で加工した。ただし、巻頭カラーの遺物写真等、4×5サイズの中版カメラによってフィルム撮影したものもある。

■自然科学分析

2次選別した炭化材・炭化種実について、放射性炭素14年代測定（β線計数法・AMS法）、及び樹種判定、種実判定を㈱古環境研究所に業務委託した。

■原稿作成

原稿はAdobe社製InDesign(CS2)によって編集した。写真図版についても、Adobe社製InDesign(CS2)で編集を行った。なお、遺構写真等のポジフィルム原稿については、印刷業者に取り込みと色分解を依頼し、そのデータを用いて編集を行った。

■収録前整理

収録に向けての整理は本書刊行後も継続して行う予定である。

遺物に関しては、①本書に実測図を掲載した遺物、②実測図は掲載していないが、一覧表や遺構の評価にあたって参考とした遺物、③その他の遺物に区分している。なお、本書の作成に使用した原稿等についてはデジタルデータで保存している。

(文責：松林)

第4節 教育普及活動

県民の埋蔵文化財センター業務への理解や埋蔵文化財への愛着や保護思想の高揚を図るため、尾花A遺跡では以下のような教育普及活動に取り組んだ。

1 現地説明会

平成17年度と平成18年度にそれぞれ1回実施した。1回目は、平成18年2月19日(日)に二次調査区で行った。主な内容は、「竪穴住居」「周溝式遺構」についての説明であり、天野主事が担当した。参加者は110名であった。

2回目は、同年8月20日(日)に三次調査A区・B区・C区の各調査区でテーマを設定して行った。

A区では「炭化材からわかる昔の暮らし」というテーマで、竪穴住居の構造、炭化材・焼失住居の説明を行い、結城主事が担当した(写真1)。

B区では「土層でわかる住居の歴史」というテーマで、土層断面と遺物の出土状況、土坑の説明を行い、日高主事が担当した(写真2)。

C区では「遺物からわかる人々の暮らし」というテーマで、出土遺物、石庭丁の使用法の説明を行い、出山主事が担当した。参加者は60名であった。

2 発掘体験

平成17年度と平成18年度に1回ずつ実施した。

1回目は、平成17年8月27日(土)に一次調査区で行った。参加者は32名であった。

2回目は、平成18年7月2日(日)に三次調査B区で行った。参加者は55名であった。

いずれも竪穴住居の遺構掘削を中心とした体験活動である。

3 発掘調査報告会

当センターの事業として、毎年、前年度に発掘調査を行った遺跡を対象に実施しているが、本遺跡では平成18年度及び平成19年度に報告を行った。

平成18年度は、「サビにかくれた真実」というテーマで、鉄器の種類、本遺跡での鉄器の出土事例について大野主事が報告した。参加者は114名であった。

平成19年度は、3つのテーマに沿って報告した。



写真1 現地説明会(平成18年度)の様子



写真2 現地説明会(平成18年度)の様子

まず「腐り落ちた住居からさぐる」というテーマで、竪穴住居に使用された木材の種類や用途、自然科学分析による竪穴住居の年代測定、竪穴住居の屋根構造について結城主事が報告した。

次に「尾花の土を洗ってびっくり!」というテーマで、フローテーションによって得られた成果(炭化種子等)について日高主事が報告した。

最後に「遺物からわかる人々の暮らし」というテーマで、遺物(砥石・磨石・石庭丁・煮炊き用の糞)の使用法について出山主事が報告した。

参加者は60名であった。

4 巡回展

発掘調査報告会と同じく、当センター事業として毎年行っているもので、主に遺物の公開や遺跡概要をまとめたパネルの展示を行っている。本遺跡のものについては、宮崎県立図書館において平成18年度は7月27日から8月6日、平成19年度は8月21日から9月17日の期間に行った。(写真・結城)

第IV章 調査の記録

第1節 基本順序

基本順序は第2表のとおりである。しかし、調査区全体で土層の堆積は一律ではなく、ここでは、調査区ごとに土層堆積の様相を説明する。なお、文中の層位名は、第2表の基本順序を使用している。

三次調査A区は北と南で土層の堆積が異なる。詳述すると三次調査A区北は、現代の植林等による削平を受け、III b層 (KAh) 上位は北端部二次堆積を残してほとんど残存していない。また、他の調査区ではほとんど認められないVI層が良好に認められる(写真図版1-5)。さらに、X (AD) ~XI層の堆積が良好に認められるのも特徴的で、特にX層は、白色細粒を含み水性堆積の様相を見せる(写真図版1-7)。

XI層下部は三次調査A区北から北上するに従い、現地形が下降し、層厚が厚くなる。このことと本遺跡と西ノ別所遺跡(本遺跡北に隣接する遺跡)を隔てる谷の存在から、三次A区北は、谷または窪地であったことが予想される。この窪地は、周囲の高い地点からのXI a層下部の流入で埋没し、現地形に近づくと考えられる。

三次調査A区南は、前述した三次A区北で認められた窪地は、三次調査A区の北側で消失する。現地形はほぼ平坦で、VI層下部の層厚は薄くなる。

二次調査区、三次調査B区・C区では、V層上位は良好に堆積する。しかし、南下するに従い、VI層下部の層厚が薄くなり、認識が困難となる(写真図版1)。XVI層(礫層)上面に1cm内外の黄褐色土層が見られる箇所が認められたが、これがVI~XV層であると思われる。二次調査区は、三次調査B区・C区の東側に位置するが、三次調査B区・C区屋敷から東に向かってなだらかに下る。また、V層上位の堆積もそれに従い、若干層厚が増す。

一次調査区は、本遺跡南端部に位置する。VI層下部の層厚はますます薄くなり、南端屋敷ではほとんど認識できない。

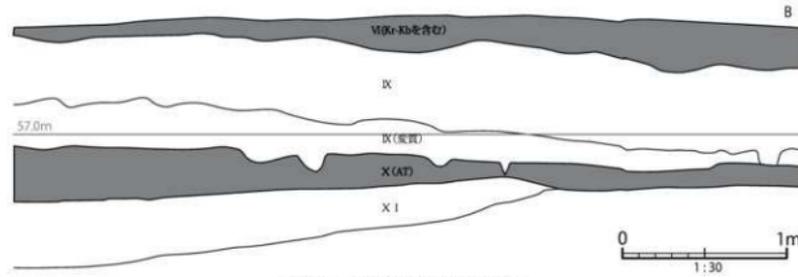
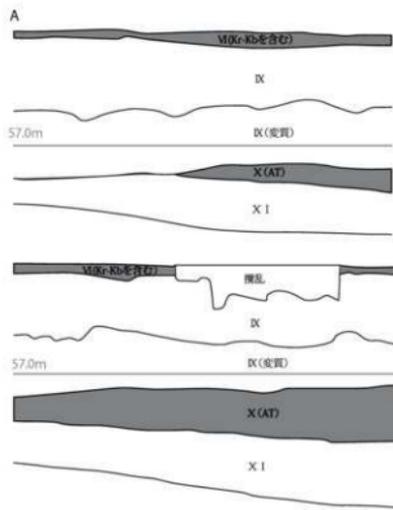
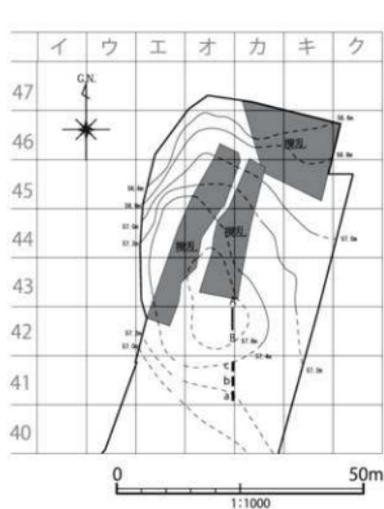
遺構・遺物は、V層~IX層で旧石器時代の遺物が出土したが、X層下部では確認されなかった。

縄文時代は、IV層上面で、縄文時代早期の遺構や遺物が検出され、II層中及びIII層上面で縄文時代前期~晩期の土坑等が検出されている。(文責:竹田)

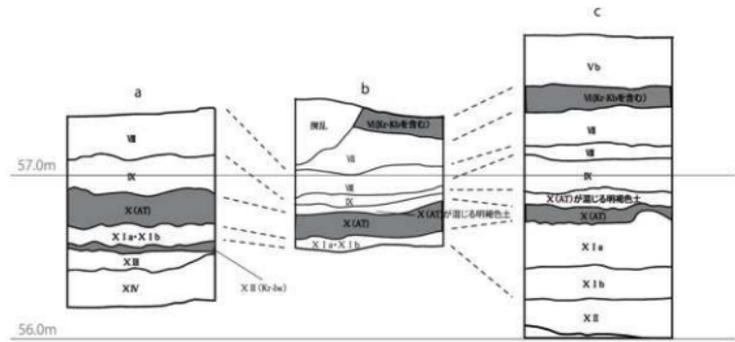
第2表 基本順序

層位名	層名	三次調査 A区北	三次調査 A区南	二次調査 区	三次調査 B区	三次調査 C区	一次調査 区	所見
I	表土	○	○	○	○	○	○	
II	クロボク	○	○	○	○	○	○	
III a	K-Ah 二次	○	○	○	○	○	○	縄文時代前期~晩期遺物包含層
III b	K-Ah	○	○	○	○	○	○	
IV	黒褐色	○	○	○	○	○	○	
V a	暗褐色	○	○	○	○	○	○	縄文時代早期期~早期遺物包含層
V b	褐色	○	○	○	○	○	○	
VI	Kr-kb を含む層	○	○			○		旧石器時代遺物包含層
VII	褐色		○			○	○	
VIII	明褐色		○	○				
IX	褐色	○						
X	AT	○						
XI a	黒色	○	○					
XI b	黒色	○	○					
XII	Kr-lw		○					
XIII	明黄灰色		○					
XIV	明黄褐色		○					
XV	赤褐色			○		○	○	
XVI	黄褐色			○		○		
XVII	礫層	○	○	○	○	○	○	

※ ○は残存する層を示す



第4図 三次調査A区土層断面図



第5図 才41Gr.土層断面図

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

Vb層下位の調査は、第7図に示した範囲で掘削を行った。5×5mのグリッド毎の掘削を中心としたが、Vb層下位のローム層からの出土はほとんどなく、出土した遺物の多くは弥生時代以降の遺構埋土中からであった。

しかし、そうした遺物出土状況の中で、調査区の北端にあたる三次調査A区に限っては、Vb層以下の良好な堆積が認められた。そこで、遺物の出土状況や旧地形について、まず、三次調査A区を中心に述べ、その後、調査区全体の遺構・遺物について詳述していくこととする。

なお、本節で取り扱う旧石器時代の遺物、特に石核や剥片類については、出土した層だけでなく、形態的な特徴やナイフ形石器等に使用される石材との関係から判断し、旧石器時代の遺物に抽出したものと存在している。(文責:岸田)

2 旧地形と遺物分布状況(三次調査A区)

三次調査A区は調査区全体の北端に位置し、調査区の中で最も標高の高い場所となる。西は急崖となり、北端に向かって地形は緩やかに傾斜している。

第1節でも触れた通り、三次調査A区は位置あるいは時期によって、旧地形の様相が大きく異なるという特徴があり、特にオ41Grを南北に切ったトレンチからは、地形の変化が観察される(第5図)。

詳述すると、この10m間の土層堆積状況では北から南に向かってATの堆積が不明瞭になる。トレンチ南端ではATあるいはAT下位にあたるXIa・XIb層の良好な堆積は認められないが、トレンチ北端ではAT以下の厚い堆積が確認される。さらに、このトレンチからは、およそ5万年前降灰とされる霧島イワオコシ軽石も確認されている。

このことは、AT降灰以前の旧地形の南方が高かったため、上層の土が流出した可能性が考えられ、標高の高い南側からの土砂等の流出により、谷となっていた北側が埋まることで、傾斜がなくなり、現在に近い地形となったと考えられる。

また、こうした状況を示すかのように、トレンチ北に位置する三次調査A区ではX層(AT)下位の調査を行ったものの、堆積の厚いXIa・XIb層内から遺物は1点も出土していない。

第7図は、三次調査A区のVa～VI層の遺物分布図である。丘陵の頂上部であったオ42Gr付近から四方に向かって傾斜に沿うように遺物が分布している。

旧石器時代の遺物は、全体的に散漫な印象であるが、VI層、VII層より出土している。出土した石器の中には、比較的まとまって出土している箇所がいくつかみられ、接合作業を行った結果、丘陵の頂上部から南に傾斜したオ41Gr周辺で珪質頁岩製の剥片6点の接合が確認されている(第11図45)。

また、頂上部から北東方向に緩やかに下った丘陵裾部のオ44Gr周辺でチャート製の剥片が集中して出土している。このチャート製石器の集中範囲には製品は含まれておらず、石器素材となる剥片や、石器の製作過程で生じた剥片のまとまりであると推定される。しかし、これらの石器は、付近より特徴の類似するチャート製の石鏝が出土していることや、他の地点と比べて縄文時代早期の集石遺構の残存率も高いことから縄文時代の石器製作にかかわる遺物と思われる。(文責:岸田)

3 遺構(第6図:写真版2)

遺構は、調査区南部(L4Gr)VI層下面で確認された礫群(A1S124)のみである。S124は、長径0.8m、短径0.5mの範囲にほぼ完形の円礫が20点まとまっており、遺構周辺からは、剥片等が比較的まとまって出土した。また、大半の礫には被熱によると思われる礫の赤化が確認された。

さらに、Vb層、VI層が良好に堆積する三次調査A区北半では、VI層より3基の礫群の可能性を残す遺構(A3S7、A3S11、A3S13)を検出している。

調査者によると、これらの遺構は、同一検出層より縄文時代早期の遺物が混在する状態であったことや、早期の集石遺構がVI層まで掘り込まれた可能性も想定されたとのことであったため、旧石器時代の遺構とはしていない。そのため、これらの遺構は第4節に掲載している。(文責:岸田)

4 遺物 (第8回~第12回:写真版42~44)

旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器、角錐状石器、細石刃、細石刃核等が出土した。これらの遺物は、弥生時代以降の遺物埋土中からの出土もあるが、ナイフ形石器等の遺物は調査区北端と南端で多く確認されている。以下、各器種別に記述を行う。

ナイフ形石器 (第8回1~18)

ナイフ形石器は一次調査区と三次調査区で計18点出土した。

1は黒曜石製の小型の幅広剥片を素材とし、両側縁から基部にかけて加工が施される。石器長軸に対し、刃部は斜軸となっている。また、刃部には微細な剥離痕が観察される。

2は小型の縦長剥片を素材とし、素材打面を基部に設定している。正面右側縁先端部には錯向剥離(インバースリタッチ)が施され、正面右の剥離面には、剥片素材石核の主要剥離面が残される。また、器長に比べ断面形が厚くなっている。

3、4、6、8、13~16は縦長剥片を素材とし、素材打面を基部に設定している。基部周辺に加工が施され、素材剥片の形状を刃部として利用している。また、4、6、13は刃部周辺、正面上半分に微細な剥離痕が観察される。

5は小型の縦長剥片を素材とし、素材打面を基部に設定している。正面基部左半部に錯向剥離による二次加工が施されている。7は、小型の横長剥片を素材とし、左側面にプランティングが施されている。正面左の剥離面に、剥片素材石核の主要剥離面が残される。また、先端部は欠損している。9は小型の縦長剥片を素材とし、素材打面を基部にしている。右側縁上半と基部周辺に二次加工が施され、素材剥片の形状を刃部に利用している。10は小型の縦長剥片を素材とし、素材打面を基部に設定している。正面右の剥離面に剥片素材石核の主要剥離面が残される。また、刃部には、微細な剥離痕が残っている。

11は縦長剥片を素材とし、素材打面を基部に設定している。両側縁に加工が施され、基部は鋭角となる。なお、左側縁は器体下半までプランティングが施される。12は横長剥片を素材とし、正面右側基部周辺に錯向剥離による二次加工が施され、正面左の剥離

面には剥片素材石核の主要剥離面が残される。なお、安山岩製のナイフ形石器は12のみである。

17は縦長剥片を素材とし、右側面にはネガ面側からの加工が施される。器長に対し、断面形は分厚く、正面中央に走る稜上には微細な剥離痕が確認される。

18は縦長剥片を素材とし、素材打面を基部に設定している。両側縁に加工が施され、右側縁は器体下半までプランティングが施される。また、先端部は欠損している。

角錐状石器 (第9回19~20)

角錐状石器は調査区北端のみで出土しているが、ナイフ形石器等と出土層が区別できる状態ではなかった。19は横長の剥片を素材としている。加工は正面、裏面ともに施される。20は石器の上下両端が欠損している。7cm大の縦長剥片を素材とし、裏面は素材剥片のボシ面となる。また、石器正面中央に走る稜上には細かな加工が施されている。

スクレイパー・二次加工剥片 (第9回21~27)

21は横長剥片側縁と末器に二次加工が施されている。VI層中の出土ではあるが、縄文時代以降の石器の可能性も残される。

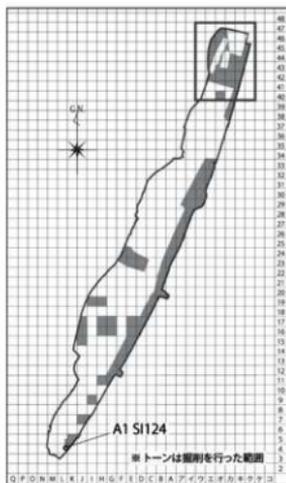
24~26は二次加工剥片である。24末端の割れ面と25上面の割れ面とが接合する。接合時の最大長は9.2cmとなる。24は欠損後、再び二次加工が加えられている。26は石器の長軸と並行するように、右側面はボシ面側から、左側面はネガ面側から二次加工が加えられている。

27は珪質頁岩製の掻器である。不定形剥片を素材とし、素材剥片末端に二次加工が施されている。

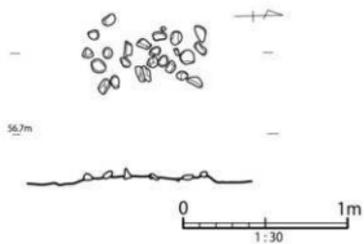
石核・剥片・礫石器 (第10・11回28~49)

石核、剥片は、調査区全体で出土している。石核、剥片の石材には、粉を吹くような風化を示すものや、灰色を呈しやはり風化が激しいホルンフェルス製のものと、ナイフ形石器等で多く使用が確認されている珪質頁岩製とに大別でき、その他の石材の使用は客体的である。

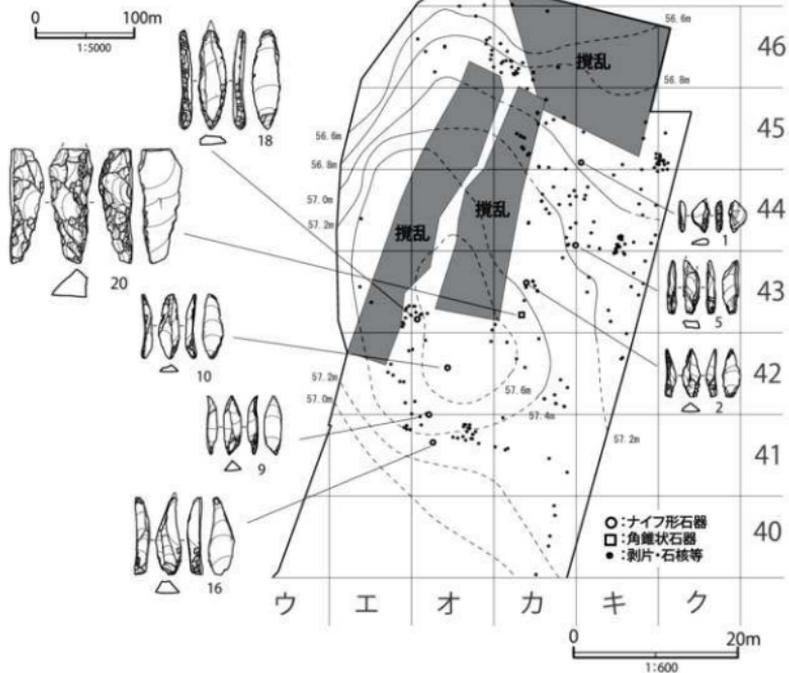
ホルンフェルス製の石器は縦長剥片が多く、大きいものでは16cmを超えるものも確認されるのに対して(36、40、41)、珪質頁岩製の剥片は、小振りなものが多い。



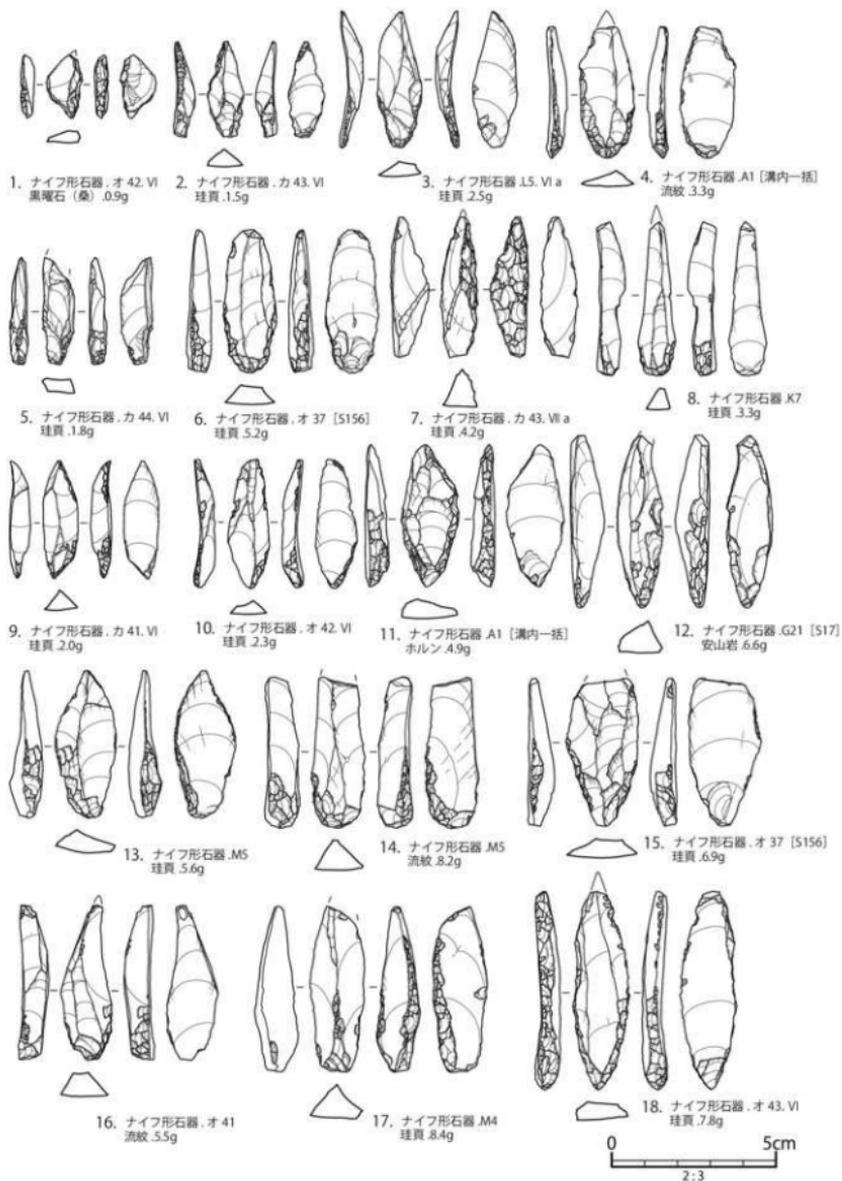
A1 S1124



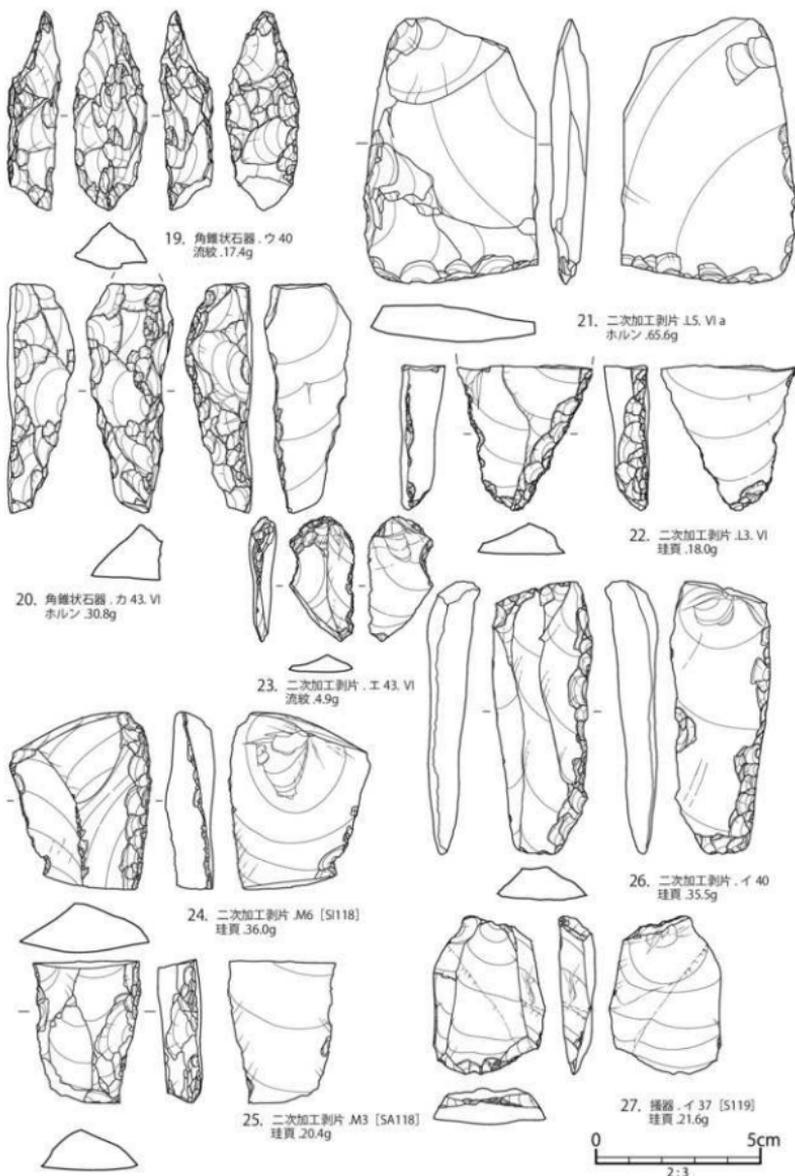
第6図 A1 S1124 実測図



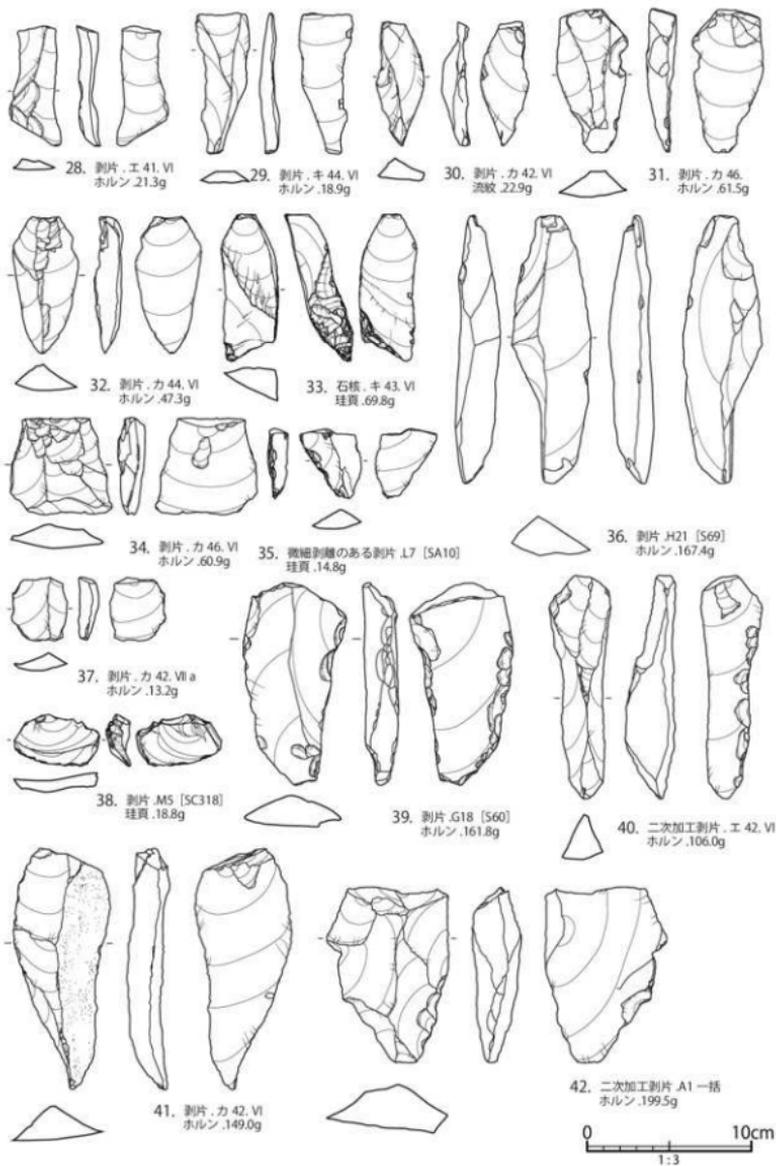
第7図 V層・VI層調査範囲及び三次調査A区遺物分布図



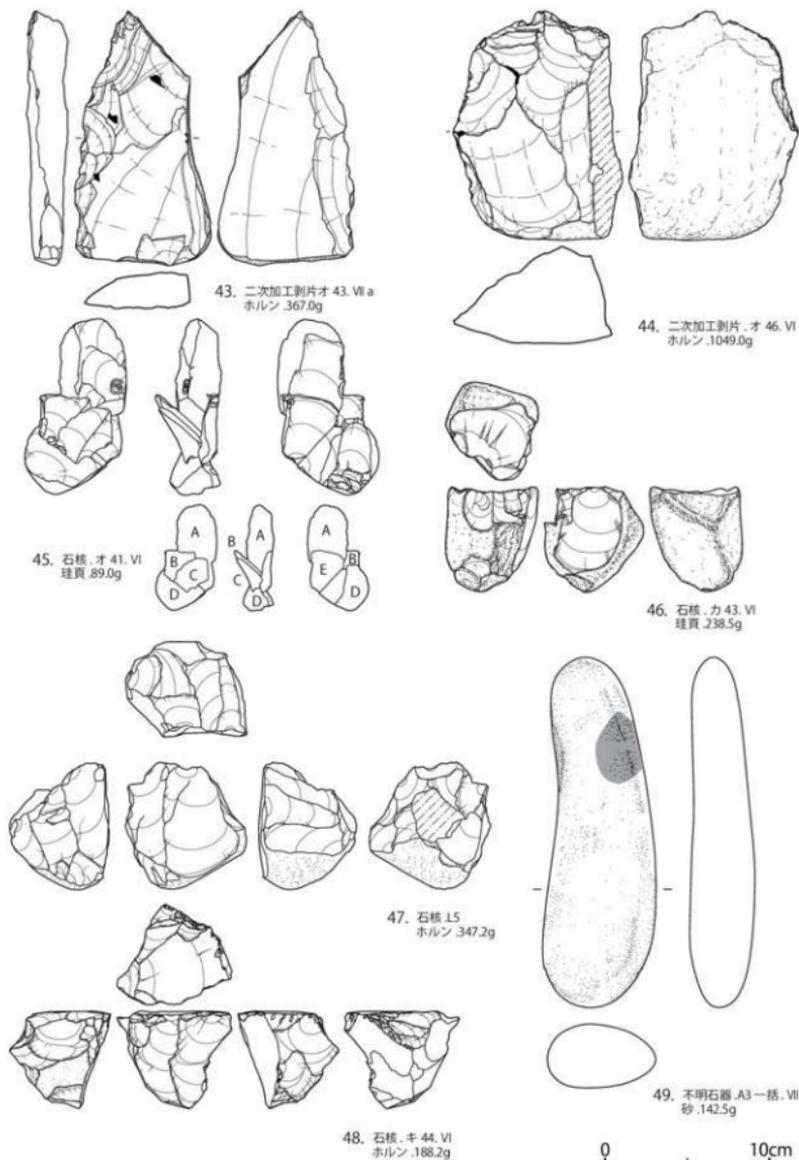
第8図 旧石器時代石器実測図(1)



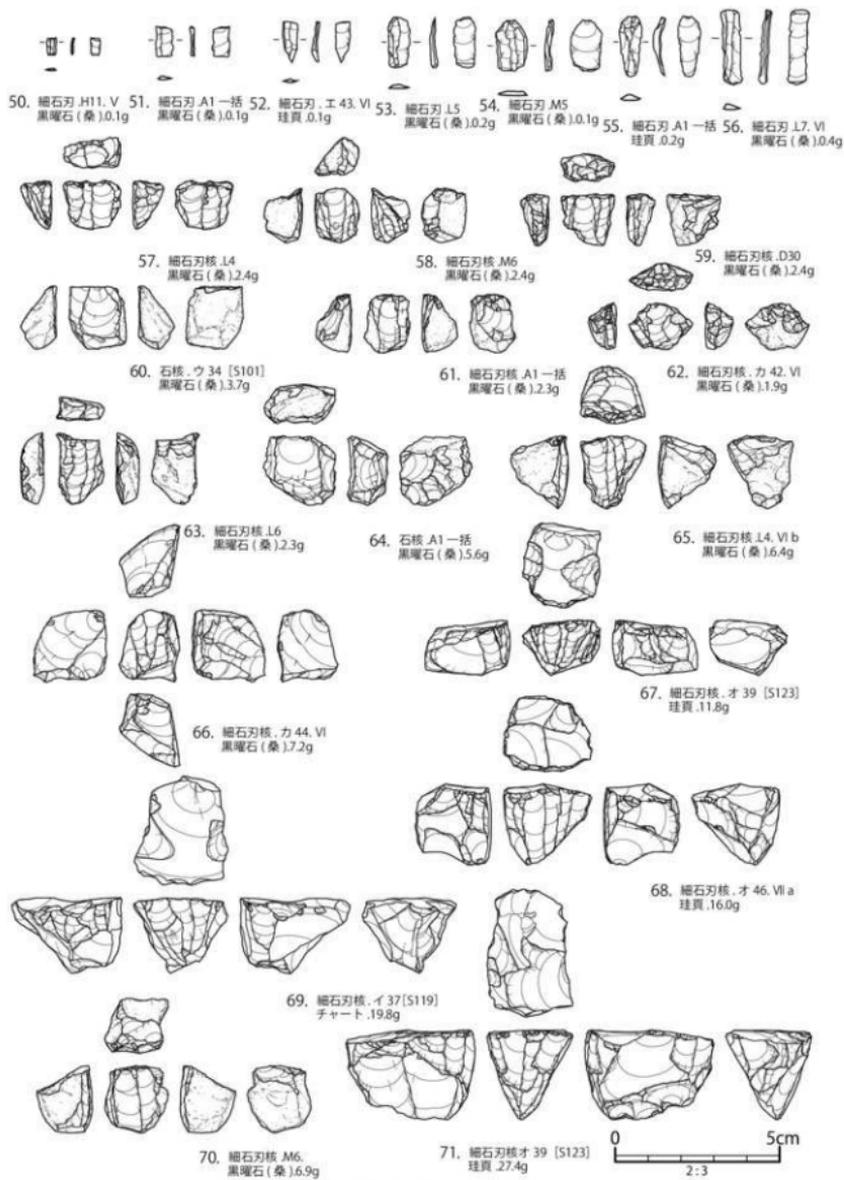
第9図 旧石器時代石器実測図(2)



第10図 旧石器時代石器実測図(3)



第 11 図 旧石器時代石器実測図 (4)



第12図 旧石器時代石器実測図(5)

38は瀬戸内弁法による横長剥片で、目的剥片に石核素材剥片の主要剥離面が取り込まれている。

石核は分割礫を使用し、縦長剥片あるいは幅広剥片が剥離されている(46～48)。3点のみ図化したのが、遺跡より出土した石核は、打面転移を行うか否かに違いはあるが、平坦打面から剥片剥離を行うことで共通している。

44は大形の円礫を素材とし、礫面からの二次加工により整形が行われている。なお、石器右側面は節理のために生じた割れによるものである。44と同じ特徴を持つ石材は、ナイフ形石器や剥片等、旧石器時代の石器としたものからはほとんど確認されていないが、出土層位がVI層であることから旧石器時代の遺物と判断している。そのため、21と同じように旧石器時代以降の石器である可能性を残している。

45は剥片どうしの接合資料である。珪質頁岩製で、素材となった石材には、巻貝と思われる化石が混入する。剥片剥離工程を復元すると、角が叩かれた円礫に対し、礫面より2枚の幅広剥片が剥離され、その後、2枚の剥片の間を切るように礫面を打面とし剥片Aが剥離される。さらに、打撃する箇所を変え、再び礫面より厚手の幅広剥片B、薄手の幅広剥片Cを採取している。幅広剥片Bの剥離により平坦面が生じ、その平坦面を利用し、剥片剥離が行われ、3cm大の幅広剥片D・Eが剥離されている。

49は砂岩の棒状礫である。敲打痕や磨面は確認されていないが、全面が磨られているかのような手触りが礫面より確認される。しかし、石器正面上のみは手触りがざらざらとしている(実測強トーン範囲)。その用途、さらには石器であるかを含め疑問の残る資料である。

細石刃・細石刃核 (第12図50～71)

50～71は細石刃、細石刃核である。他の旧石器時代遺物と同様に、調査区北端と南端にその出土は集中している。

細石刃は52、55の珪質頁岩製のものを除き、全てが黒曜石製である。出土数が少ないため、大まかな傾向にしか触れることができないが、53～55のように打面が残るもの、51、56のように上下両端が欠損しているものが多い。

細石刃核は、黒曜石製のものと、珪質頁岩、流紋岩製のものが出土している。このうち、大半を占めるのが黒曜石製のもので、裏面あるいは両側面に礫面を残している。

黒曜石はその特徴から、桑ノ木津留産と思われるが、62のように、礫面にクレーター状の凹みを持ち、さらに1mm大の球顆を含むといった桑ノ木津留産黒曜石にはみられない特徴をもつものも存在する。

57～66、70は桑ノ木津留産黒曜石を石材とした細石刃核である。57は正面側から打面調整が施され、細石刃が剥離される。58～66、70は側面あるいは裏面に黒曜石原石の自然面を残すものである。このうち、60、64は細石刃剥離の痕跡はないが、その特徴から細石刃剥離前のブランクと考えられる。

黒曜石製の細石刃核には、調整の粗密に違いはあるが、打面調整が施され細石刃剥離が行われることは共通している。また、61～64のように、細石刃剥離が進行したものは、打面が作業面に対し、鋭角となっている。

66は打面転移が行われるものである。右側面に残る下方向からの細石刃剥離の後、作業面を正面に変え、細石刃剥離が行われている。また、細石刃剥離後、正面側からの加撃により剥離が行われるが、その剥離面を打面として、細石刃剥離は行われていない。

67～69、71は船型型細石刃核で、分割礫の打面が主要剥離面となる。このうち、68は裏面に斜方向の細石刃剥離の痕跡が観察され、打面転移の存在を示している。また、71のみ、細石刃核下部に粗い二次加工が施されている。

(文責：岸田)

第3節 縄文時代草創期の遺構と遺物

1 概要

縄文時代草創期の遺構と遺物は遺跡南端部（一次調査区）のみで確認した。遺構はVa層上面で竪穴状遺構を1基検出したのみである。遺物の出土層位はIV層・Va層であるが、旧石器時代や縄文時代早期の遺物と混在しており、層的に区別することはできなかった。そのため、草創期と判断できる石器は竪穴状遺構内出土の資料のみである。（文責：福田）

2 遺構（第13図、第15図～第16図：写真版3、45～46）

遺構はL5Gr.のVa層上面で検出した。Va層上面では遺物がほとんど出土しないのに対し、L5Geのみ遺物が多数出土し、それらの周辺を精査して遺構の輪郭を確認した。また、Va層では早期の土坑も検出されているため、当初は早期の土坑と認識していたが、形態・規模や遺構内出土土器から草創期の竪穴状遺構と判断した。

長径約26m、短径約22m、検出面からの深さは約0.2mである。床面積は205㎡を測る。平面形は略円形を呈し、遺構南西の一部は縄文時代早期の土坑（A1SC234）に切られる。床面は礫層直上で平坦にそろっており、礫層中の礫の上面が一部見えている状態であった。また、遺構の壁面は斜めに緩やかに立ち上がっていた。

遺構の内外にピットや土坑・焼土等を確認するため幾度か精査を行ったものの、それらを検出することはできなかったため床面近くの埋土を採取し、フローテーションによる微細遺物の回収を試みた。その結果得られた炭化物で炭素14年代測定を実施したところ、8510 ± 40BP、及び1315 ± 25BPという結果を得た。しかし、これは遺構内の遺物から想定される年代とは大きく異なっている。

これは、分析を行った炭化物試料は2mm以下の非常に微細なものであったため、分析結果はコンタミネーションによるものと考えられる。

竪穴状遺構内からは降帯土器、剥片、敲石が出土した。また、周辺では数点の遺物が集中して出土したため、これらの遺物も遺構に関連するものとし

て掲載した。掲載した81、84、86、91～93、102が遺構外のものである。

降帯土器の口縁部は3点を確認した。いずれも降帯を貼付、または肥厚させて施文する。72は降帯上に貝殻部部の押圧を施しており、口唇部には貝殻脈線部による刺突を施す。73は風化が非常に激しいが、肥厚部に横位の貝殻刺突を2条、肥厚部の下端に貝殻部部の押圧を確認できる。74は器壁が薄く、胎上の砂粒が微細であるため精良な印象を受ける。口縁部からやや下がった部分を肥厚させ、この上位に爪先によるとみられる刺突を施す。この刺突は横に連続して施されていると考えられる。

胴部のうち施文を確認できたのは75、80のみである。他は無文であり、全て直線的に立ち上がるものである。ただし胴部下半は77、79のように緩くカーブする可能性もある。

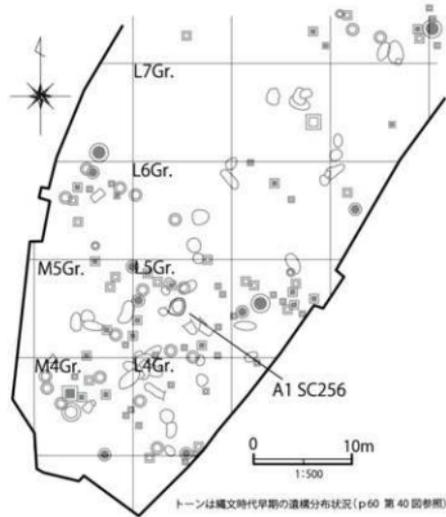
底部は全て平底である。80は81と同一個体であり、底部から胴部に至る器形復元が可能であった。底部の円盤外側から胴部を立ち上げ、その後が高台状となる粘土帯を底面に貼り付けている。高台状部分の底面側は、接合部をナデつけたのちに指押さえて形状を整えた痕跡が明瞭である。胴部には間隔を空けた2条の降帯を指頭によって下方向にナデつけるように貼り付ける。降帯は胴部の輪積み接合部に貼り付けている。

84は器表面のみが赤褐色・橙色を呈し、断面は両色調がマーブル状になっている。

85～102は石器である。85～97はホルンフェルス製で、縦長あるいは、不整形な剥片が出土している。また、剥片の中には、円礫であることを示す丸みを帯びた礫面が残存するものが多い。

98、100の敲石は礫の端部に敲打痕が確認されるのに対し、101は面的に顕著な敲打痕が観察される。

102は台石である。断面はふくらみを持つ円礫を使用している。遺構外出土であるが、周辺には同じような大きさの礫が無く、102の周辺に草創期の土器も集中していたため、竪穴状遺構に伴う石器として判断している。（文責：福田）



第13図 縄文時代草創期遺構分布図

3 遺物 (第17図～第21図:写真図版47～50)

遺構外より出土した草創期の土器について口縁部の隆帯の有無や施文方法によって以下の分類を行った。この際、粘土帯を貼り付けることによって他の部位よりも厚くなっている部分を隆帯と捉えている。

- A類：隆帯に貝殻による施文をするもの
- B類：隆帯に工具による施文をするもの
- C類：隆帯に指頭による施文をするもの
- D類：隆帯に施文をしないもの
- E類：隆帯を貼付せず爪先による刺突を施すもの
- F類：隆帯を持たず、施文もしないもの

103～112はA類に属する。貝殻の背面を用いる103～108と、貝殻縁線のみを用いる109～112に細分できる。111は内面の風化が激しいものの、マーブル状に赤味を帯びている。

113～115はB類に属する。いずれも口縁端部からやや下がった位置が最も肥厚し、先の尖った棒状またはへら状の工具で刻目を施す。なお、113は隆



第14図 隆帯文土器重量分布図

帯部分が赤味を帯びるが、電子顕微鏡下では顔料等の付着は確認されなかった(鹿児島県埋蔵文化財センター内山神野氏のご教唆による)。

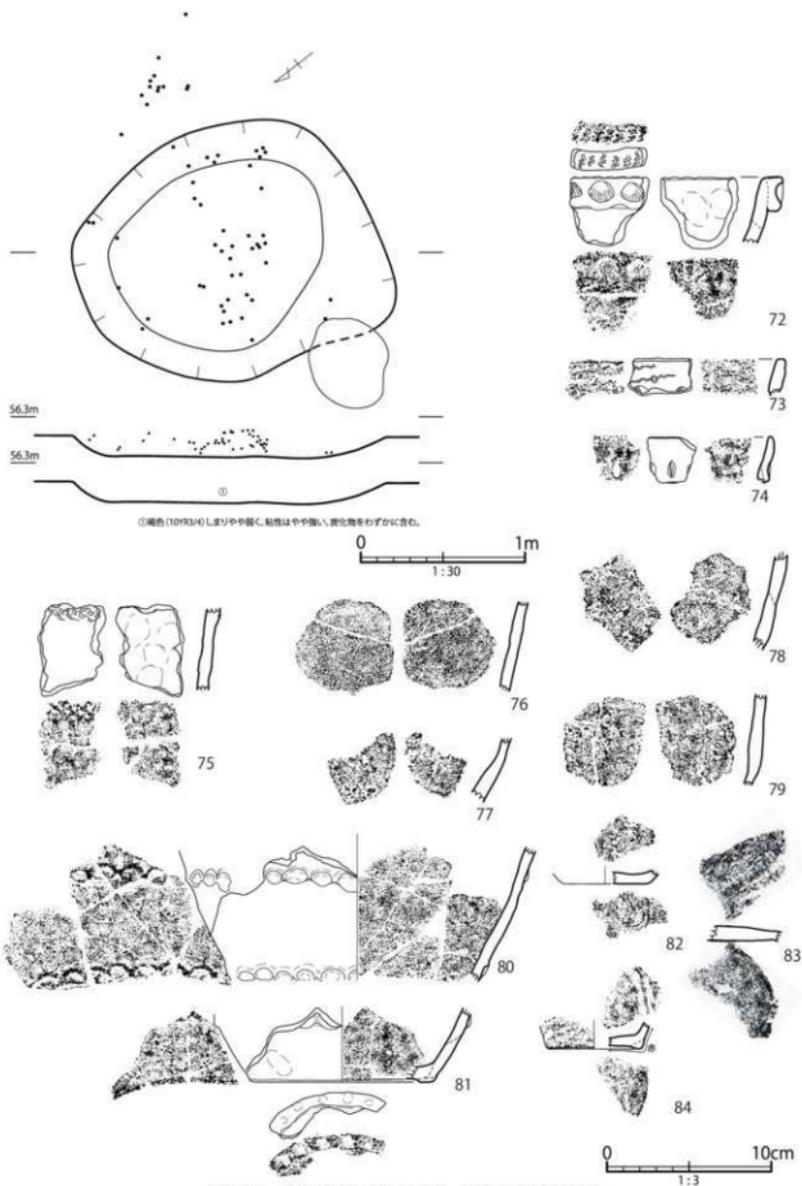
C類は3点のみの出土で116、117は同一個体である。隆帯は上から順に三条貼り付けられる。116～118は内面が他の部分よりも明らかに赤い。

119～133はD類に属する。119～122は口縁端部が最も肥厚するもの、123～124は口縁部が肥厚するもの、125～133は口縁端部からやや下がった位置が最も肥厚するものである。

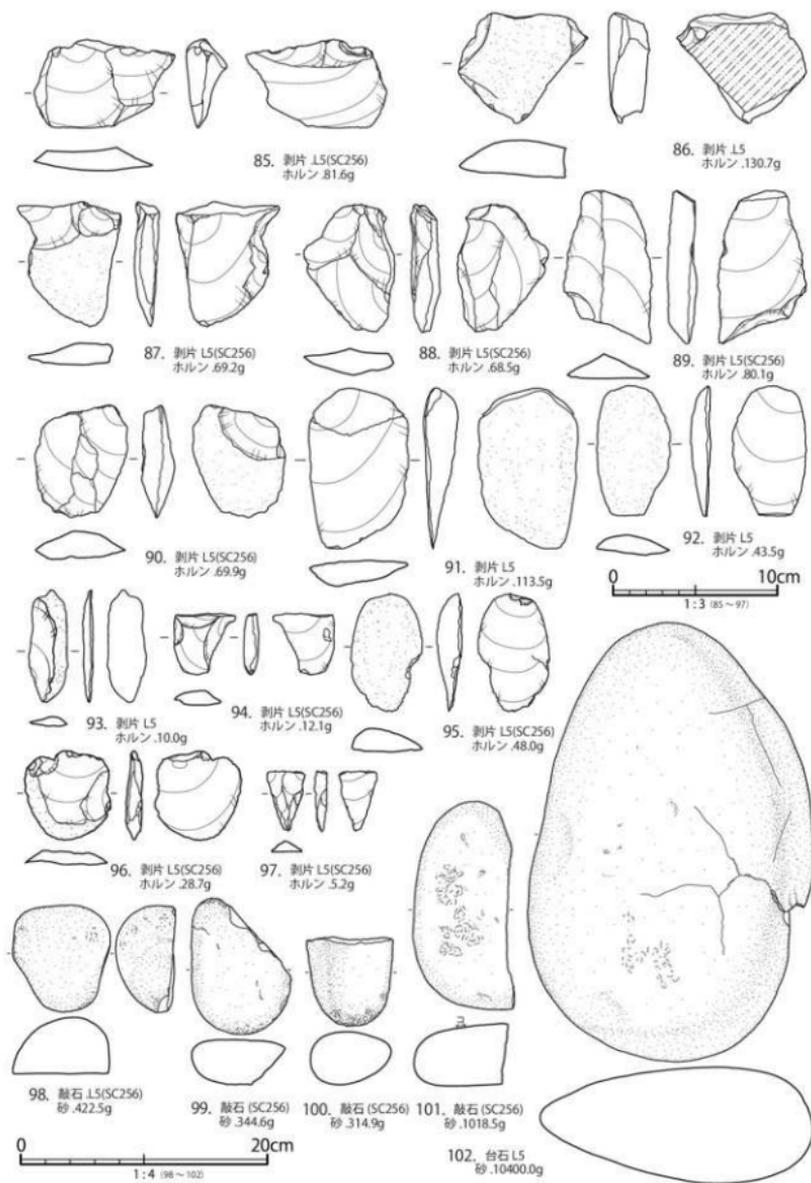
このうち、130と133は炭化物の付着が外器面より確認された。炭素14年代測定の結果は、130が11350±70BP、133が11440±50BPである。

132、135はE類に属する。132は縦位の刺突、135は横位の刺突である。

134、136はF類に属する。胎土がA～E類の土器に類似しているため草創期の遺物として掲載したが、早期の無文土器である可能性も残る。



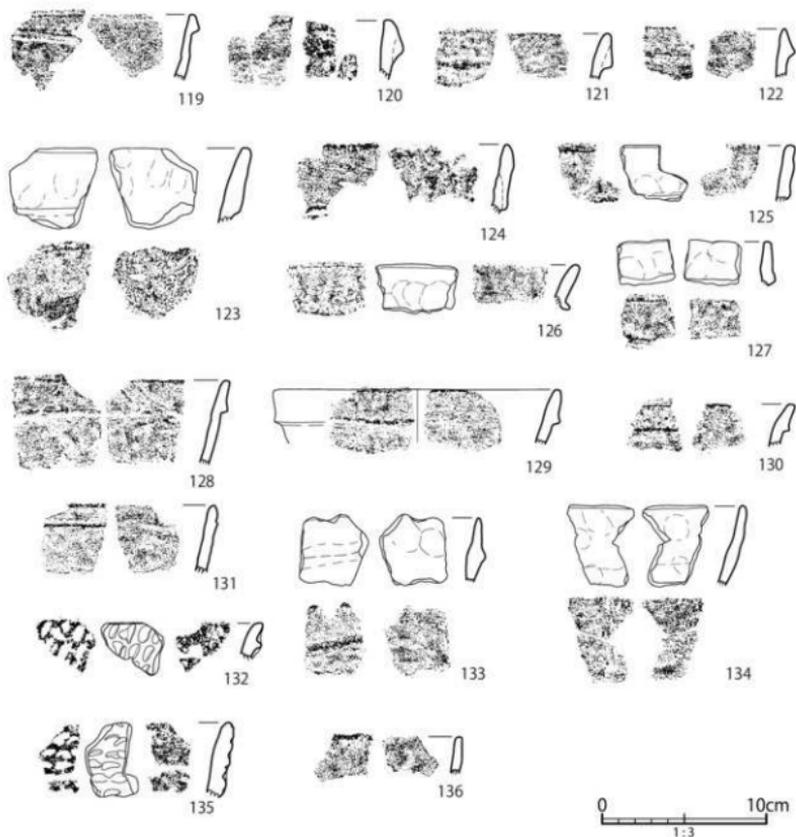
第15図 竪穴状遺構 (A1 SC256) 及び出土遺物実測図



第16図 竪穴状遺構 (A1 SC256) 出土物実測図



第 17 図 縄文時代草創期土器実測図 (1)



第18図 縄文時代草創期土器実測図(2)

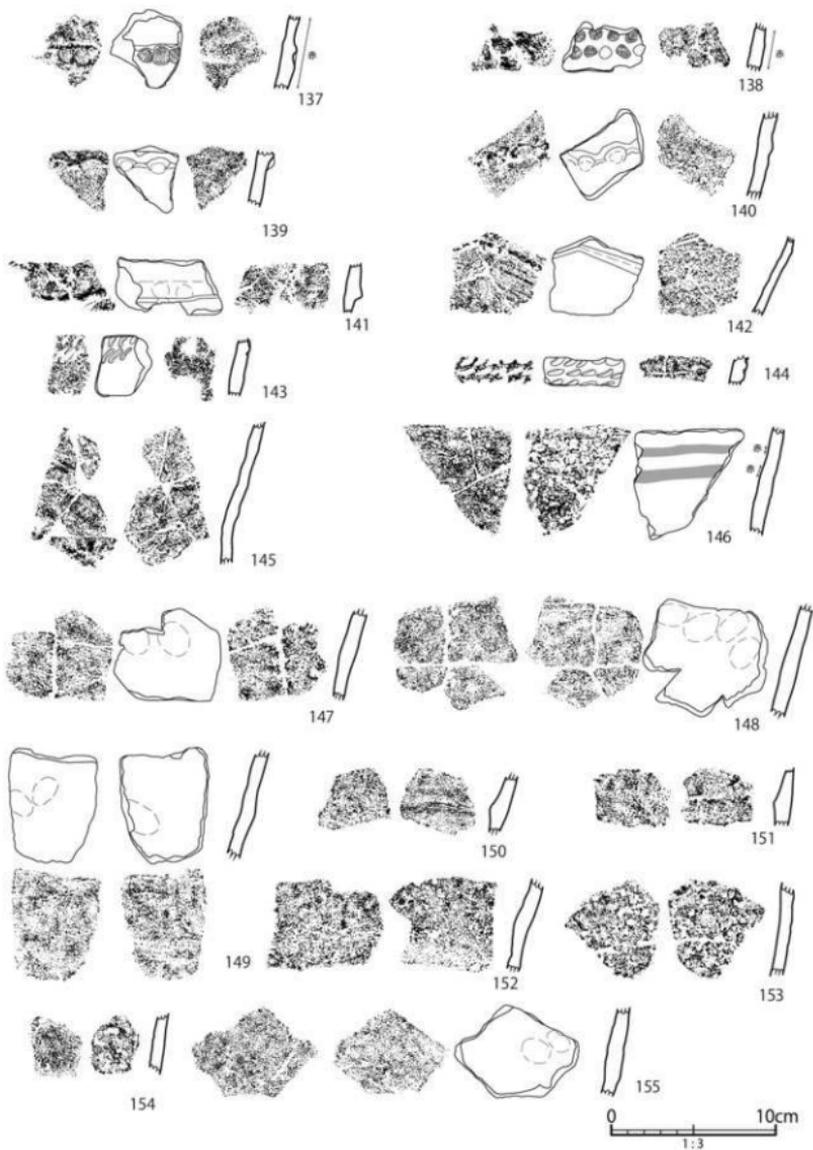
胴部の外面には施文を有する一群(137~144)と無文の一群(145~176)がある。前者は口縁部と同様の基準が当てはまるが、点数が少ないためA~Fの分類にあてはめていない。

器形はいずれもほぼ直線的に外反し、内面に稜を有するもの(150, 152, 157)もある。

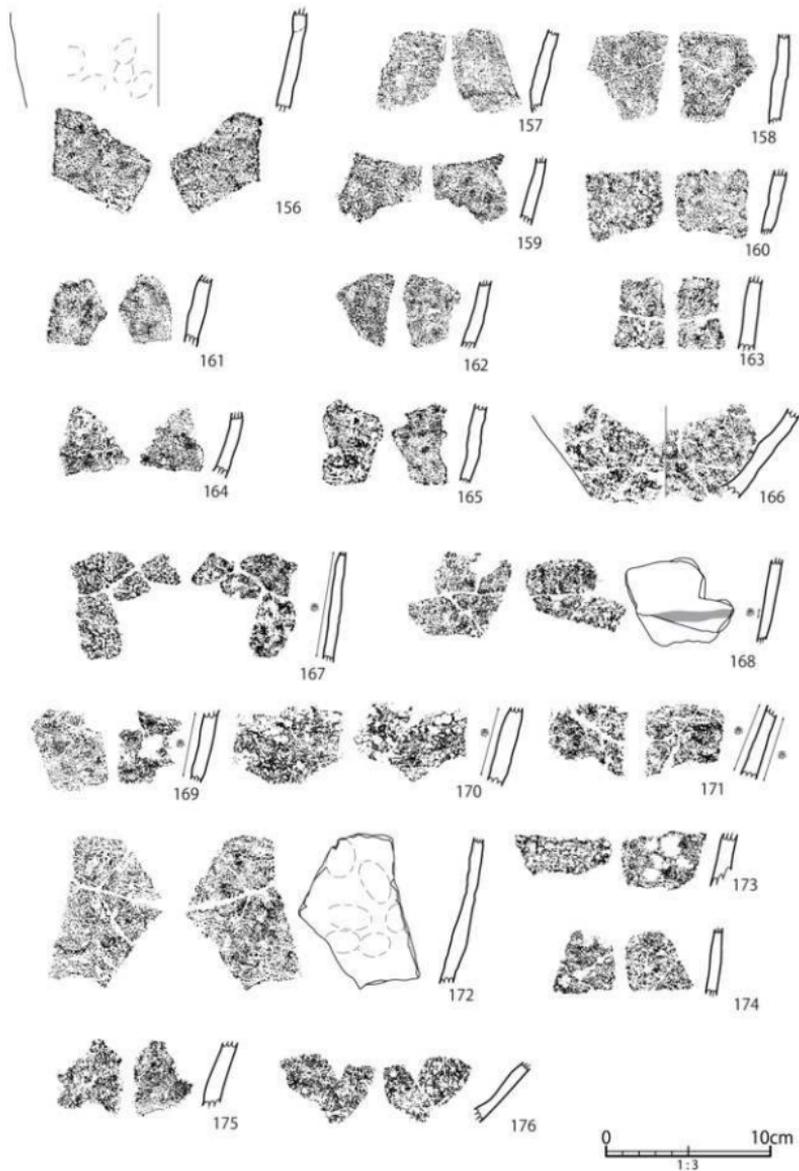
また、器表面のみが赤色を呈するものがある。特に169~171は顕著である。146, 168は内面が帯状に赤味を帯びている。

底部は全て平底であるが、上げ底気味になるもの(177~186)と、平坦なもの(188~199)がある。ただし、剥落が激しいものや小片が多いため、明確に区別することは難しい。

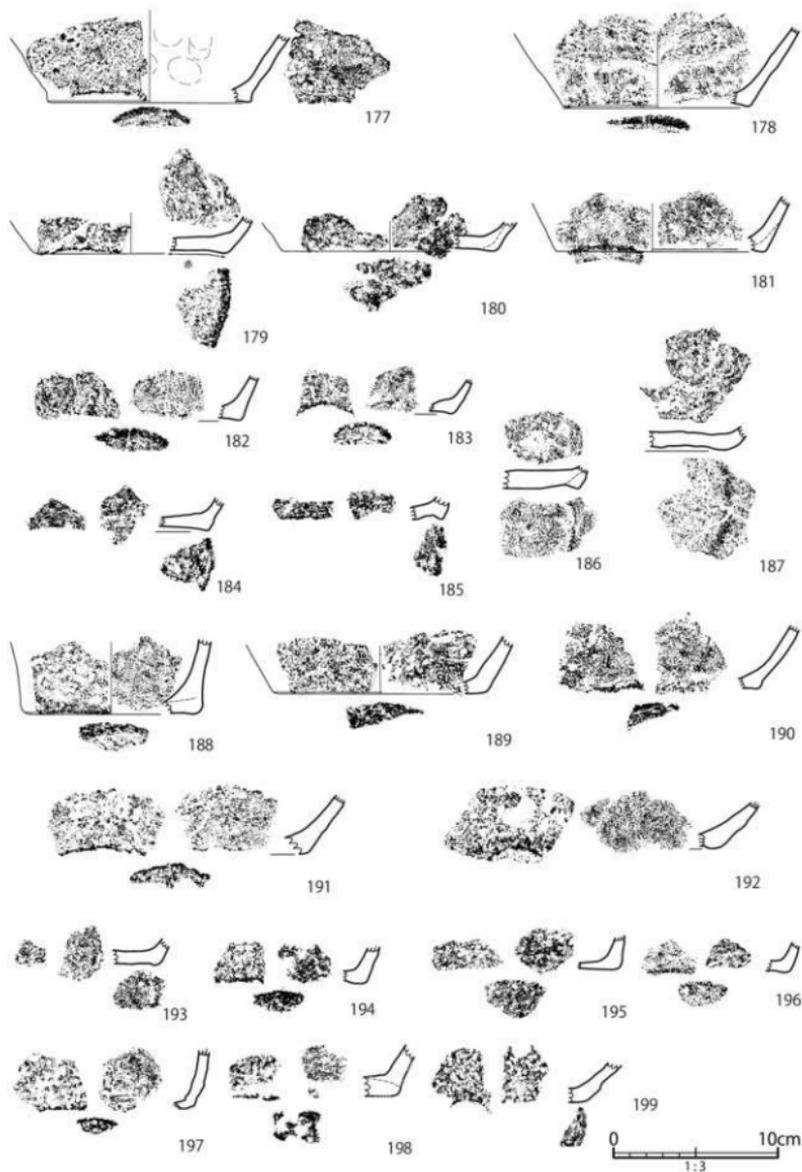
また、179は底部外面の赤色が非常に強くなっている。
(文責：福田)



第 19 図 縄文時代草創期土器実測図 (3)



第 20 図 縄文時代草創期土器実測図 (4)



第 21 図 縄文時代草創期土器実測図 (5)

第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

1 概要

縄文時代早期の遺構は、243基の集石遺構をはじめとして、土器埋設遺構1基、土坑60基、穴穴11基、散礫等を検出した。

遺物は、貝殻文・無文・押型文等の土器が出土しているが、その多くは小片であり、完形に復元できるものはなかった。石器は、打製石鏃、石斧、礫器、礫石、磨石、台石等が出土している。

本遺跡において、縄文時代早期にあたる包含層は、KAh層下位のIV層及びV層である。すでに前節で述べたように、V層からは縄文時代草創期の遺物も出土しており、草創期と早期については層位による明確な区別はできなかった。また、III b層(KAh)は、調査区のほぼ全面で堆積が確認されているが、これまで何度も触れられているように、弥生時代以降の遺構密度が非常に高く、下位の包含層が広い範囲で攪乱を受けている。遺構及び遺物は、調査区南端及び西側の台地縁辺から多く出土する傾向が見られた。

そこで、本節で掲載する遺物は、IV層及びV層から出土した遺物を基本とする。ただし、弥生時代以降の遺構の埋土中及び遺物包含層から出土し、縄文時代早期に帰属する可能性のある土器については本節で掲載している。また、穴穴、土坑から出土した遺物はその遺構とともに掲載し、遺構外の石器、土器については包含層出土として掲載している。

以下、項目ごとに詳述する。(文責：日高)

2 遺構 (第22図、第25図～第58図：写真版4-36)

(1) 集石遺構 (第22図、第25図～51図、写真版4-29)

本遺跡では、第三章で触れた通り、調査区を6つに分けて調査が行われたが、遺構の認識については、各調査区ともに同一基準を持ち調査を行った。

集石遺構と散礫の区別は、礫が散漫に分布している範囲を散礫、礫が密集している範囲を集石遺構とした。散礫は、調査区南北両端、L6Gr周辺とイ37Gr周辺で確認され、特に調査区南にあたる一次調査区では散礫を除去したことにより、礫の集積を確認し集石遺構と認定できたものも多く存在した。

また、集石遺構を掘り進めるにあたって、比較的平らな面を有する礫が、遺構底部付近あるいは側壁に敷かれるように検出されたものを配石とし、配石以外の遺構内出土礫は内部礫と呼ぶこととした。

切り合いを持つ集石遺構に関しては、掘り込みを伴う場合、掘り込みの数で遺構数を判断した。

こうした基準を設けた結果、集石遺構は、243基確認された。遺構は、後世の遺構掘削時に検出されたものも存在するが、多くはIII b層(KAh)除去後、Va層及びVb層より検出された。また、集石遺構の多くは掘り込みを有し、配石を有するものも44基確認された。

これら集石遺構の法量等は第4表に記した。各集石遺構の情報も上記の表に譲り、ここでは、調査区内での集石遺構の特徴や内部礫の石材構成等、個別の集石遺構について触れることとする。

まず、本遺跡で確認された集石遺構に対し、便宜的に以下の分類を行った。

A I類：掘り込みを持ち、配石を持つもの

A II類：掘り込みを持ち、配石を持たないもの

B類：掘り込み・配石を持たないもの

各類型の基数はA I類44基、A II類150基、B類49基となるが、B類に関しては、散礫内に密集する礫等、遺構としての判断が困難な場合が多いため、正確な基数を表していない可能性がある。

集石遺構の全体的な分布をみると、台地の縁辺にあたる調査区南端(一次調査区)に集中し、さらに、調査区西側崖付近でも遺構が集中する(第22図)。特定の分類にあたる集石遺構が一箇所に集中することはないが、A I類とした集石遺構は調査区南端以外では数基を数えるのみとなる。

各類型間の切り合い関係をみると、第3表に示すとおりA I類どうしが切り合い関係を持つものは存在せず、切り合いが確認されるのはA I類とA II類あるいはA IIとA II類となる。

また、掘り込みの深さを比較すると、A I類では0.08m～0.56m間に1～2基が確認されるのに対し、A II類は0.14m前後に遺構基数が突出し、0.38mよりも深いものは存在しない(第23図)。

第24図は調査区南端（一次調査区）と北端（三次調査区A区）より検出された内部礫の石材分類と重量計測を行った結果を示したものである。図中の棒グラフが内部礫の石材比率を、折れ線グラフが内部礫の重量を表している（礫層は、調査区南端に露出していた礫層（層）内の礫のうち、 $2\text{m} \times 2\text{m} \times 0.5\text{m}$ （ 2m ）の範囲において礫のサンプリングを行い、石材比率を示したものである）。ただし、先後関係をもつ集石遺構に関しては、重複する内部礫により個別遺構への帰属が判断できなかったものが多く、計測の対象としていないが、計測が済んでいたもの（第29図A3S138～141）に関しては図に掲載している。

第24図をみると、ほとんどの集石遺構で砂岩が多くの割合を占め、次に砂岩・酸性岩類となっている。ホルンフェルスは前述の石材に比べ少ない。このような内部礫の割合は礫層内の石材構成に共通する。なお、個々の集石遺構でばらつきこそあるが、各類型による傾向は確認されない。

内部礫重量は、調査区両端ともに50kg以下が多くを占めるが、中には、200kgを超す礫を含んだ集石遺構も存在する。調査区北端に比べ、南端は内部礫重量が大きいものが多い理由としては、第23図に示すように残深が大きい傾向があるA1類が調査区南端では多く検出されているためと思われる。

個別の集石遺構については、前述したように第4表に法量や出土遺物等を記している。ここでは、切り合いをもつ集石遺構及びA1類とした配石を有する集石遺構について触れている。

A3 S125 (第26図)

S125はキ43Grに位置する。内部礫は極めて密度が高く、遺構下部まで存在する。配石は段掘り状になった遺構下部付近に、板状の礫が中央を取り囲むよう並んでいる。遺構内より出土した炭化材に対し炭素14年代測定を行ったところ8350±50BPの年代値が得られている。

A3 S138～S141、S148 (第29図)

S138～S141、S148は切り合いを持つ集石遺構群である。各集石遺構はA2類に属するが、S148南西には、掘り込みを持たない礫の集中が確認される。

遺構は、S139をS141が切り、S140をS148が切っているが、S139とS140の先後関係は不明である。S141出土の炭化材に対し炭素14年代測定を行ったところ、9090±35BPの年代値が得られている。

A2 S5 (第32図)

S15はウ30Grに位置するA2類の遺構である。遺構上部より20点を超えるチャート製の剥片、破片が出土しているが、掘り込み内からは剥片、破片ともに出土しておらず、本遺構とは時期差があると推測される。

A4 S15 (第32図)

S15はE27Gr、調査区西端際に位置する。遺構は、弥生時代以降の掘り込みにより西側上面が削平されている。内部礫は遺構上部から中央付近まで確認され、配石は内部礫が集まる遺構南東下部に、平坦面を持つ礫が、平坦面を描るように出土している。

A4 S2 (第33図)

S12はS15の南東に位置し、両遺構は近接する。内部礫は埋土上部に集中している。遺構下部付近には20cm大の不定形な礫が確認され、その上部には、小振りの礫が集中する。小振りの礫の中には、短軸方向を打ち欠いた石鍾（第80図476）が含まれる。なお、遺構下部中央に礫は確認されていない。

A1 S176～S177 (第36図)

S176、S177はA1類とA2類の2基が切り合う集石遺構である。S176はS177に比べ平面形、検出面からの深さがともに大きく、内部礫自体もS177に比べ大きい。また、S176の配石は、平坦面を持つ礫が、平坦面をそろえるように出土している。両集石遺構の先後関係は不明であるが、S176出土の炭化材からは8360±50BPの年代値が判明している。

A1 S184 (第38図)

S184は長径22m×19mと大規模な集石遺構で、散礫が確認されるII1Gr。周辺より散礫除去前にプランが確認された。遺構上部には小礫が多く、遺構中央から下部にかけて大振りの礫が確認される。また、掘り込み壁面付近にも大礫が多く検出されている。配石は、断面形が板状となる礫を用いるが、礫の下部周辺には石垣の固定と空間を埋めるために用いられる藁込め石のような小振りの礫も存在している。

A1S170 (第39図)

S170は内部礫を固化した得なかった。図中にトーンで示した範囲が内部礫が存在した範囲である。遺構中央部の上面は内部礫の密度が低く、内部礫はV字状に存在する。配石は、平らな面を持つ扁平な礫が内部礫を覆うように検出されている。掘り込み埋土内より外面に網目状の燃糸文が施された土器(第72図370)が出土している。

配石上面からは、20cm大の炭化材が確認され、樹種同定、炭素14年代測定の結果、コナラ属コナラ科節、8480±60BPの年代値が得られている。

A1S171～S172 (第39図)

S171、S172はAⅡ類どうしが切り合う集石遺構である。内部礫は遺構上部より多く検出される。遺構の先後関係は不明だが、S172の掘り込みは浅く、両遺構合せて1つの遺構であった可能性もある。

A1S164～S167 (第42図)

S164、S165、S166、S167は4基が近接及び重複関係を持つ集石遺構である。4基は近接するが、S164、S165では被熱を受けた内部礫が少なかったのに対し、S166では被熱を受けた礫が多く検出されている。4基のうちS165、S166はAⅠ類である。配石は両遺構ともに、小振りな扁平礫を用い、掘り込みの側壁を覆うように出土している。

A1S125～S126 (第43図)

S125、S126はAⅡ類どうして切り合う集石遺構で、S126をS125が切っている。両遺構ともに内部礫が密集する状況ではないが、遺構上部付近に小振りな内部礫が確認される。

A1S140 (第46図)

S140はMSGに位置する。内部礫は遺構上部から下部まで全体で確認されるが、遺構上部に小振りな礫が多い傾向がある。配石は、長さ20cm、厚さ8cmの平坦面を持つ礫が平坦面を上にして検出される。また、配石が遺構下部に接するのは異なり、内部礫は遺構上面から配石上部まで、V字状を呈するように検出され、掘り込み壁面と内部礫の間には埋土のみとなる空間が確認される。

A1S115、S116 (第46図)

S115、S116はLSGrに位置し、S115はSC257を切っ

ている。周辺にはSC257、SC233が位置する。S116は西側から流れ込みをうけたかのように内部礫が東流する。S116で確認された配石は、遺構中央下部を覆う形で検出されている。

A1S123、S195 (第47図)

S123、S195はAⅠ類とAⅡ類が切り合う集石遺構で、S123をS195が切っている。S195は配石を有し、配石は中央を取り囲むように配置される。S195埋土中からは、隆帯文土器(167)が出土しているが、これは、混在によるものと考えられる。

なお、両遺構より出土した炭化材の炭素14年代測定を行った結果、S123が8230±40BP、S195が8130±30BPの年代値が得られている。

A1S151、S152 (第47図)

S151、S152はAⅠ類、AⅡ類で切り合いを持つ遺構である。両遺構の先後関係は不明だが、内部礫は各遺構ともに中央付近に集中している。S152は、配石を有するとして、遺構下部付近より20cm大の不定形礫が1点確認されたのみであり、他で確認される配石とは様相が異なっている。

A1S190、S191 (第47図)

S190、S191はAⅡ類同士の切り合いである。両遺構ともに平面形態、規模はほぼ同じであるが、S190は内部礫が遺構下部まで確認されるのに対し、S191は遺構上部のみで検出されている。

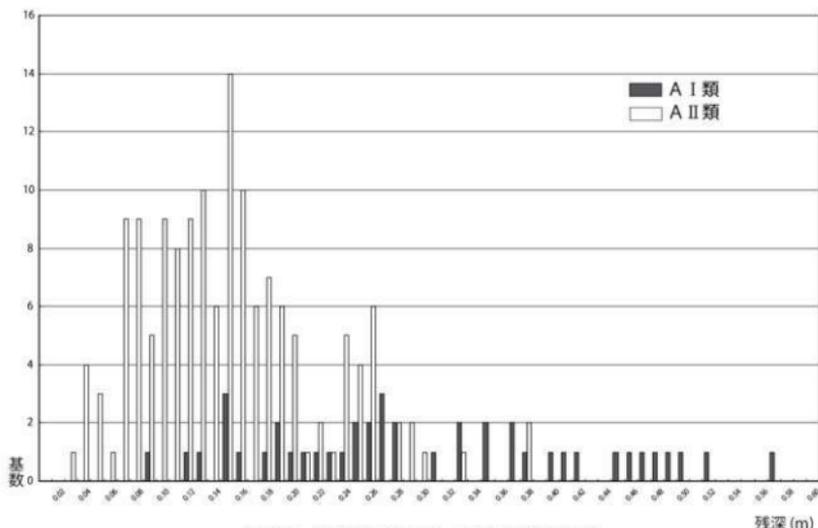
A1S149 (第48図)

S149はK5Grに位置する。内部礫は遺構上部から下部にかけて全体的に出土する。礫は非常に多く密集するが、遺構上部の礫は内部礫全体の中で小振りな礫が多くなる。配石は、遺構下部中央付近を囲むように検出されている。

A1S146、S147 (第49図)

S146、S147はAⅠ類とAⅡ類が切り合っている。S146の配石は、礫が平坦な面をそろえるように検出され、配石上部からは50cm大の炭化材が出土した。

この炭化材は樹種同定、炭素14年代測定の結果、コナラ属コナラ科節、8280±60BPの年代値が得られている。なお、同遺構の内部礫中の炭化材に対しても炭素14年代測定を行ったところ、8345±30BPの年代値が得られている。



第23図 集石遺構 (A I類・A II類) 残深対比図

A1S2～S4, S108 (第50図)

S2～S4, S108は大きな掘込みによって削平を受けている。調査区には4基の集石遺構の重複と判断したが、明確な掘り込みは3基しか確認されていない。浅い掘り込みを持つS3がS4を切り、さらにS3をS2が切っている。S108は内部礫が少なく、礫も大振りなものが大半を占めるのに対し、S2～S4の内部礫は、小振りなものが遺構上部に集中する。また、残深は4基ともほぼ共通している。

配石を有するのは、S4, S108の2基のみである。S4は平らな面を持つ礫の平坦面を上面向け検出されているが、遺構底部と配石の間には空間を持つ。S2より出土した炭化材より炭素14年代測定を行ったところ、 $8760 \pm 40BP$ の年代値が得られている。

A1S7～S10 (第51図)

S7～S10はLAGr周辺に位置する。S8はS7, S9を切り、S10もS7を切っている。内部礫が密集するのは、遺構の切り合いの新しいS8, S10で、S7, S9はS8の内部礫が散在したかのように、内部礫の割合が少なくなっている。

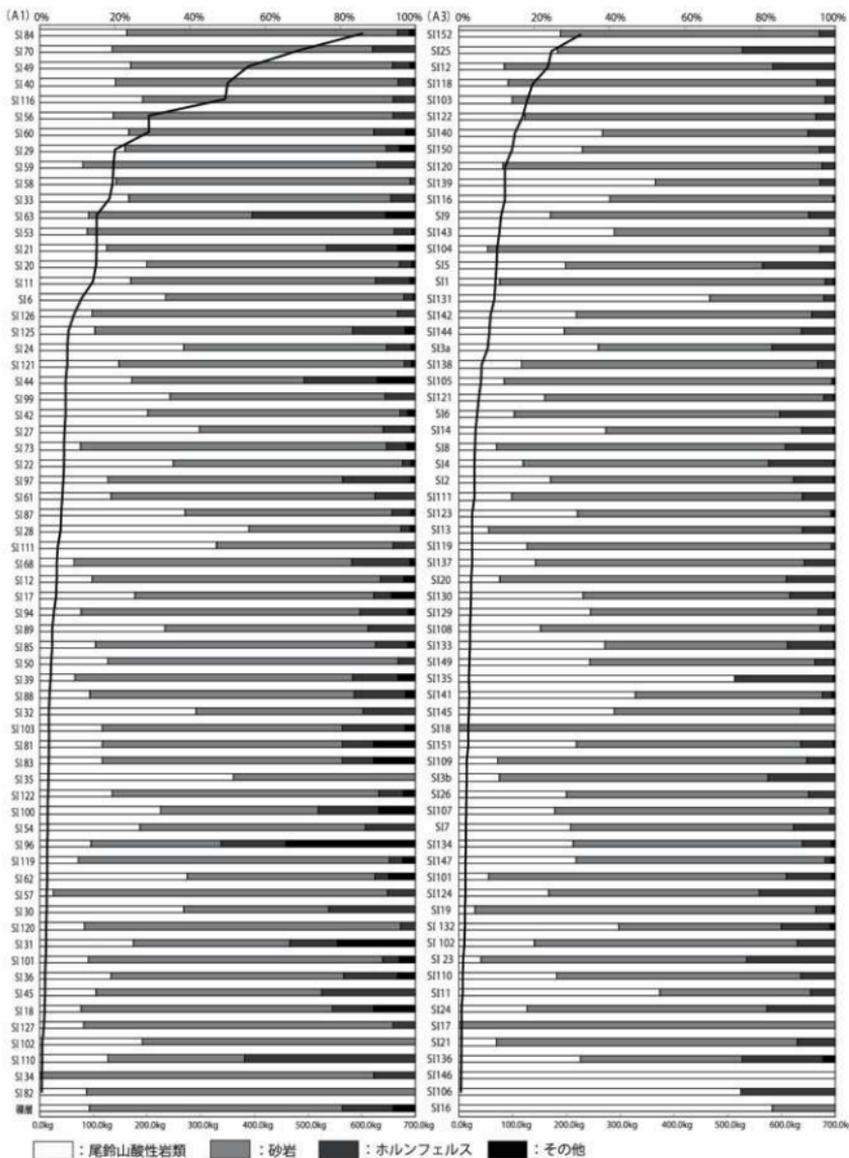
S8は4基の中で、唯一配石を持つ。配石は掘り込みの壁面を覆うように遺構上面まで確認され、特に遺構底部付近には広い平坦面を持つ円礫が用いられ、礫の表面と裏面（土坑底部と接する面）には比熱によると思われる赤化が確認される。

また、先後関係をもつ4基の集石遺構の中で、S8は残深が最も深くなっている。S8より出土した炭化材より炭素14年代測定を行ったところ、 $3860 \pm 40BP$ の年代値が出たが、III b層 (KAH) より検出されたため、サンプリングエラーの可能性がある。

第3表 集石遺構類型別先後関係表

		新		
		A I	A II	B
古	A I	0	4	0
	A II	5	10	0
	B	0	2	0

※先後関係が不明なため表には反映されないがA I/A II (1基)、A I/B(1基)、A II/A II (9基)、B/B(1基)が存在する。



第 24 図 集石遺構内部礫構成図 (左:調査区南端、右:調査区北端)

第4表 縄文時代早期集石遺構観察表

調査区	遺構名	検出層位	検出位置	掘り込み (m)				内部壁 (m)				配石	分類	自然科学分析 / 出土遺物		
				長軸	短軸	残深	平面形	長軸	短軸	密度	壁位置					
A3	SI14	V b	才 46a	1.64	0.79	0.20	楕円	—	—	1.37	0.80	疎	埋土上面	×	A II	
A3	SI3a	V b	才 46a	0.94	0.87	0.10	—	—	—	1.05	0.80	密	—	×	B	剥片
A3	SI3b	V b	才 46b	—	—	—	—	—	—	0.80	0.60	疎	—	×	B	
A3	SI17	V b	才 46a	—	—	—	—	—	—	—	—	疎	—	×	B	
A3	SI15	V b	才 46a	—	—	(0.15)	不明	SI15→覆	不明	不明	疎	埋土上面	×	A II		
A3	SI18	V b	力 46a	—	—	—	—	—	—	0.75	0.36	疎	—	×	B	
A3	SI5	V b	才 46c	1.13	1.10	0.20	円	—	—	1.00	0.88	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI12	V b	才 46c	2.24	1.90	0.19	楕円	—	—	2.50	1.98	密	埋土全体	×	A II	土器片、剥片
A3	SI4	V b	才 46d	1.55	(2.00)	(0.15)	不明	SI4→覆	不明	1.32	不明	疎	埋土上面	×	A II	剥片
A3	SI2	V b	力 46c	0.88	0.78	0.19	円	—	—	1.04	0.82	密	埋土上面	○	A I	
A3	SI6	V b	才 45a	—	—	—	—	—	—	0.93	0.92	密	—	×	B	剥片
A3	SI1	V a	千 46d	1.01	(1.00)	0.28	円	SI1→覆	1.15	不明	密	埋土上面	○	A I	殿石 (541)	
A3	SI26	V a	千 44b	—	—	—	—	—	—	1.06	0.85	疎	—	×	B	
A3	SI22	V b	工 44a	1.75	1.40	0.25	不定形	SI22→覆	1.79	1.16	疎	埋土上面	×	A II		
A3	SI13	VI	工 44a	1.55	0.87	0.18	楕円	—	—	1.29	0.60	疎	埋土上面	×	A II	
A3	SI7	VI	工 43a	—	—	—	—	—	—	0.91	0.62	疎	—	○	A I	
A3	SI8	V a	工 43c	—	—	—	—	SI8→覆	(1.80)	(1.13)	疎	—	×	B	剥片	
A3	SI9	V a	工 43d	—	—	—	—	—	(2.05)	不明	密	—	×	B		
A3	SI25	V a	千 43d	1.21	0.96	0.47	楕円	—	—	1.23	1.05	密	—	○	A I	8.350 ± 50BP
A3	SI24	V a	千 42a	—	—	—	—	—	—	0.76	0.65	疎	—	×	B	
A3	SI23	V a	千 42b	—	—	—	—	SI23→覆	0.72	0.52	疎	—	×	B	土器片	
A3	SI21	V a	工 42d	—	—	—	—	—	—	0.83	0.61	疎	—	×	B	剥片
A3	SI20	V b	工 41b	—	—	—	—	—	—	2.00	1.13	疎	—	×	B	
A3	SI19	V b	才 41a	0.97	0.80	0.10	円	—	—	0.98	0.73	疎	埋土全体	×	A II	
A3	SI16	V b	不明	—	—	—	—	—	—	0.49	0.36	疎	—	×	B	
A3	SI11	VI	不明	0.94	0.79	0.03	—	—	—	—	—	疎	—	×	B	剥片
A3	SI131	V a	工 41b	1.34	1.31	0.15	円	—	—	1.13	1.02	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI132	V a	才 41a	1.44	1.19	0.10	楕円	—	—	1.16	0.71	疎	埋土上部	×	A II	
A3	SI122	V a	才 41a (1.35)	(1.10)	0.19	円	SI122→覆	1.26	1.16	密	埋土全体	×	A II	押型文 (248)		
A3	SI151	V a	才 41c	1.13	(0.90)	0.11	円	SI151→覆	0.83	0.76	密	埋土上部	×	A II	7815 ± 30BP / 押型文 (250)	
A3	SI108	V a	工 41a	1.03	1.00	0.12	楕円	—	—	1.55	1.20	密	埋土全体	×	A II	石線 (471)、 押型文 (252)
A3	SI109	V a	工 41c	1.40	1.00	0.10	楕円	SI107 →SI109	1.49	1.37	疎	埋土上部	×	A II		
A3	SI107	V a	工 41c	—	—	—	—	—	—	1.89	0.58	疎	—	×	B	
A3	SI101	V a	工 41c	1.03	0.68	0.13	楕円	—	—	1.03	0.60	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI133	V a	才 41d	0.73	0.71	0.14	円	SI133→覆	0.91	0.67	疎	埋土上部	×	A II		
A3	SI134	V a	力 40a (0.90)	(0.85)	0.10	円	SI134→覆	0.83	0.69	疎	埋土上部	×	A II			
A3	SI121	V a	才 40a (1.50)	1.03	0.22	楕円	SI121→覆	0.97	(0.70)	密	埋土全体	×	A II			
A3	SI116	V a	工 40a	1.26	1.15	0.13	円	—	—	1.42	1.35	密	埋土上部	○	A I	
A3	SI106	V a	工 40c	—	—	—	—	—	—	1.52	1.01	疎	—	×	B	
A3	SI105	V a	工 40c	1.30	1.19	0.19	円	SI105→覆	1.15	1.11	密	埋土全体	×	A II	押型文	
A3	SI102	V a	工 40d	—	—	—	—	—	—	—	—	疎	—	×	B	

調査区	遺構名	検出 層位	検出 位置	掘り込み (m)					内部障 (m)					分類	自然科学分析 / 出土遺物
				長軸	短軸	残深	平面形	重複遺構	長軸	短軸	密度	障位置	配石		
A3	SI23	V a	力 40c	0.98	0.97	0.04	円	—	0.78	0.77	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI24	V a	力 40c	1.23	(0.90)	0.07	楕円	SI24→掘	1.13	0.78	疎	埋土全体	×	A II	
A3	SI20	V a	エ 39b	1.27	(1.00)	0.17	円	SI20→掘	1.31	(1.20)	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI52	V a	ウ 38b	2.62	(2.25)	0.16	円	SI52→弥	2.93	(2.40)	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI50	V a	ウ 38c	1.18	1.03	0.15	円	—	1.39	1.36	密	埋土上部	×	A II	8865 ± 35BP
A3	SI15	V a	イ 37b	—	—	—	—	—	0.92	0.87	疎	—	×	B	
A3	SI38	V a	イ 37c	1.01	0.96	0.08	円	—	1.11	1.01	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI39	V a	イ 37c	1.04	0.97	0.09	円	SI139 → SI140	1.04	0.96	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI41	V a	イ 37c	0.87	0.84	0.18	円	SI139 → SI141	0.76	0.71	密	埋土上部	×	A II	9090 ± 35BP
A3	SI40	V a	イ 37c	1.10	(1.05)	0.16	円	SI140 → SI148	1.13	1.06	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI48	V a	イ 37c	0.86	(0.80)	0.23	円	—	(0.95)	(0.80)	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI42	V a	ア 37d	(0.75)	(0.75)	(0.10)	円	SI146 → SI142	0.81	(0.80)	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI46	V a	ア 37d	(1.20)	(1.15)	(0.15)	円	—	1.13	1.08	密	埋土全体	○	A I	
A3	SI43	V a	ア 37d	1.32	1.01	0.13	楕円	—	1.15	1.08	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI36	V a	イ 37d	0.52	(0.40)	0.04	楕円	SI136→弥	0.46	0.41	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI35	V a	イ 37d	1.31	1.30	0.15	円	SI135 →弥/掘	1.12	0.71	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI47	V a	イ 37d	(1.10)	(1.10)	0.10	円	SI147→掘	(0.60)	(0.55)	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI45	V a	イ 36a	—	—	—	—	—	1.02	0.93	疎	—	×	B	
A3	SI30	V a	イ 36b	1.13	1.02	0.07	円	—	1.20	1.01	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI44	V a	ア 36b	1.21	0.88	0.16	楕円	—	1.08	1.02	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI37	V a	ア 36d	—	—	—	—	—	0.77	0.57	密	—	×	B	
A3	SI29	V a	イ 36c	0.92	0.81	0.14	円	—	0.81	0.74	疎	埋土上部	×	A II	
A3	SI19	V a	ア 35b	1.18	1.11	0.07	円	SI119→弥	1.15	0.99	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI03	V a	ア 35b	1.61	1.46	0.16	円	—	2.37	1.46	密	埋土上部	×	A II	7780 ± 30BP
A3	SI18	V a	ア 35b	1.37	1.07	0.05	楕円	SI118→弥	1.47	1.35	密	埋土全体	×	A II	
A3	SI04	V a	イ 35a	—	—	—	—	—	2.92	1.64	密	—	×	B	
A3	SI10	V a	イ 35d	—	—	—	—	—	0.65	0.39	疎	—	×	B	
A3	SI17	V a	ア 35d	1.26	1.17	0.16	円	—	1.22	1.01	密	埋土上部	×	A II	
A3	SI49	V a	エ 34b	1.00	0.82	0.10	楕円	SI149→弥	0.88	0.66	疎	埋土上部	×	A II	
A2	SI4	V a	ウ 31c	—	—	—	—	—	1.95	1.43	密	—	×	B	
A2	SI6	IV	ウ 30c	—	—	—	—	—	0.60	0.44	疎	—	×	B	7535 ± 25BP
A2	SI5	IV	ウ 30a	1.36	1.12	0.11	楕円	SI5→弥	2.13	1.72	疎	埋土上部	×	A II	
A4	SI1	V a	D 30c	0.92	(0.45)	0.09	円	—	0.92	(0.45)	疎	埋土全体	×	A II	
A4	SI4	V a	D 27b	0.75	0.72	0.08	円	SI4/SI5	0.85	0.75	密	埋土上部	×	A II	
A4	SI5	V a	D 27b	1.17	0.95	0.14	楕円	—	1.25	1.05	密	埋土上部	×	A II	
A4	SI15	V a	E27b	1.40	1.15	0.18	楕円	—	1.30	1.15	密	埋土全体	○	A I	
A4	SI2	V a	E27b	1.28	(0.70)	0.12	楕円	—	1.32	(0.55)	密	埋土上部	○	A I	
A4	SI3	V a	E27d	—	—	—	—	—	1.75	1.28	疎	—	×	B	
A4	SI14	V a	E27d	1.35	(1.35)	0.15	円	SI3/SI14	1.95	(0.85)	密	埋土全体	○	A I	石髓 (467)
A4	SI8	V a	E26e	1.45	(0.65)	0.04	不定形	SI8→弥	1.20	(0.65)	疎	埋土全体	×	A II	
A4	SI6	V a	E26d	1.38	1.34	0.20	円	SI6/SI7	1.45	1.30	密	埋土上部	×	A II	7560 ± 80BP
A4	SI7	V a	E26d	1.00	0.95	0.15	円	SI6/SI7	1.15	0.95	密	埋土上部	×	A II	
A4	SI9	V a	E26e	1.20	0.80	0.08	楕円	SI9→弥	1.65	0.95	密	埋土上部	×	A II	

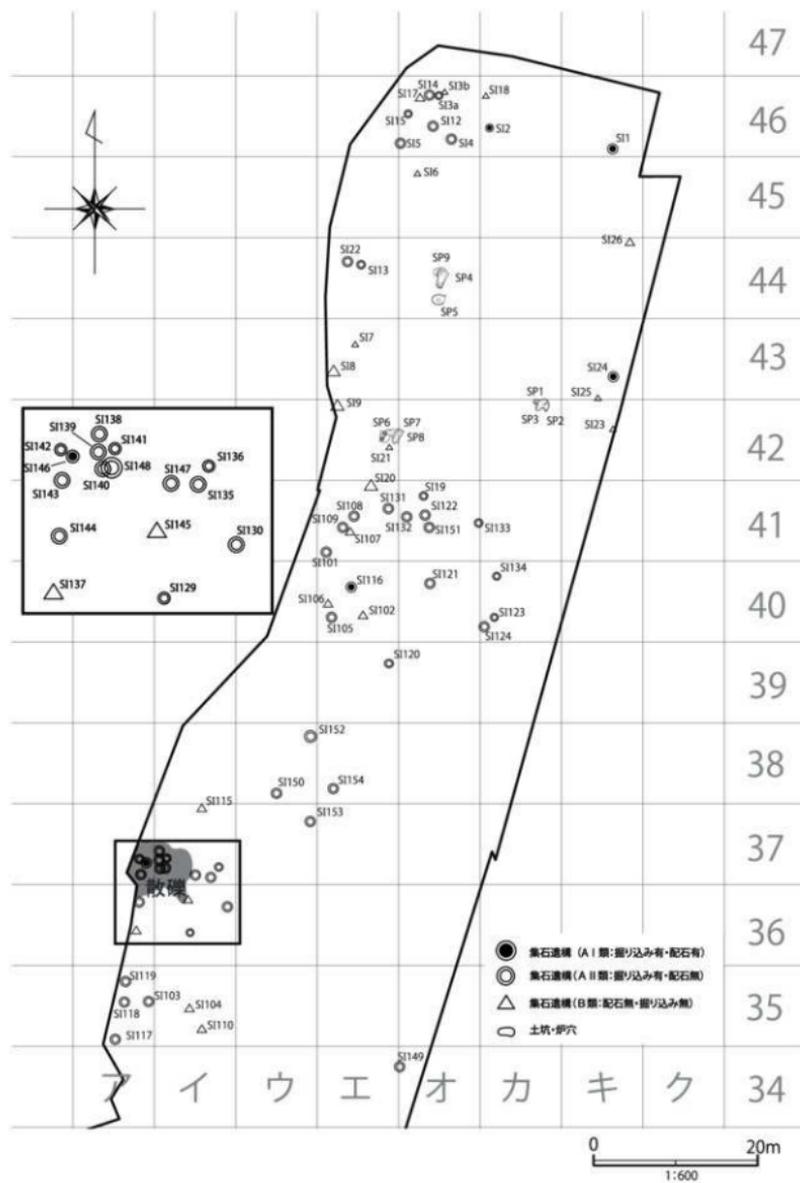
調査区	遺構名	検出層位	検出位置	掘り込み (m)					内部障 (m)					分類	自然科学分析 / 出土遺物
				長軸	短軸	残深	平面形	重複遺構	長軸	短軸	密度	障位置	配石		
A4	S10	V a	E25a	0.75	0.58	0.03	楕円	S10→弥	0.65	0.55	密	障土全体	×	A II	
A4	S11	V a	F25d	-	-	-	-	-	1.10	0.75	疎	-	×	B	無文 (416)
A4	S18	V a	D 23a	0.95	0.90	0.13	円	S119/S18	1.25	1.15	密	障土上部	×	A II	
A4	S19	V a	D 23a	0.90	0.65	0.08	楕円		0.85	0.80	疎	障土上部	×	A II	
A4	S16	V a	F22b	0.85	0.75	0.09	円	S117/S116	1.10	0.75	疎	障土上部	×	A II	
A4	S17	V a	F22d	0.82	0.62	0.12	不定形		1.50	0.95	疎	障土上部	×	A II	
A4	S12	V a	G22d	-	-	-	-	S112→弥	2.00	1.85	密	-	×	B	無文 (429)
A5	S18	V a	H21c	1.21	0.71	0.16	楕円	-	1.00	0.70	疎	障土全体	×	A II	
A4	S13	V a	G22d	0.50	0.40	0.12	楕円	-	0.65	0.52	密	障土上部	×	A II	
A4	S20	V a	G22d	0.78	0.75	0.15	円	-	2.40	2.15	密	障土全体	×	A II	
A5	S30	V a	I20c	-	-	-	-	S30→覆	1.56	0.96	密	-	×	B	
A5	S12	V a	I19a	-	-	-	-	-	1.70	1.16	疎	-	×	B	
A5	S31	V a	H19b	1.62	1.25	0.38	楕円	-	1.60	1.15	密	障土上部	×	A II	9400 ± 50BP / 無文 (417)
A5	S32	V a	H19b	-	-	-	-	-	2.50	1.07	疎	-	×	B	土器片
A5	S17	V a	G19b	1.57	1.38	0.15	円	-	1.63	1.50	密	障土全体	×	A II	7530 ± 40BP
A2	S3	IV	㊦ 31c	-	-	-	-	S13→S2	0.84	0.43	疎	-	×	B	割片
A2	S2	IV	D 19d	1.16	1.09	0.12	円		1.20	1.15	密	障土上部	×	A II	石鏃 (476)
A2	S1	IV	C 18a	0.65	0.63	0.09	円	-	0.75	0.62	疎	障土全体	○	A I	
A5	S15	V a	H 18a	-	-	-	-	-	0.97	0.96	密	-	×	B	
A5	S14	V a	J18b	-	-	-	-	-	1.34	(1.20)	疎	-	×	B	
A5	S13	V a	I18a	-	-	-	-	S113→覆	2.75	(2.50)	密	-	×	B	
A5	S29	V a	J18c	-	-	-	-	-	1.16	0.96	疎	-	×	B	
A5	S22	V a	J18c	-	-	-	-	S122→覆	1.60	1.30	密	-	×	B	
A5	S16	V a	J18d	-	-	-	-	S16→覆	(1.60)	1.35	疎	-	×	B	
A5	S19	V a	J17b	-	-	-	-	-	1.40	1.14	疎	-	×	B	
A5	S15	V a	J17b	1.26	1.05	0.10	円	-	1.20	0.85	疎	障土上面	×	A II	
A5	S14	V a	J17c	-	-	-	-	-	1.12	0.85	疎	-	×	B	
A5	S13	V a	J16d	1.16	1.11	0.17	円	-	1.15	1.13	密	障土全体	×	A II	
A5	S12	V a	J16d	1.03	0.75	0.19	楕円	-	1.00	0.71	密	障土全体	×	A II	
A5	S11	V a	J16d	1.15	0.91	0.15	円	-	1.20	0.90	密	障土全体	×	A II	
A5	S16	V a	J15b	1.68	1.23	0.15	楕円	-	1.65	1.40	密	障土全体	×	A II	
A5	S26	V a	J15a	-	-	-	-	-	1.47	0.90	疎	-	×	B	
A5	S28	V a	I15a	-	-	-	-	S127/S128 →覆	1.50	0.99	密	-	×	B	
A5	S27	V a	I15a	-	-	-	-		1.80	1.60	密	-	×	B	
A5	S23	V a	J15d	-	-	-	円	-	1.00	0.80	疎	障土上面	×	B	
A5	S24	V a	J15c	-	-	-	-	-	1.20	0.70	密	-	×	B	
A5	S25	V a	J15c	-	-	-	-	-	1.33	0.71	疎	-	×	B	
A5	S20	V a	F15b	-	-	-	-	-	1.44	1.21	密	-	×	B	
A5	S21	V a	F15c	-	-	-	-	S121→弥	1.48	1.05	疎	-	×	B	
A5	S11	V a	G14b	-	-	-	-	-	1.18	0.85	疎	-	×	B	
A5	S10	V a	J14c	-	-	-	-	S110→覆	1.16	0.65	疎	-	×	B	
A1	S196	V b	J12a	0.69	0.48	0.09	楕円	-	0.47	0.41	疎	障土全体	×	A II	
A1	S107	V a	H11b	0.61	0.59	0.09	円	-	0.57	0.54	疎	障土上部	×	A II	

調査区	遺構名	検出層位	検出位置	掘り込み (m)					内部障 (m)					分類	自然科学分析 / 出土遺物
				長軸	短軸	残深	平面形	重複遺構	長軸	短軸	密度	障位置	配石		
A1	S175	V a	I11d	1.07	0.74	0.12	楕円		0.85	0.65	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S174	V a	I11d	0.76	0.71	0.07	円	S174→S175	0.56	0.52	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S183	V a	H11c	1.41	1.05	0.13	楕円	—	1.85	1.76	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S173	V a	H10a	1.38	1.12	0.26	楕円	—	1.30	0.96	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S1115	V b	I11d	0.63	0.57	0.08	円	—	0.64	0.56	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S176	V a	I10b	(1.80)	1.67	0.41	楕円		1.45	1.40	密	埋土全体	○	A I	8360 ± 50BP
A1	S177	V a	I10b	1.25	1.05	0.17	円	S176→S177	1.05	0.98	密	埋土上部	×	A II	
A1	S181	V a	I10b	1.30	(0.95)	0.05	円	S181→溝	1.07	0.92	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S182	V a	I11d	0.88	(0.75)	0.08	円	S182→溝	0.69	(0.62)	疎	埋土全体	×	A II	
A1	S184	V a	I11d	(2.22)	1.92	0.38	円	S184→溝	2.36	2.10	密	埋土全体	○	A I	
A1	S178	V a	I10b	(1.35)	1.11	0.18	楕円		(1.10)	0.91	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S179	V a	I10b	1.42	(0.90)	0.07	楕円	S180/S178 →S179	1.40	(0.85)	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S180	V a	I10b	(1.90)	(1.15)	0.17	楕円		(1.68)	(1.12)	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S172	V a	H10a	1.07	0.74	0.07	楕円		0.95	0.66	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S171	V a	H10a	2.22	1.49	0.14	楕円	S171/S172	1.77	1.43	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S170	—	I9b	1.68	1.42	(0.50)	円	S170→弥	1.66	1.40	密	V字状	○	A I	8480 ± 60BP コナラ属コナラ節 照久文 (370)
A1	S128	V a	J9d	0.81	0.74	0.15	円	—	0.65	0.59	密	埋土全体	○	A I	
A1	S168	V a	I8a	1.60	1.11	0.11	楕円	—	1.56	1.09	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S164	V a	I8c	(0.85)	0.76	0.08	円		0.94	0.83	密	埋土全体	×	A II	石鏃 (479)
A1	S165	V a	I8c	2.18	1.51	0.46	楕円	S165→S164, S167→S166	2.03	1.74	密	埋土全体	○	A I	8390 ± 40BP
A1	S166	V a	J8d	1.78	1.55	0.19	円		1.71	1.45	密	埋土全体	○	A I	押型文 (297)
A1	S167	V a	J8d	0.74	(0.70)	0.20	円		0.74	0.38	密	埋土上部	×	A II	
A1	S188	V a	I8c	0.81	0.70	0.16	楕円	S188→弥	0.79	0.59	密	埋土上部	×	A II	
A1	S163	V a	J8d	1.94	1.51	0.29	楕円	S163→弥	1.95	1.34	密	埋土上部	×	A II	
A1	S1104	V b	J8a	0.87	0.81	0.28	円		0.84	0.65	疎	埋土全体	×	A II	
A1	S1105	V b	J8c	1.06	0.71	0.12	楕円	S1105 →S1104	0.92	0.58	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S162	—	J8c	(1.50)	1.01	0.25	楕円	S162→弥	(1.09)	0.74	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S160	V a	K8d	1.39	1.19	0.33	円	S160→弥	1.23	1.09	密	埋土全体	○	A I	
A1	S161	—	K8d	0.77	0.70	(0.25)	円	S161→弥	0.92	(0.86)	疎	埋土上部	○	A I	
A1	S1125	V b	L8d	1.22	0.90	(0.05)	楕円	S125→弥	1.09	0.91	密	埋土全体	×	A II	
A1	S159	V a	K7d	1.75	1.53	0.18	円	S159→弥	2.06	1.76	密	埋土上部	×	A II	7770 ± 50BP / 台石 (586)
A1	S187	V a	J7d	0.87	(0.70)	0.20	楕円	S187→弥	0.78	(0.59)	密	埋土全体	○	A I	
A1	S197	V a	K6a	0.91	0.81	0.13	円	—	0.83	0.72	密	埋土全体	×	A II	
A1	S158	V a	K6a	1.63	1.55	0.26	円	—	1.47	1.37	密	埋土上部	○	A I	押型文 (313)
A1	S1101	V b	K6b	0.76	0.68	0.08	円	—	0.61	0.58	疎	埋土上部	×	A II	押型文
A1	S157	V a	J6a	1.25	1.14	0.11	円	—	1.03	0.98	疎	埋土上部	×	A II	無文
A1	S156	V a	J6a	1.34	1.24	0.40	円	—	1.47	1.26	密	埋土全体	○	A I	照久文
A1	S1114	V a	M7d	2.01	(1.65)	0.37	楕円		1.67	(1.52)	密	埋土全体	○	A I	
A1	S1118	V a	M6b	1.87	(1.40)	0.24	楕円	S1117 →S1118 →S1114	1.76	(1.33)	密	埋土全体	×	A II	
A1	S1117	V a	M6b	(1.55)	1.41	0.52	円		1.72	(1.47)	密	埋土全体	○	A I	押型文 (268, 269)
A1	S192	V a	M6b	0.91	0.67	0.11	楕円	S192/S198/ S143	0.59	0.54	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S143	V a	M6b	(1.30)	1.19	0.26	円		1.26	1.07	疎	埋土全体	×	A II	

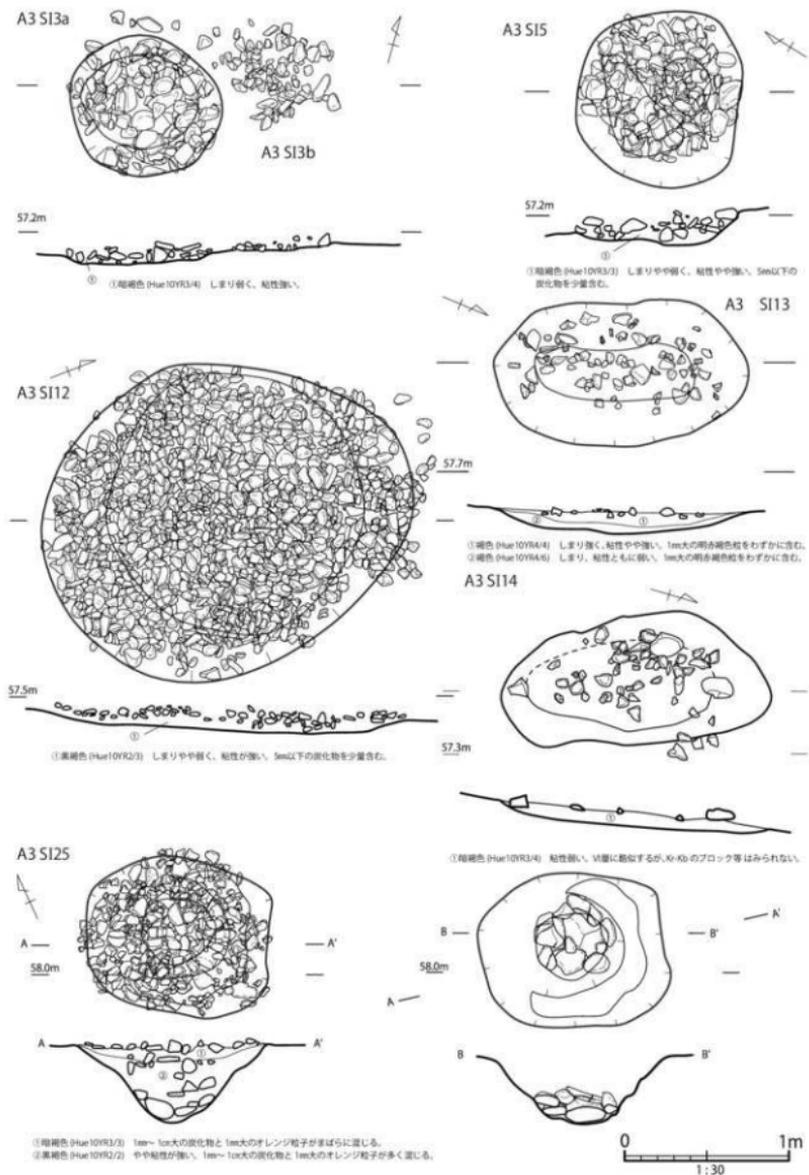
調査区	遺構名	検出層位	検出位置	掘り込み (m)				内部障 (m)				配石	分類	自然科学分析 / 出土遺物	
				長軸	短軸	残深	平面形	長軸	短軸	密度	障位置				
A1	S198	V.a	M6b	(0.90)	0.85	0.24	円	S192/S198/ S143	0.85	0.73	疎	埋土全体	○	A I	
A1	S144	V.a	L6a	1.14	1.04	0.28	円	S144→弥	1.06	0.92	密	埋土上部	×	A II	押型文 (270)
A1	S1126	V.a	M6a	1.65	1.44	0.16	円	—	1.53	1.44	密	埋土全体	○	A I	貝版文、押型文 (385)
A1	S1127	V.a	M6b	0.65	0.63	0.13	円	—	0.65	0.55	密	埋土上部	×	A II	
A1	S1123	V.a	M6a	1.37	1.13	0.26	円	—	0.93	0.80	密	埋土上部	×	A II	押型文 (386)
A1	S1128	V.a	M6a	(1.05)	0.88	0.13	円	S1128 → S1123	1.01	0.71	疎	埋土全体	×	A II	
A1	S142	V.a	M6c	1.29	0.93	0.13	楕円	—	1.13	0.92	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S117	—	L6c	1.11	1.06	(0.25)	円	S117→弥	0.96	0.95	密	埋土上部	×	A II	
A1	S122	—	M6d	0.79	0.75	(0.25)	円	S122→弥	0.98	0.72	密	埋土全体	×	A II	押型文 (334)
A1	S121	—	M5b	1.01	0.93	(0.25)	円	S121→弥	1.03	0.99	密	埋土全体	○	A I	
A1	S126	V.a	M5b	1.35	1.26	0.14	円	—	1.32	1.24	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S125	V.a	M5b	1.57	1.32	0.15	楕円	S125→S126	1.52	1.19	疎	埋土上部	×	A II	網石刃 (54)、 押型文 (260)
A1	S140	V.a	M5b	1.84	1.62	0.49	円	—	1.82	1.74	密	埋土全体	○	A I	
A1	S139	V.a	L5a	1.29	0.62	0.13	楕円	—	1.18	0.79	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S194	V.b	L5a	1.04	0.97	0.18	円	—	0.93	0.59	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S115	V.a	L5a	1.23	0.85	0.26	楕円	SC257→S116	0.95	0.76	疎	埋土上部	×	A II	押型文 (281)、無文
A1	S116	V.a	L5b	1.26	0.89	0.35	楕円	SC258→ SC233/S115	1.01	0.83	密	埋土全体	○	A I	押型文 (355)、無文
A1	S138	V.a	L5a	1.58	0.62	0.33	円	—	2.12	1.49	疎	埋土全体	×	A II	貝版文 (238) 押型文 (366、380)
A1	S137	V.a	L5a	1.13	0.87	0.42	楕円	—	1.40	1.26	密	埋土全体	○	A I	
A1	S124	V.a	L5c	1.47	1.26	0.31	円	—	1.31	1.23	密	埋土上部	○	A I	押型文、無文 鉄糸文 (368)
A1	S129	V.a	M5d	1.26	1.13	0.23	円	S129→弥	1.09	1.04	密	埋土全体	○	A I	網石 (551)、台石 (589) 鉄糸文 (361、369)
A1	S130	V.a	M5d	0.67	(0.60)	0.10	円	S130→弥	0.57	(0.52)	疎	埋土全体	×	A II	
A1	S123	V.a	M5d	(1.60)	1.04	0.27	楕円	—	1.44	0.98	疎	埋土上部	○	A I	8230 ± 40BP/押型文
A1	S195	V.a	M5d	1.54	1.48	0.30	円	S195→S123	1.38	(1.24)	疎	埋土全体	×	A II	8130 ± 30BP/ 鉄糸文 (167)
A1	S199	V.b	L6d	1.01	0.88	0.13	円	SC218→S199	1.01	0.91	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S1100	V.a	L5b	0.85	0.84	0.06	円	—	0.60	0.39	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S1102	V.a	L5b	0.82	0.59	0.07	楕円	—	0.69	0.64	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S191	V.a	K5a	1.39	(1.05)	0.15	楕円	—	1.15	0.84	疎	埋土全体	×	A II	網石 (547)、 貝版文 (239)
A1	S190	V.a	K5a	1.21	1.07	0.16	円	S190→S191	1.15	0.98	疎	埋土上部	×	A II	石鏃 (468)
A1	S185	V.a	K5b	(0.95)	0.84	0.24	円	SC239→S185	0.92	0.74	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S151	V.a	K5b	1.07	1.05	0.20	円	—	0.88	0.75	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S152	V.a	K5b	1.36	1.11	0.33	円	S151/S152	1.12	0.97	密	埋土全体	○	A I	
A1	S153	V.a	K5b	1.21	(0.95)	0.27	楕円	S153→弥	1.60	1.52	密	埋土上部	○	A I	無文
A1	S154	V.a	K5d	0.76	0.65	0.11	楕円	—	0.76	0.55	疎	埋土上部	×	A II	鎌鏃 (486)
A1	S186	V.a	K5b	(1.35)	(1.10)	0.22	楕円	—	1.34	0.91	密	埋土全体	○	A I	
A1	S119	V.a	K5d	1.59	(1.00)	0.19	楕円	S119 → S186/S1106	1.45	(0.97)	疎	埋土上部	×	A II	押型文 (288)
A1	S1106	V.a	K5b	0.77	0.69	0.12	円	—	0.84	0.65	疎	埋土上部	×	A II	
A1	S150	V.a	K5a	0.91	0.82	0.18	円	—	0.91	0.80	疎	埋土上部	×	A II	押型文 (288)
A1	S149	V.a	K5a	1.84	1.73	0.45	円	—	2.02	1.68	密	埋土全体	○	A I	
A1	S146	V.a	K5c	1.75	1.62	0.48	円	S146→弥	1.72	1.66	密	埋土全体	○	A I	8260 ± 60BP(和石上蓋) 8345 ± 30BP(内部障材) コナラ属コナラ薪

調査区	遺構名	検出層位	検出位置	掘り込み (m)					内部障 (m)					分類	自然科学分析 / 出土遺物
				長軸	短軸	残深	平面形	重複遺構	長軸	短軸	密度	障位置	配石		
A1	SI47	V a	K5c	0.98	0.86	0.15	円	—	0.91	0.86	疎	埋土上部	×	A II	
A1	SI45	V a	L5d	0.95	0.73	0.12	楕円	SI45→弥	0.85	0.48	疎	埋土上部	×	A II	無文
A1	SI20	V a	L5d	1.56	1.18	0.26	楕円	—	1.35	1.25	疎	埋土全体	○	A I	部糸文、台石 (590)
A1	SI35	V a	L5d	0.73	0.62	0.11	円	—	0.64	0.47	疎	埋土全体	×	A II	
A1	SI103	V a	L5c	1.09	0.96	0.26	円	—	1.03	0.86	疎	埋土上部	×	A II	無文
A1	SI27	V a	L5c	0.92	0.72	0.16	楕円	SC263/SC255 → SC254他 → SI27	0.84	0.82	密	埋土上部	×	A II	
A1	SI89	V a	L4b	1.22	0.89	0.21	楕円	SC259→SI89	1.03	0.61	疎	埋土上部	×	A II	無文
A1	SI36	V a	L5d	0.79	0.62	0.07	円	SI36→弥	1.15	0.78	疎	埋土上部	×	A II	
A1	SI18	V a	K6a	0.91	0.84	0.16	円	—	0.64	0.61	疎	埋土上部	×	A II	8155 ± 30BP
A1	SI110	V b	L4b	0.49	0.46	0.08	円	—	0.57	0.36	疎	埋土上部	×	A II	
A1	SI34	V a	L4a	(0.90)	0.62	0.17	円	SI34→風	0.54	0.39	疎	埋土上部	×	A II	
A1	SI33	V a	M5d	1.57	0.62	0.27	楕円	—	1.14	1.12	密	埋土全体	○	A I	
A1	SI120	V a	M5c	—	—	—	—	—	1.19	0.63	疎	—	×	B	押型文
A1	SI121	V a	M4a	1.20	0.96	0.24	楕円	SI121→弥	1.02	0.93	密	埋土全体	×	A II	
A1	SI122	V a	M4a	0.91	0.72	0.22	楕円	—	1.04	0.83	密	埋土上部	×	A II	無文、押型文 (264)
A1	SI12	V a	M4a	0.87	0.77	0.11	円	—	1.08	0.95	密	埋土全体	×	A II	
A1	SI1	V a	M4b	1.17	1.06	0.15	円	SI14→SI1	1.10	1.05	密	埋土上部	×	A II	部糸文、敲石 (557)
A1	SI14	V a	M4b	(1.50)	1.39	0.29	楕円	風→SI14 → SI1	(1.52)	1.28	疎	埋土上部	×	A II	押型文 (331)、無文
A1	SI11	V a	M4b	1.43	(1.40)	0.28	円	SI11→風	1.25	(1.23)	密	埋土上部	○	A I	敲石 (534)
A1	SI108	V a	M4a	(1.05)	(0.80)	0.21	楕円	—	1.30	0.95	疎	埋土全体	○	A I	押型文、無文
A1	SI4	V a	M4a	(2.26)	(1.36)	0.35	楕円	SI2 → SI3 → SI4 → SI08 → 弥	1.61	1.45	密	埋土上部	○	A I	押型文、無文
A1	SI3	V a	M4a	(1.40)	(0.95)	0.24	円	—	(1.34)	(1.34)	密	埋土上部	×	A II	
A1	SI2	V a	M4c	2.46	1.40	0.38	楕円	—	1.98	(1.45)	密	埋土上部	×	A II	8760 ± 40BP / 無文、押型文 (314)
A1	SI32	V a	L4a	0.94	(0.60)	0.24	円	SI32→風	1.02	0.99	疎	埋土上部	×	A II	押型文、部糸文、無文
A1	SI119	V B	M4d	0.85	0.72	0.04	円	—	0.82	0.61	疎	埋土全体	×	A II	
A1	SI111	V a	M4d	0.77	0.63	0.12	楕円	—	0.77	0.62	密	埋土全体	×	A II	敲石 (554)
A1	SI31	V a	L4c	0.87	(0.60)	0.17	円	SI31→風	1.24	(0.76)	疎	埋土上部	×	A II	敲石 (575)
A1	SI116	V a	M4d	1.85	1.34	0.57	楕円	—	1.76	1.20	密	V字状	○	A I	二次加工割片 (24) / 無文
A1	SI5	V a	L4c	1.43	1.37	0.26	円	—	1.40	1.19	疎	埋土上部	×	A II	
A1	SI6	V a	L3a	1.19	0.93	0.18	楕円	—	1.22	1.30	密	埋土上部	×	A II	石鏡 (462)
A1	SI10	V a	L4d	1.08	0.98	0.19	円	—	0.84	0.77	密	埋土全体	×	A II	押型文
A1	SI7	V a	L4d	0.96	(0.80)	0.14	円	—	1.30	0.77	疎	埋土上部	×	A II	
A1	SI8	V a	L4d	1.31	1.20	0.37	円	SI7 → SI8/SI10、 SI9 → SI8	1.23	1.17	密	埋土全体	○	A I	3860 ± 40BP (ランプレックスセラウカ) / 押型文 (257) / 接写文 (139)
A1	SI9	V a	L3b	0.98	0.87	0.07	円	—	0.76	0.22	疎	埋土全体	×	A II	押型文、 部糸文 (362, 381)

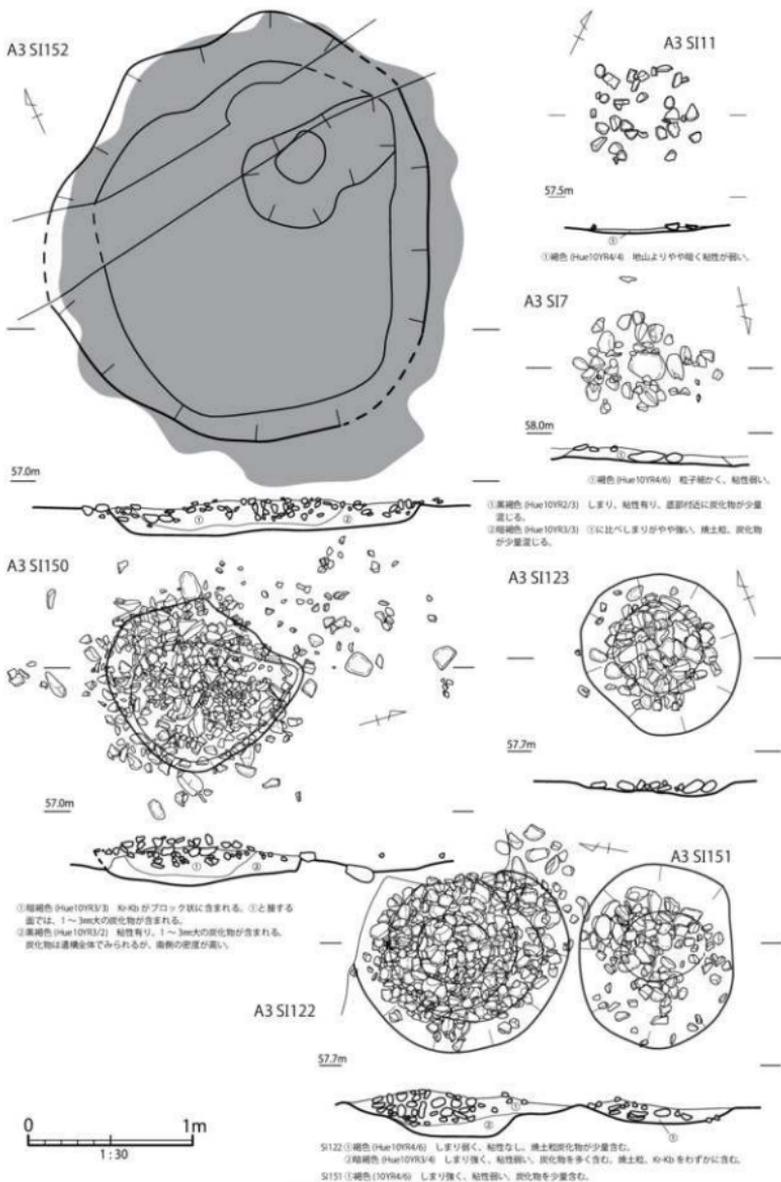
※ 重複遺構に関しては矢印により (古) → (新) を表し、新旧関係が不明なものも / で表現した。
また、弥生時代以降の遺構と切り合いをもつものは →弥、推定により削平を受けているものは →削、風向村により新旧が分かるものは →風とした。
自然科学分析 / 出土遺物に示す年代値は補正炭素 14 年代値である。また、土器、石器等の彫りに示す () は検定する遺物の発掘番号を示している。



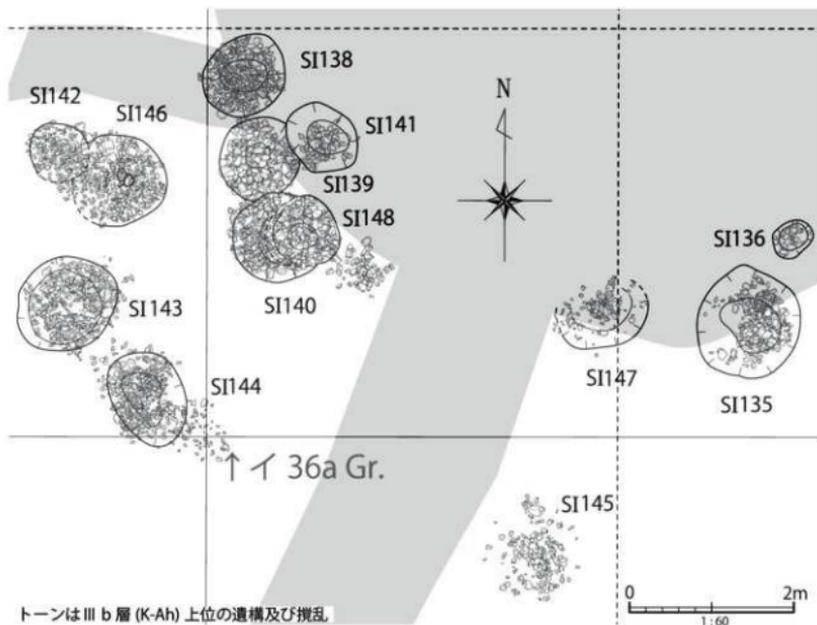
第 25 図 三次調査 A 区遺構分布図



第26図 集石遺構実測図(1)

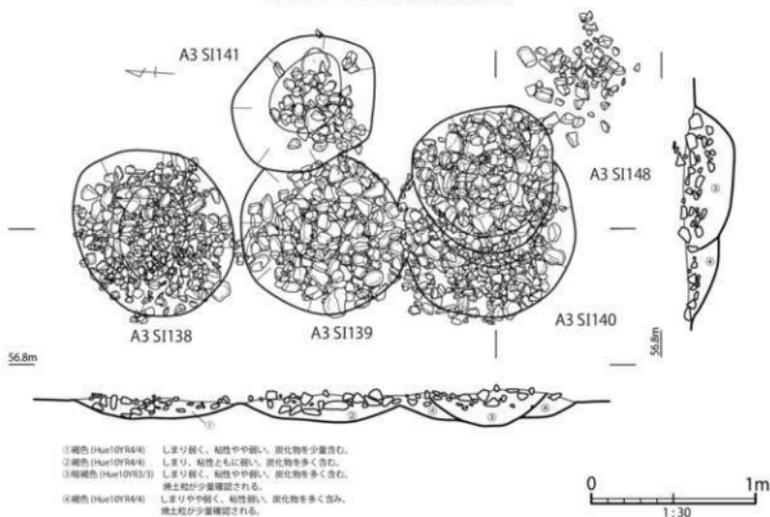


第27図 集石遺構実測図 (2)

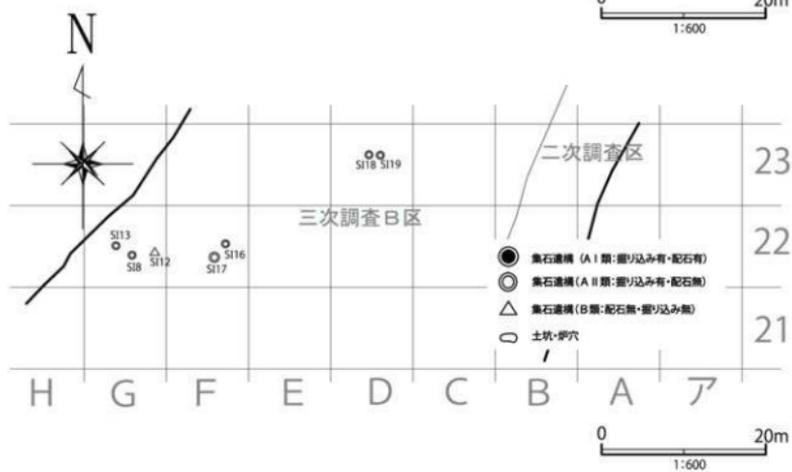
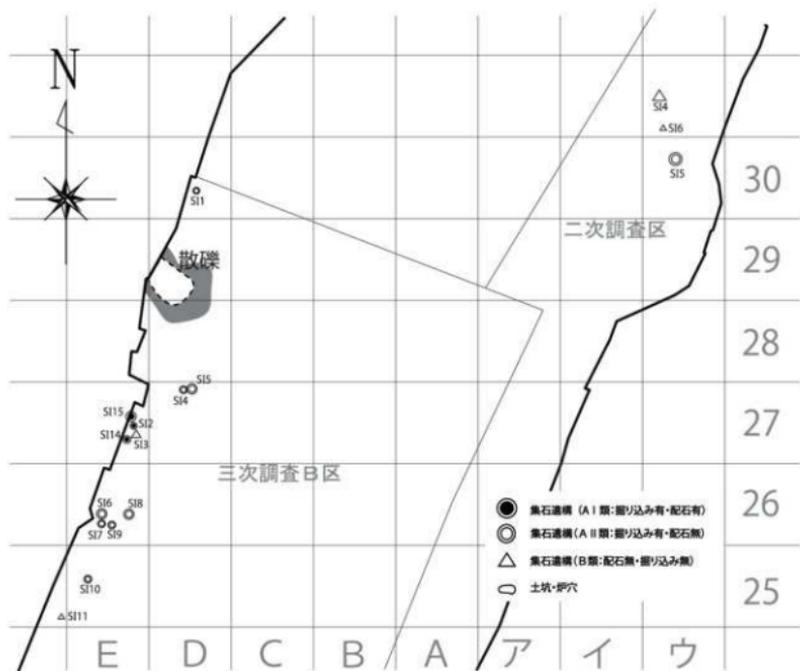


トーンはIII b層 (K-Ah) 上位の遺構及び攪乱

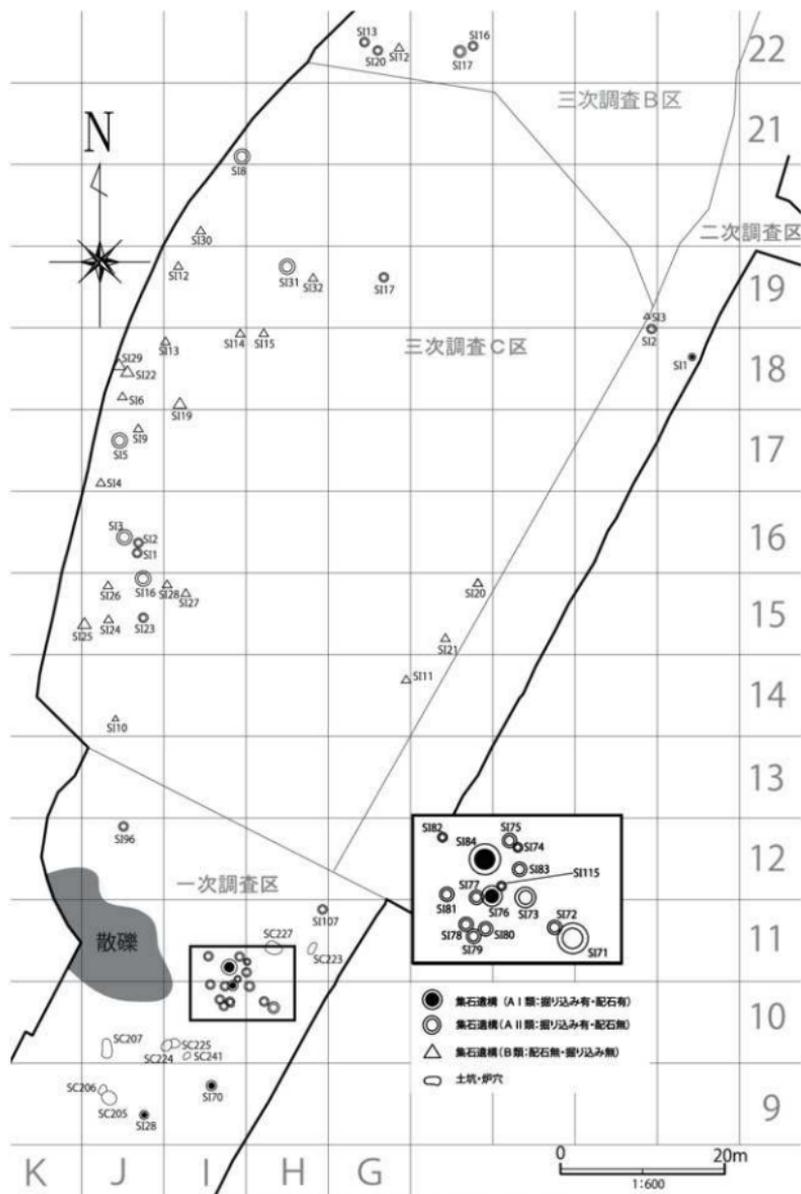
第 28 図 イ 36Gr. 周辺遺構分布図



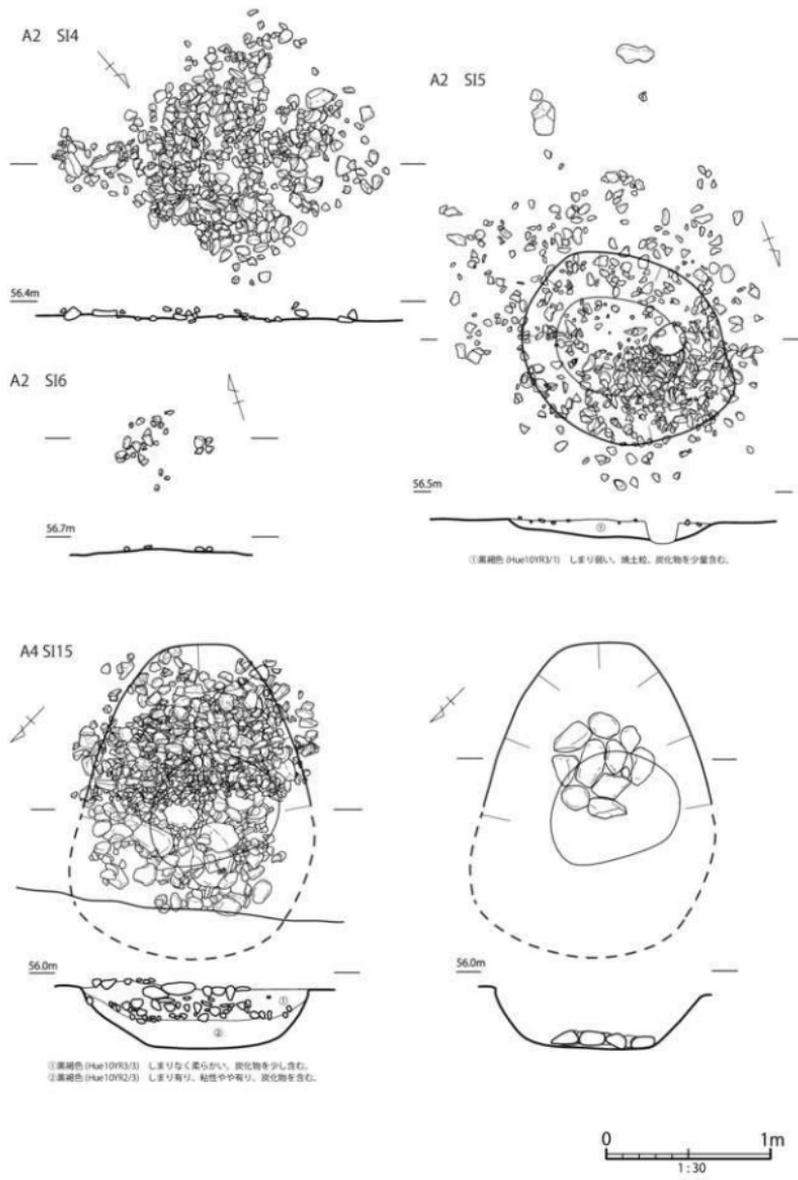
第 29 図 集石遺構実測図 (3)



第 30 図 二次調査区・三次調査B区遺構分布図

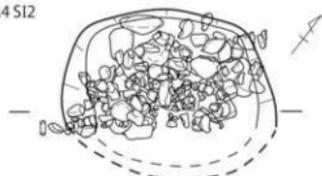


第 31 図 三次調査C区・一次調査区遺構分布図



第32図 集石遺構実測図(4)

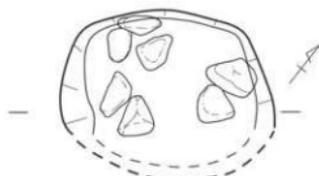
A4 S12



56.2m



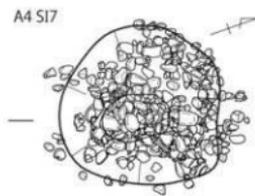
①褐色 (Hue10YR4/4) しまり、粘性ともに弱い、炭化物を少量含む。



56.2m



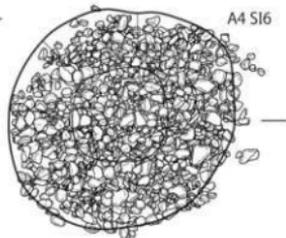
A4 S17



56.1m



A4 S16

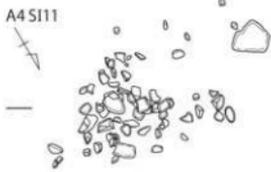


S17 ①褐色 (Hue10YR4/4) しまり弱く、粘性やや強し、炭化物を少量含む。

S16 ①黒褐色 (Hue10YR2/3) しまり、粘性ともに弱い、炭化物を多く含む。

②紅褐色 (Hue10YR3/4) しまり弱く、粘性やや強い
③がブロック状に含まれる、炭化物を含む。

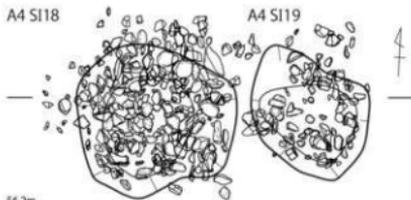
A4 S111



56.0m



A4 S118



56.2m



S118 ①黒褐色 (Hue10YR2/3) しまり、粘性ともに弱い、
S119 ①黒褐色 (Hue10YR3/2) しまりやや弱く、粘性が強い。

A4 S19

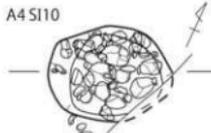


56.2m



①褐色 (Hue10YR4/4) しまり、粘性ともに弱い。

A4 S110



56.0m



①褐色 (Hue10YR4/4) しまり弱く、粘性有り。

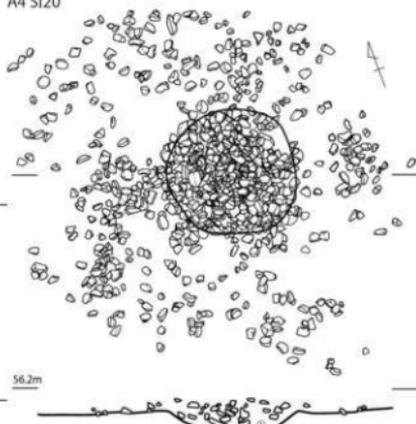
第 33 図 集石遺構実測図 (5)



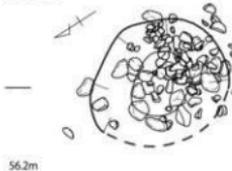
A4 SI12



A4 SI20



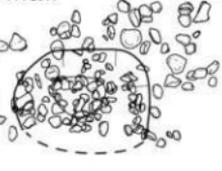
A4 SI16



56.2m

S16 (暗褐色 (hue 10YR3/4) しまり有り、
粘性やや弱く炭化物を少量含む。

A4 SI17



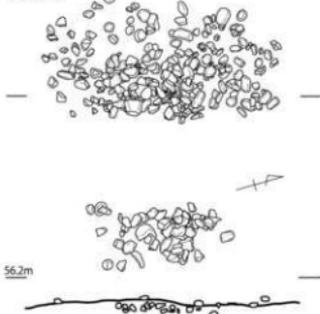
S17 (暗褐色 (hue 10YR3/3) しまりやや弱く、
粘性弱く炭化物を少量含む。

(暗褐色 (hue 10YR3/3) しまりなく、粘性がやや弱く、

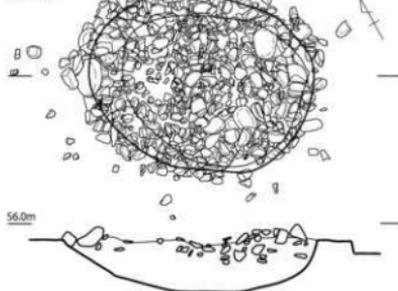
A5 SI29



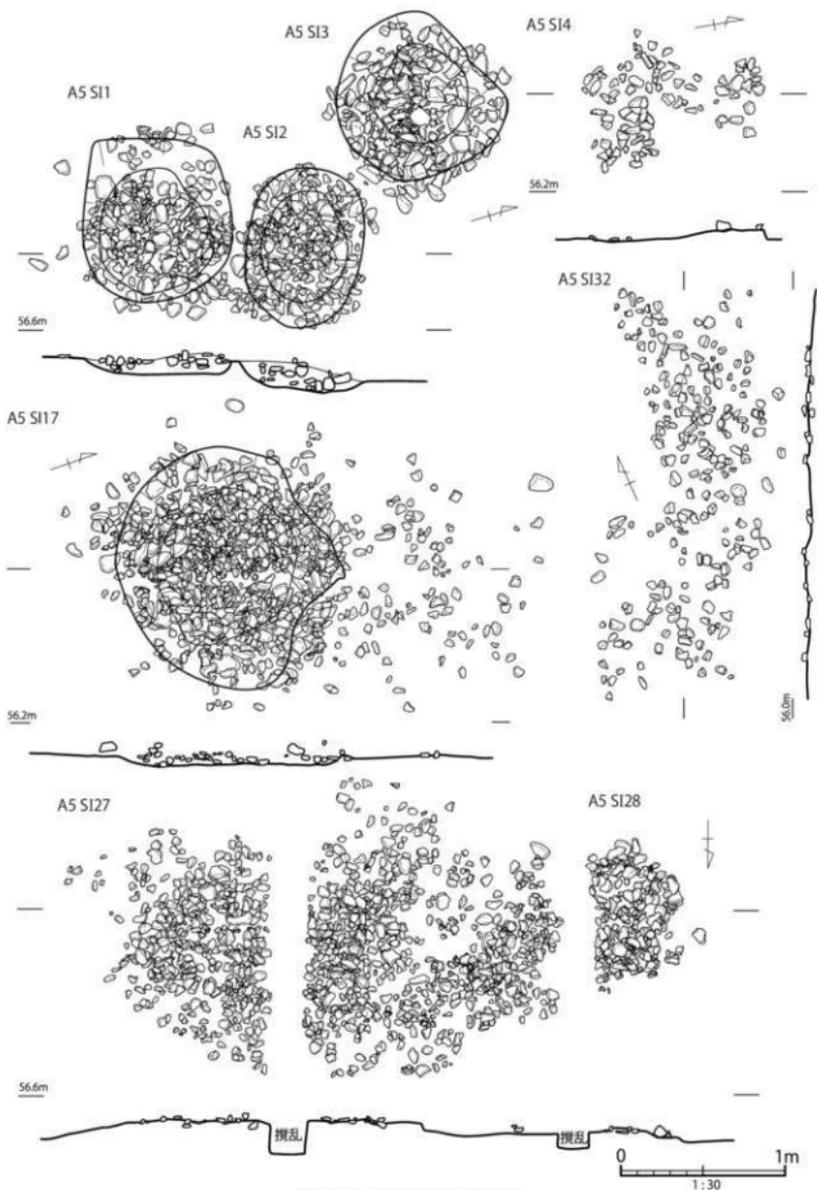
A5 SI22



A5 SI31

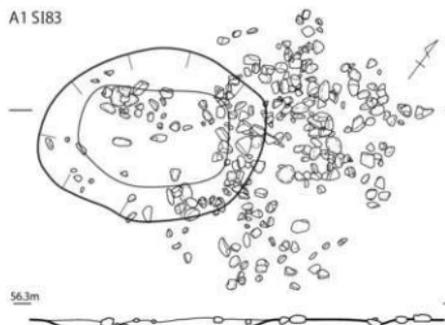


第 34 図 集石遺構実測図 (6)

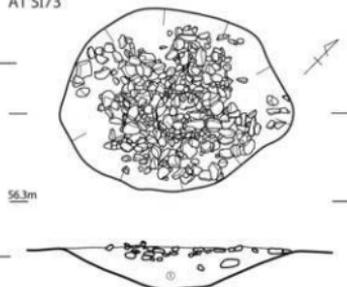


第35図 集石遺構実測図(7)

A1 S183

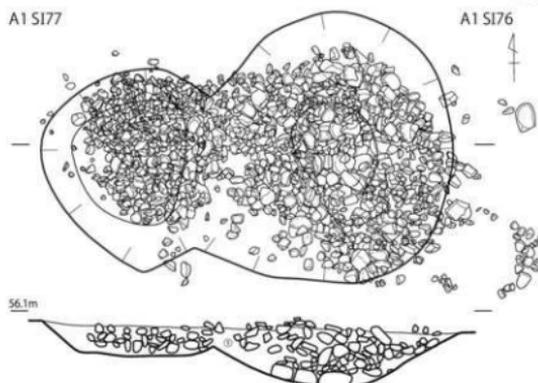


A1 S173



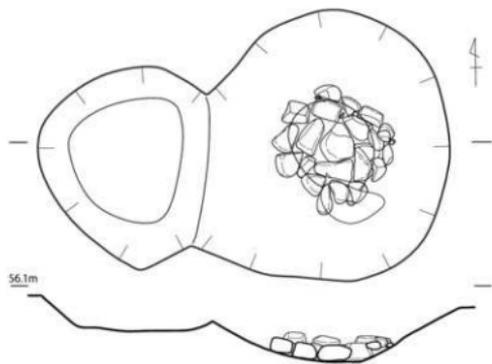
①黒褐色 (hue10YR3/1) しまりやや強、炭化物が含まれる。

A1 S177

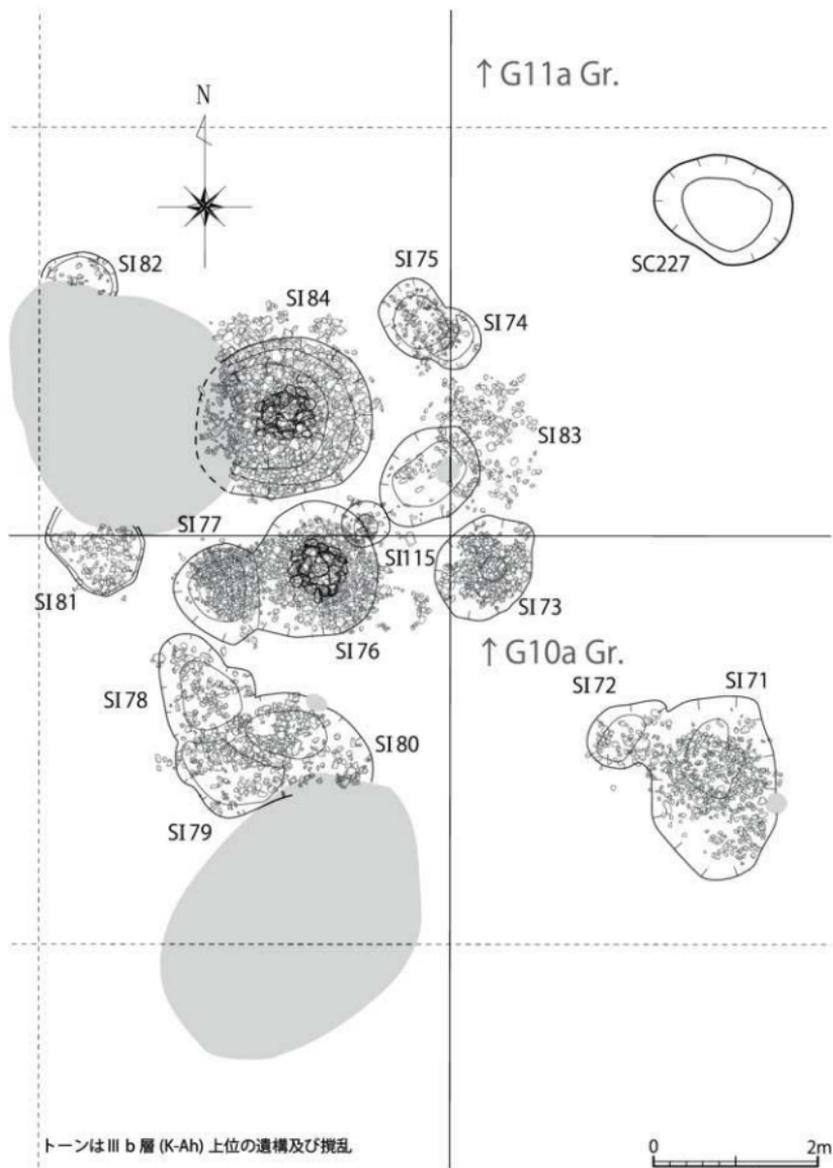


②暗褐色 (hue10YR3/6) しまりやや強く、粘性弱い。炭化物が少量含まれる。
S176、S177とで埋土の特徴に変化は確認されない。

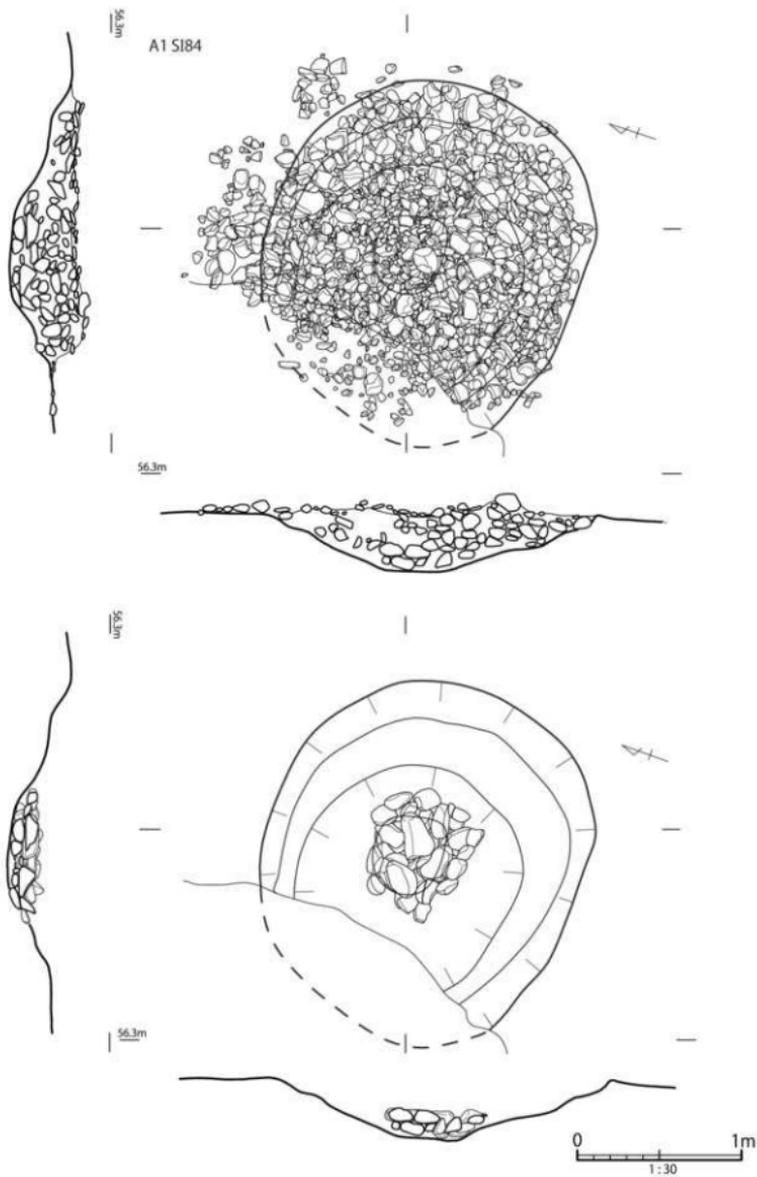
A1 S176



第36図 集石遺構実測図(8)

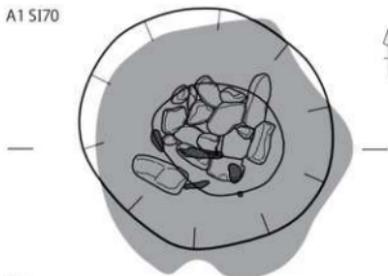


第 37 図 H 10Gr. 周辺遺構分布図



第38圖 集石遺構実測図(9)

A1 S170

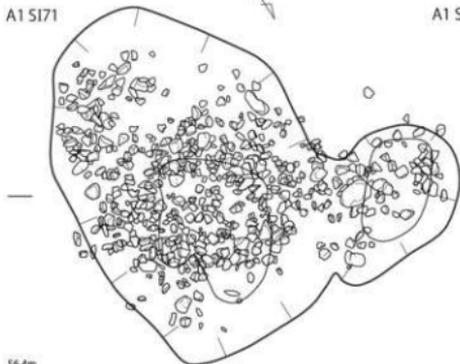


56.2m

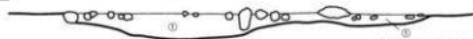


①褐色 (Hue10YR4/6) しまりが強く、粘物はほとんどない。
②黄褐色 (Hue10YR2/2) しまりやや強く、粘性弱い。炭化物が多く含まれる。
粘土が少量含まれる。

A1 S171



56.4m

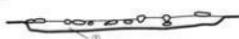


①暗褐色 (Hue10YR3/2) しまり、粘性ともにやや弱い。炭化物が少量含まれる。
②黄褐色 (Hue10YR2/3) しまり、粘性ともに弱い。

A1 S181



56.5m



①褐色 (Hue10YR4/6) しまりがやや強く、黄色ブロックが混じる。

A1 S172

A1 S115

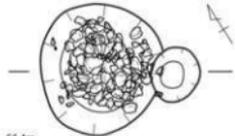


56.5m

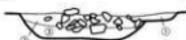


①暗褐色 (Hue10YR3/4) しまりが弱く、粘性やや強い。
炭化物が少量混じる。

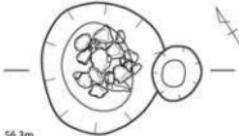
A1 S128



56.4m



①黄褐色 (Hue10YR2/3) 粘性弱く、黄色の粘土ブロックを多く含む。
②黄褐色 (Hue10YR2/3) しまり、粘性ともに弱い。
③暗褐色 (Hue10YR3/4) しまり、粘性ともにやや強い。

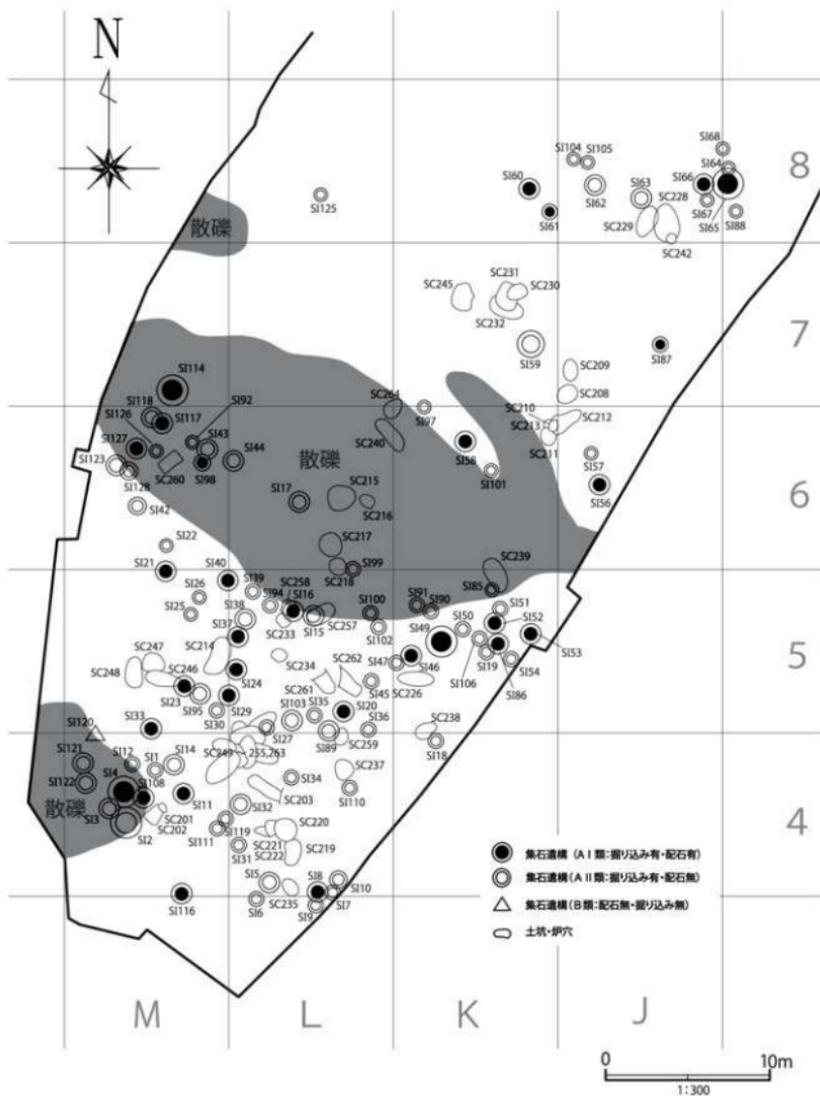


56.3m

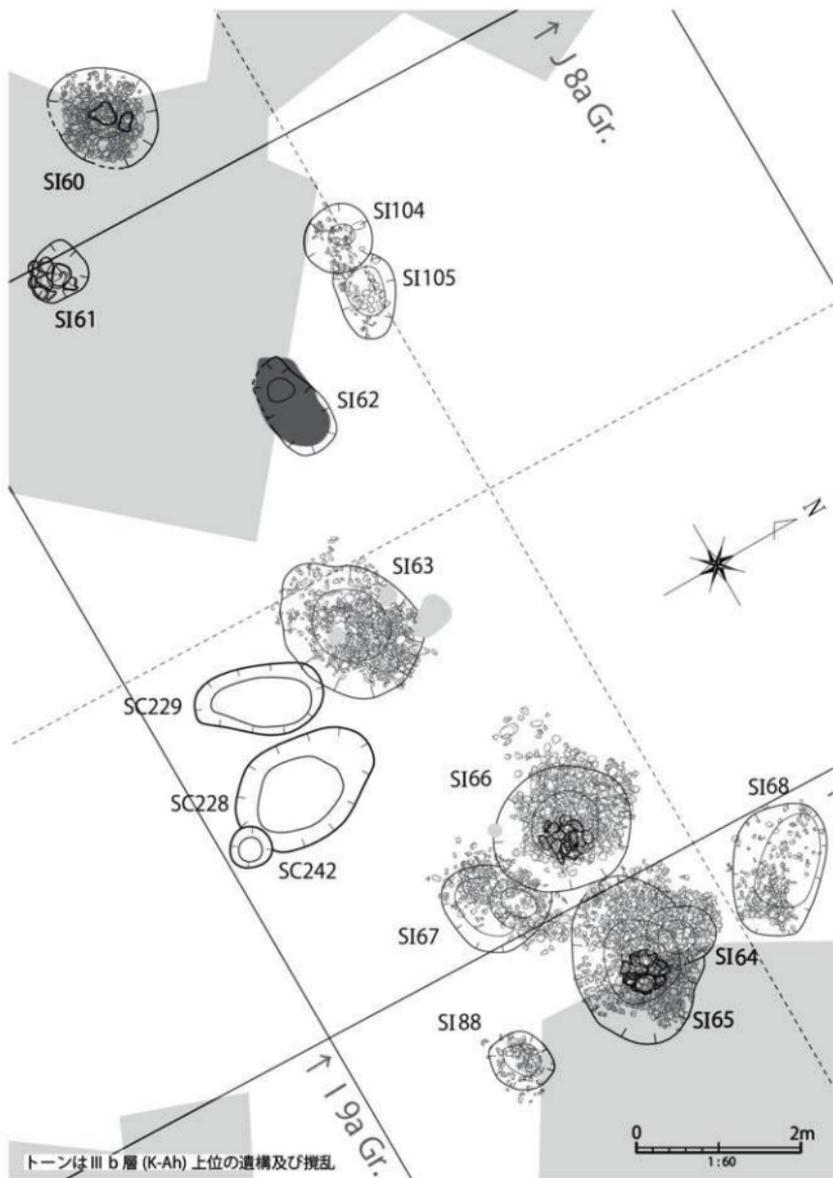


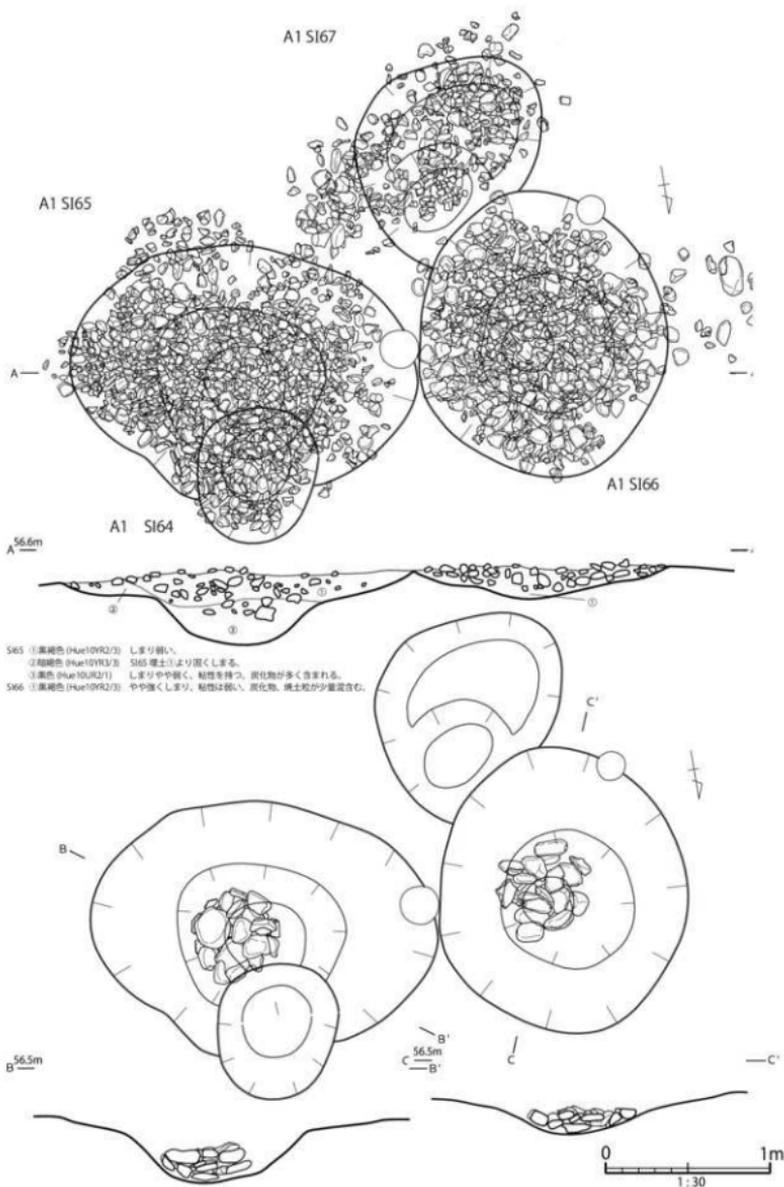
0 1m
1:30

第39図 集石遺構実測図 (10)



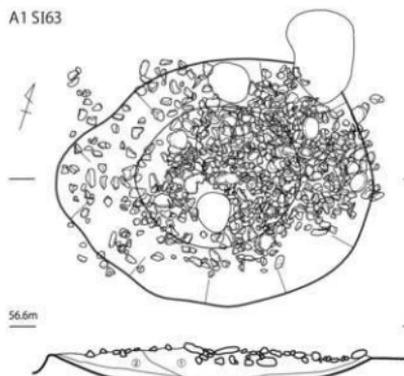
第 40 図 一次調査区遺構分布図





第42図 集石遺構実測図 (11)

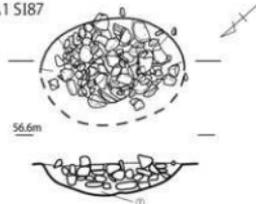
A1 SI63



56.6m

- ①黒褐色 (Hue10YR3/2) しまりが強く、粘性は弱い。
 ②黒褐色 (Hue10YR3/3) しまりや中強く、粘性弱い。
 ③褐色 (Hue10YR4/3) しまり、粘性ともに弱い。埋土③が全体的に覆じる。

A1 SI87



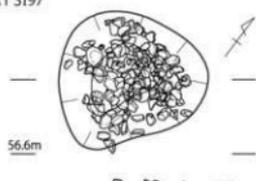
56.6m

- ①黒褐色 (Hue10YR3/4) しまりや中強く、粘性弱い。炭化物を少量含む。



56.6m

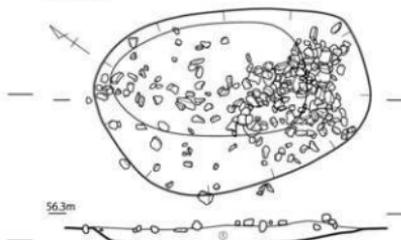
A1 SI97



56.6m

- ①に似て、黒褐色 (Hue10YR4/2) しまりや中強く、粘性弱い。

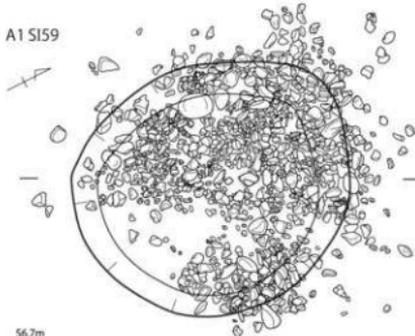
A1 SI68



56.3m

- ①黒褐色 (Hue10YR3/4) しまりや中強く、炭化物を少量含む。

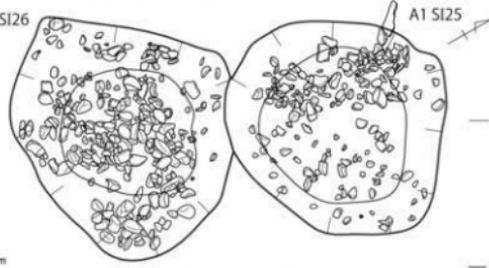
A1 SI59



56.7m

- ①黒褐色 (Hue10YR2/3) しまり、粘性ともに弱い。
 ②灰黒褐色 (Hue10YR4/2) ①より明るく、粒子が細かい。

A1 SI26

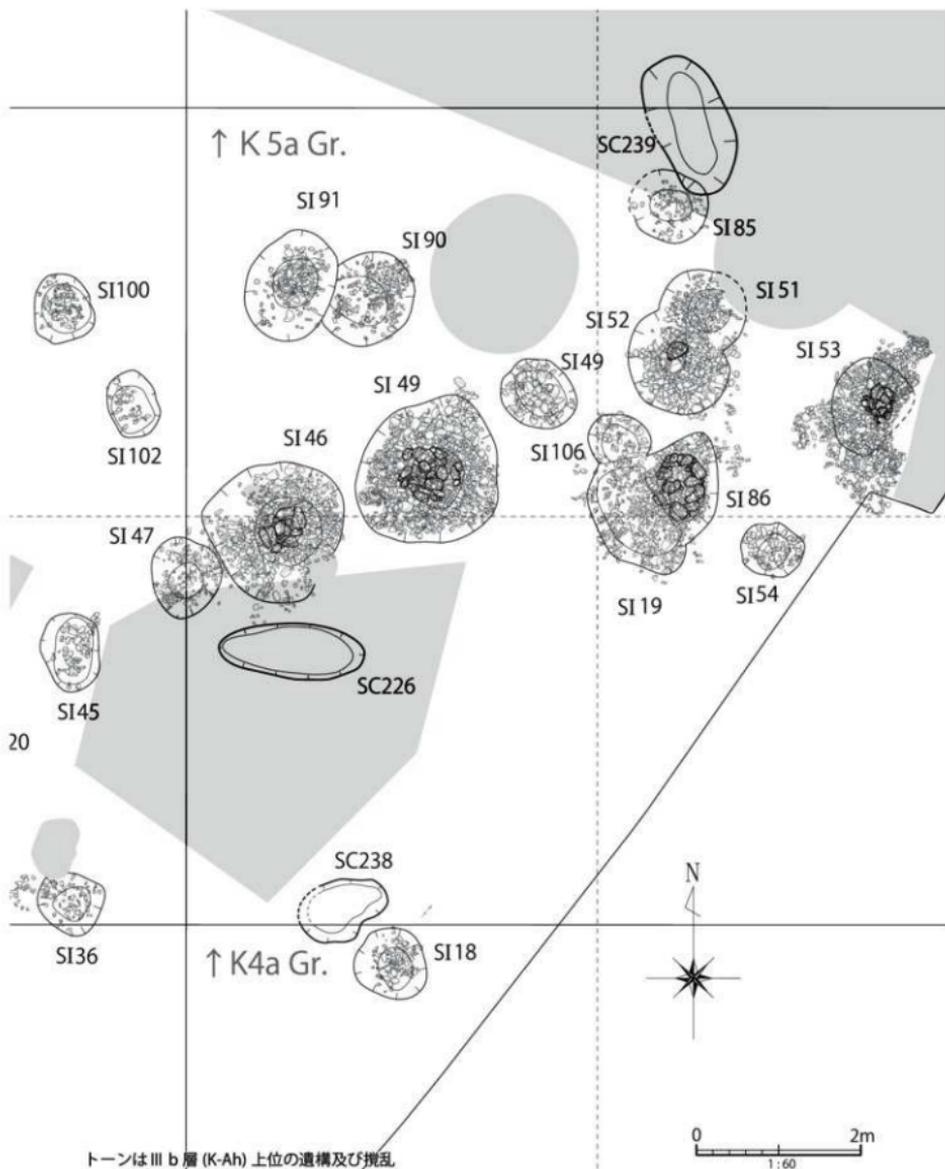


56.6m

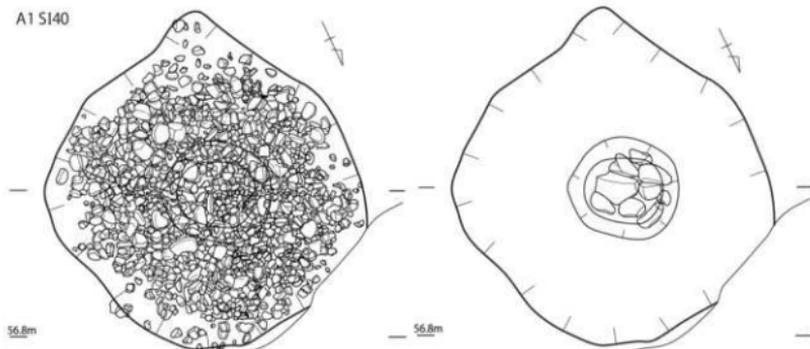
- SI25 ①黒褐色 (Hue10YR3/4) しまり強く、炭化物を少量含む。
 SI26 ①黒褐色 (Hue10YR2/2) や中強くしまり、炭化物を少量含む。

0 1m
1:30

第43図 集石遺構実測図 (12)

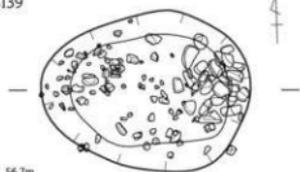


A1 S140



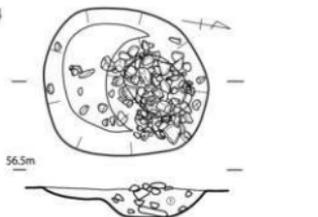
①黒褐色 (Hae10YR2/3) しまり弱い。
 ②黒色 (Hae10YR2/1) しまり弱く、炭化物を含む。
 ③暗褐色 (Hae3/3) ①、②よりしまりが強い。

A1 S139



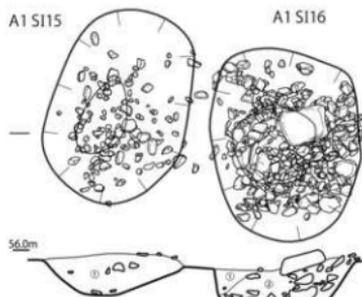
①暗褐色 (Hae10YR3/4) しまりやや強い。炭化物を少量含む。

A1 S194



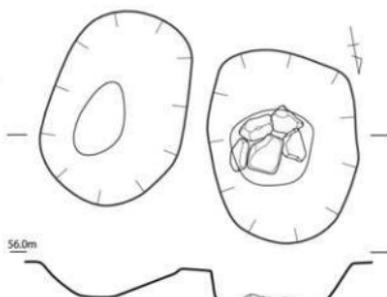
①暗褐色 (Hae10YR3/3) しまり強く、粘性は弱い。炭化物を全体的に含む。

A1 S115



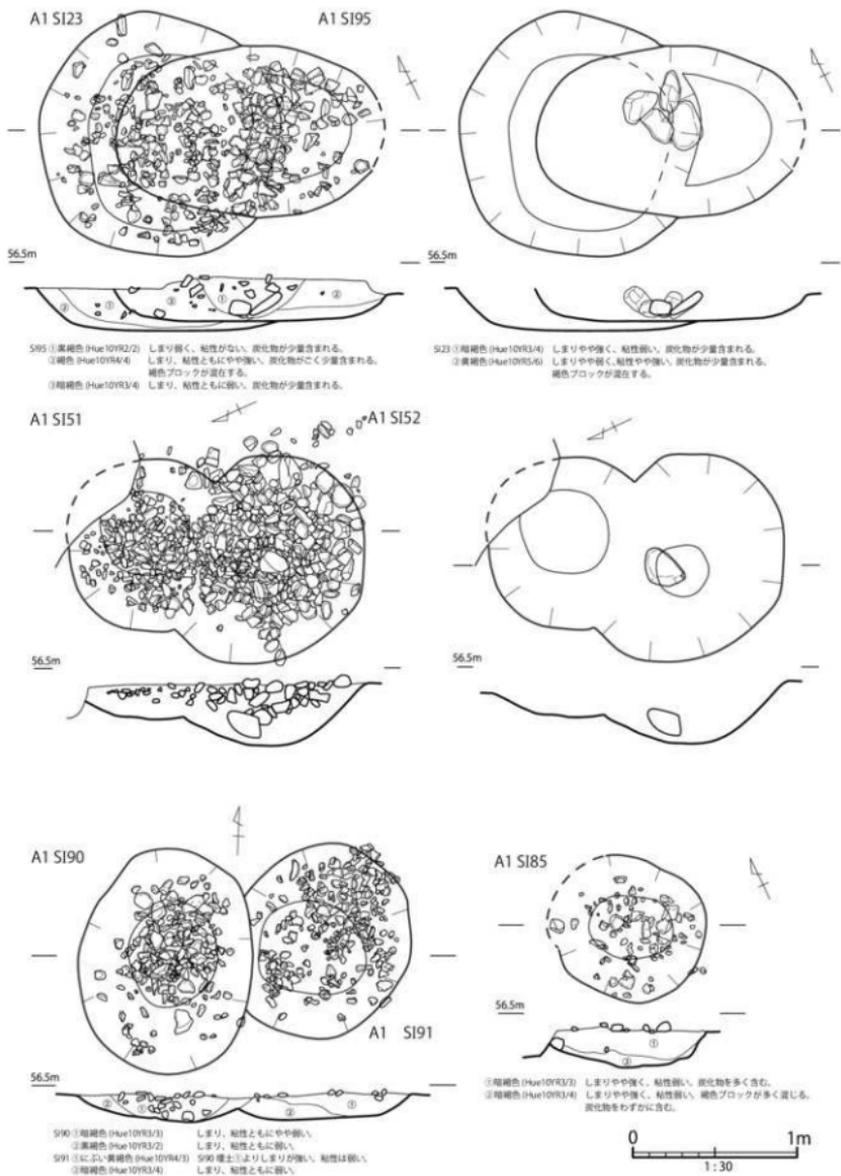
S15 ①暗褐色 (Hae10YR3/3) しまり、粘性ともやや中間。炭化物を少量含む。
 S16 ①暗褐色 (Hae10YR3/4) しまり弱く、粘性強い。炭化物を少量含む。V層に似た土が多く混じる。
 ②黒褐色 (Hae10YR2/3) しまり弱く、粘性やや中間。炭化物を少量含む。

A1 S116



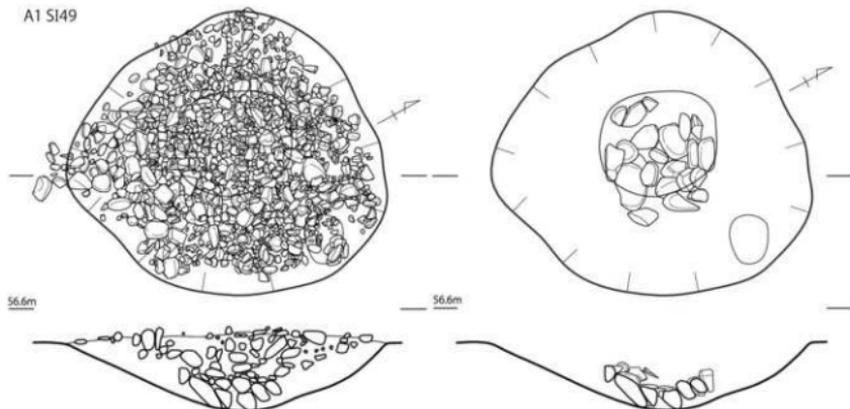
0 1m
 1:30

第46図 集石遺構実測図 (13)

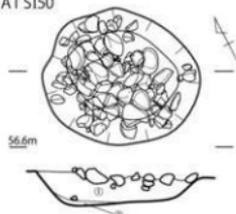


第47図 集石遺構実測図 (14)

A1 S149

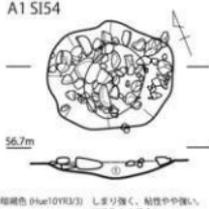


A1 S150



① 黒褐色 (hue10YR3/3) しまり強く、粘性強い。炭化物を多く含む。
② 黒褐色 (hue10YR3/4) しまりやや強く、粘性弱い。
褐色ロームブロックが多く混じる。

A1 S154



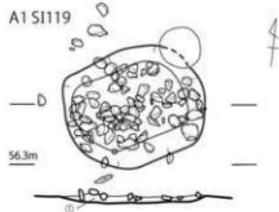
① 黒褐色 (hue10YR3/3) しまり強く、粘性やや強い。
炭化物を少量含む。

A1 S145



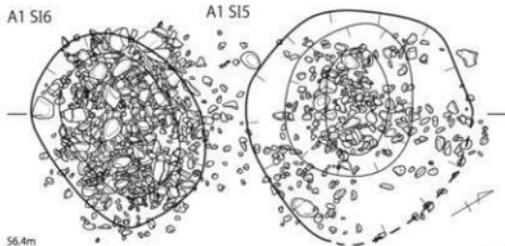
① に近い黄褐色 (hue10YR4/3) しまり、粘性ともにやや強い。
炭化物を多く含む。

A1 S1119



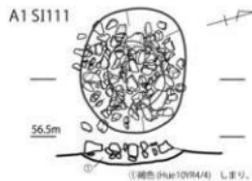
① 黄褐色 (hue10YR5/6) しまりがやや弱い。粘土ブロックが多く入る。

A1 S16



S15 ① 黒褐色 (hue10YR2/2) 柔らかく、少し粘性がある。
② 褐色 (hue10YR4/6) ①に比べ粘性が強い。
S16 ① 暗褐色 (hue10YR3/4) しまりが強い。
② に近い黄褐色 (hue10YR4/3) 非常に小さい自然粒が混在する。

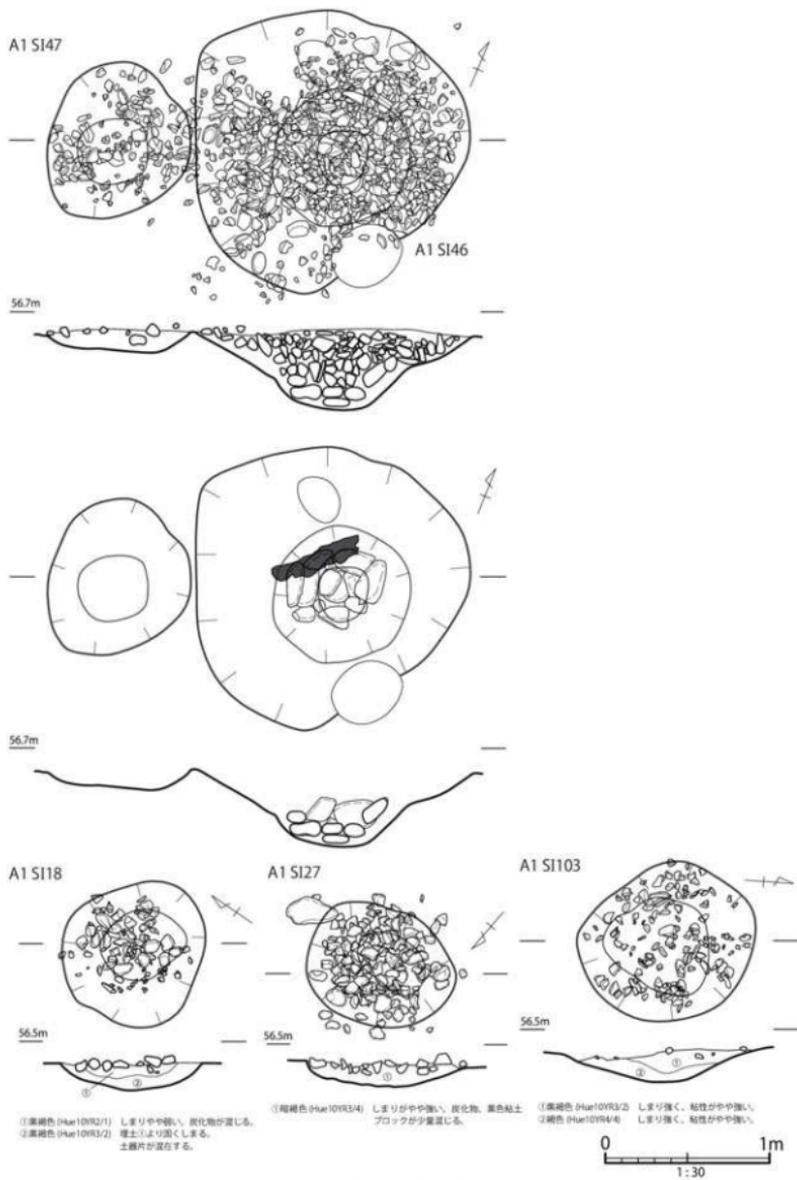
A1 S1111



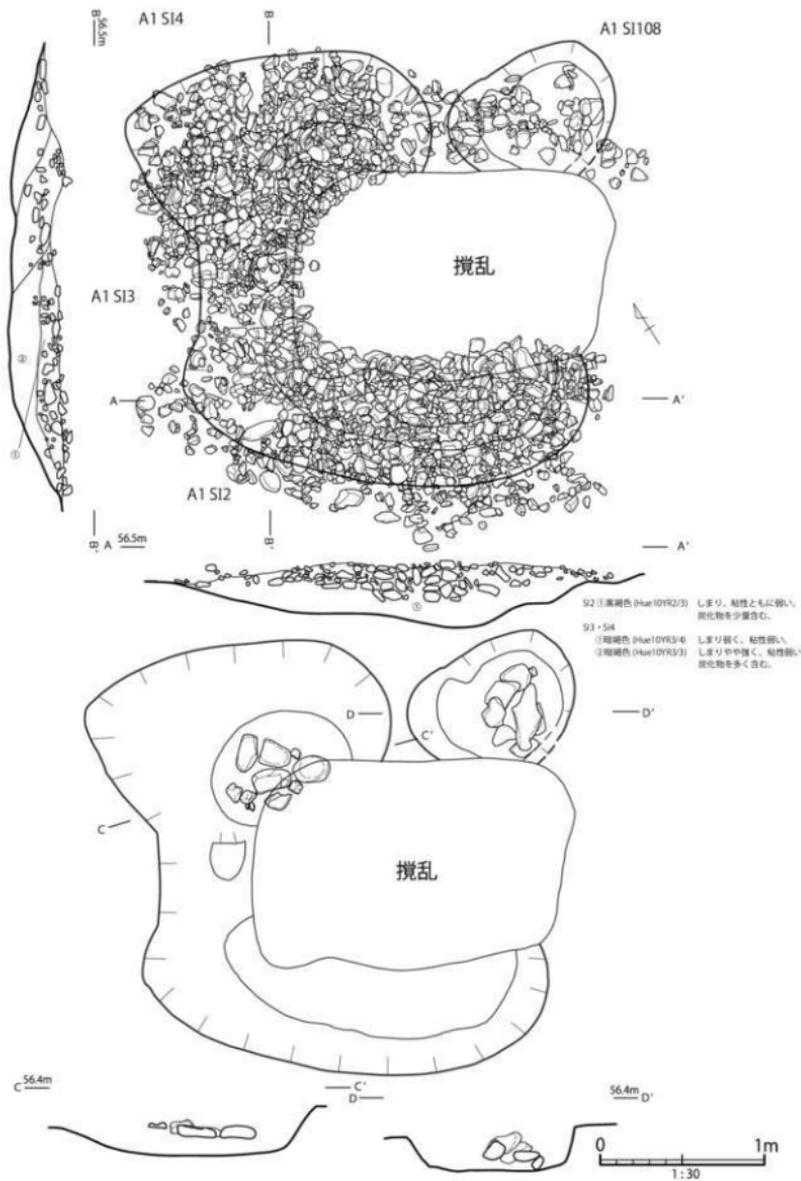
① 黒褐色 (hue10YR4/4) しまり、粘性ともに強い。

0 1m
1:30

第48図 集石遺構実測図 (15)



第49図 集石遺構実測図 (16)



第50図 集石遺構実測図 (17)

(2) 土器埋設遺構 (第52図:写真図版30, 51)

A1SC210は土器埋設遺構である。遺構はK6Grに位置し、A1SC212とA1SC211を切るような形で検出された。土坑は土器胴部(200)が巡る状況を確認した後、3cm程掘り下げて検出に至っている。長径0.58m×短径0.42m、検出面からの深さは0.08mを測る。土器は、逆位で出土し、底部付近は打ち欠かされている。土器あるいは土坑内からは、焼けたかのように赤化している小礫が散在する。

土器埋設遺構内出土の土器(200)は、口径22.5cmで内面には植物の繊維痕と思われる痕跡が多く確認される。口縁部から胴部上面にかけて貝殻条痕が横位に施され、胴部以下は風化が激しいが、縦位の貝殻条痕が確認される。土器内の土を水洗選別したところ、ユリ科植物の鱗片と炭化物が少量確認された。また、この炭化物の炭素14年代測定を行ったところ、年代値は8,150±40BPであった。

(3) 炉穴 (第53図~第54図:写真図版31~34)

炉穴は調査区北端の三次調査A区で9基、南端の一次調査区で2基検出されている(第5表)。なお、炉穴内埋土中から出土した土器は、貝殻文系土器と無文土器であった。

A3SP4, SP9 (第53図)

SP4, SP9はオ44Grに位置する。SP4は、長径1.72m×短径1.20mで、平面形は楕円形を呈する。遺構埋土中からは、204、205が出土している。204は、貝殻文円筒形土器である。口唇部は丁寧にナデられ、口縁部が器にはへら状工具による斜位の刺突文列が施される。また、胴部には貝殻条痕が施される。205は204の底部と考えられる。

A3SP6, SP7, SP8 (第53図)

SP6, SP7, SP8はエ42Grに位置し、3基が切り合う炉穴である。炉穴はSP6が最も古く、SP7とSP8の先後関係は不明である。SP6の底面付近は焼土粒を多く含み、固くしまっている。SP6埋土中から土器片2点と、黒曜石製の剥片4点が出土している。

また、SP6遺構底部付近より採取した炭化材に対して炭素14年代測定を行ったところ、9,465±35BPという年代値が得られている。

A1SC240 (第53図)

SC240はL6Grに位置する。埋土全体に炭化物を含み、遺構底部付近には焼土が混じる。遺構の最深部より段を設けている。

A1SC207 (第53図)

SC207はJ10Grに位置する。平面形は楕円形を呈し、底面は北側から南側にかけて5cm高くなる。遺構底部から炭化物、焼土が少量確認されている。

A3SP1, SP2, SP3 (第54図)

SP1は2基あるいは3基が切り合っていた可能性がある炉穴であるが、遺構掘削時にはSP3の立ち上がりしか判断できなかった。

SP1・SP2からは、同一個体である206、207が出土している。底部から胴部へとまっすぐに立ち上がる貝殻文円筒形土器の深鉢で、内外面ともに丁寧なナデが施されている。

A3SP5 (第54図)

SP5はオ44Grに位置する。平面形が円形を呈するが、検出面からの深さが0.1mと浅い。遺構中央に焼土が集中していることから炉穴と判断した。

(4) 土坑 (第55図~第58図:写真図版34~36)

土坑は、調査区の南にあたる一次調査区より60基確認されている。土坑に関しては、掲載した遺構の中で遺物が出土したものを中心に詳述する。なお、その他の土坑については第6表に記載している。

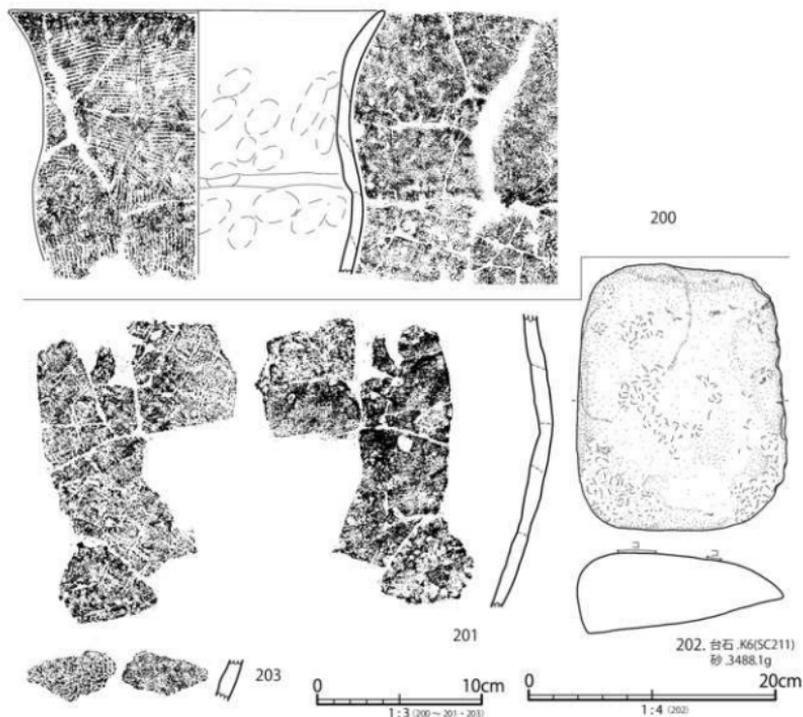
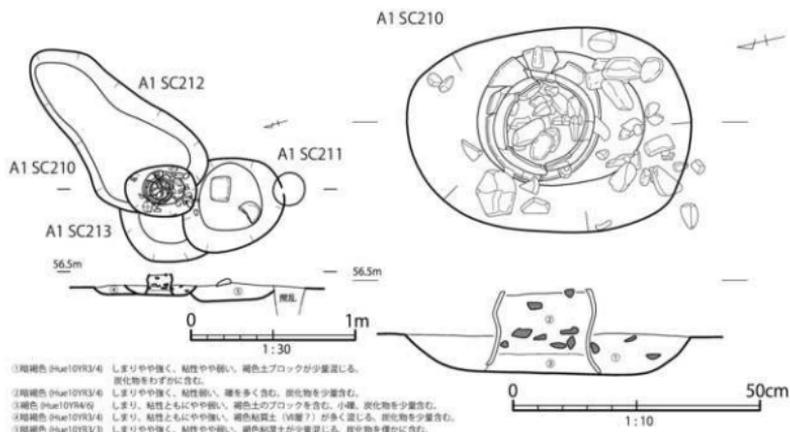
A1SC211, SC212, SC213 (第52図)

SC211、SC212、SC213は土器埋設遺構(SC210)に切られる土坑である。全ての土坑は炭化物が少量検出されたものの、SC210で確認されたような赤化した小礫は含まれていなかった。

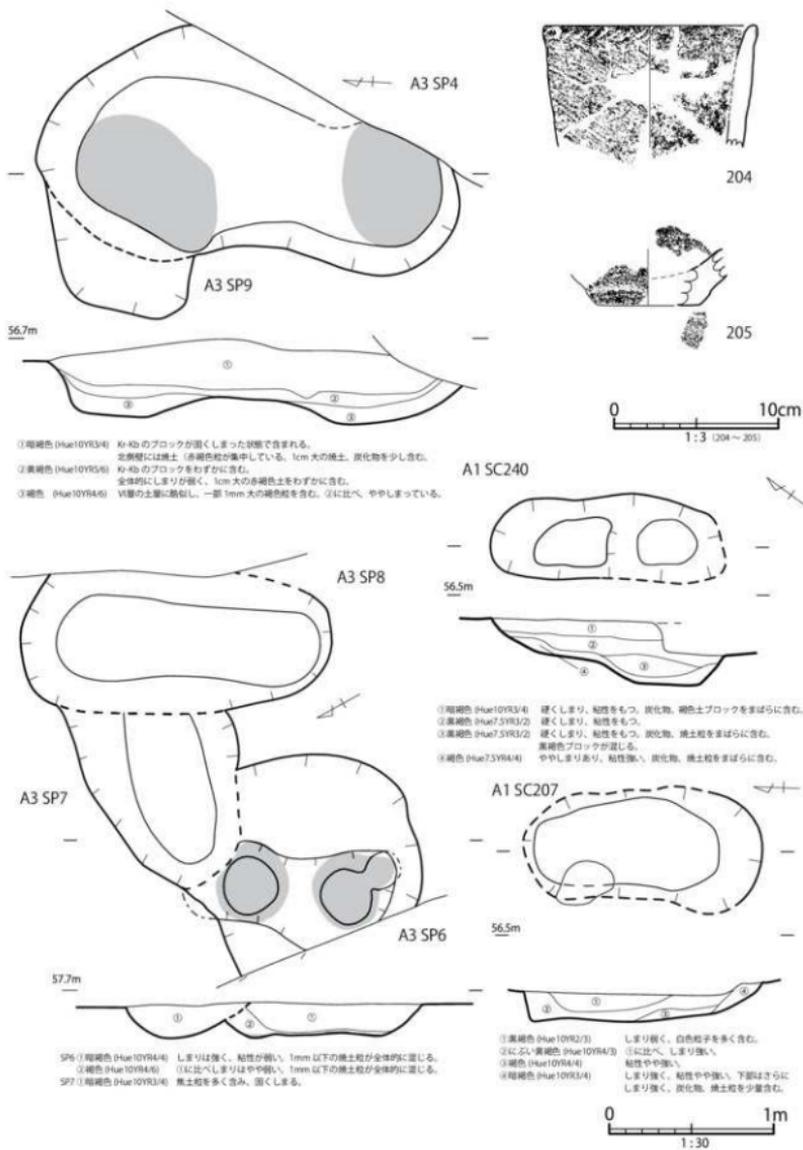
201はSC211より出土した。胴部にわずかなふくらみをもった胴部片で、外面には網目状の燃焼文が施されている。また、SC211の検出面より台石(202)が出土している。

A1SC205, SC206 (第54図)

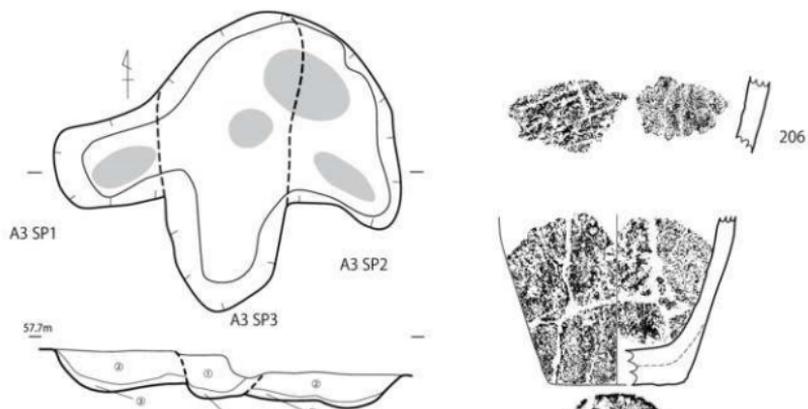
208、209はSC205より出土した。208、209は同一個体で、底部付近から口縁部にかけてまっすぐに立ち上がり、外開きに大きく広がる。器底は薄く、内外面に丁寧にナデが施される。



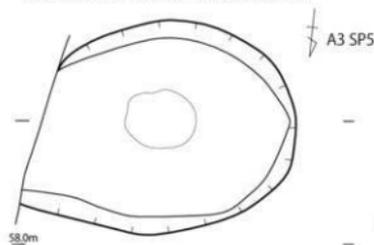
第52図 土器埋設遺構 (SC210) 及び出土物実測図、土坑 (SC211 ~ 213) 及び出土物実測図



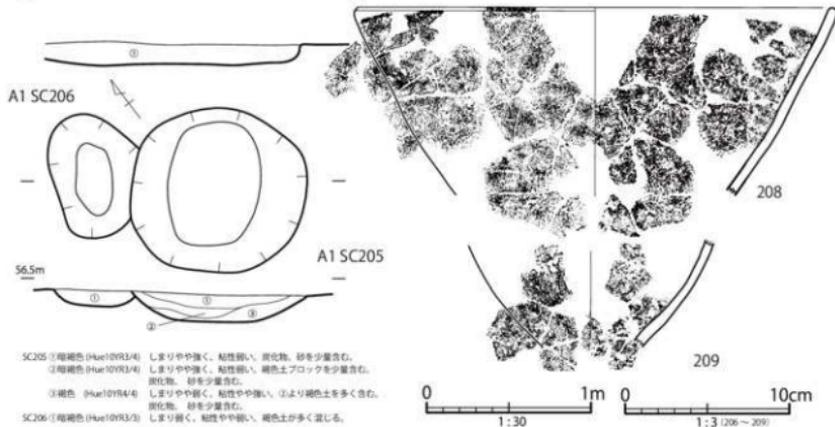
第 53 図 炉穴及び出土遺物実測図



- ①黒褐色 (Hue10YR2/2) 深くしまり、中央部では物の部分より厚くしまる。1～4mm大の焼土粒。1～2mm大の炭化物を多く含む。
 ②黒褐色 (Hue10YR2/2) ①よりもやや明るく。
 ③暗褐色 (10YR3/3) ①層に比定される土がブロック状に置り固くしまる。1～2mm大の炭化物、焼土粒を含む。
 ④暗褐色 (Hue10YR3/3) ③に比べややしまっている。焼土粒、炭化物の量が③に比べ少ない。
 ⑤濃い黄褐色 (10YR4/3) しまりが弱い。1mm大の焼土粒が含まれる。

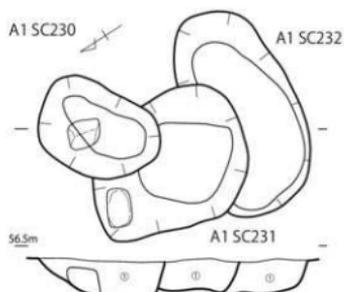


- ①暗褐色 (Hue10YR3/4) やや粘性あり、中央に焼土が集中し、その周辺に60-80ブロックを含む

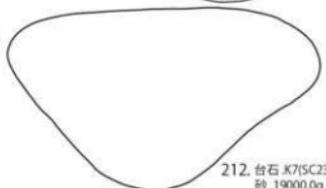
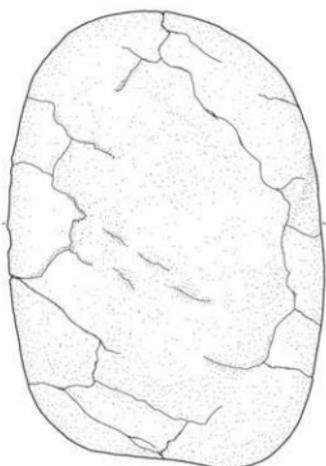
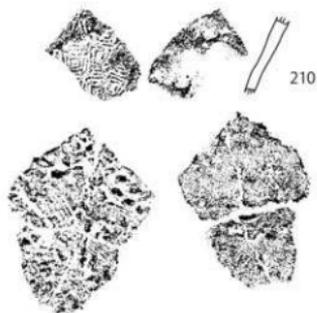


- SC205 ①暗褐色 (Hue10YR3/4) しまりやや強く、粘性弱い。炭化物、砂を少量含む。
 ②暗褐色 (Hue10YR3/4) しまりやや強く、粘性弱い。褐色土ブロックを少量含む。炭化物、砂を少量含む。
 ③褐色 (Hue10YR4/4) しまりやや強く、粘性やや弱い。①より褐色土を多く含む。炭化物、砂を少量含む。
 SC206 ①暗褐色 (Hue10YR3/3) しまり弱く、粘性やや弱い。褐色土が多く混じる。

第54図 炉穴・土坑及び出土遺物実測図

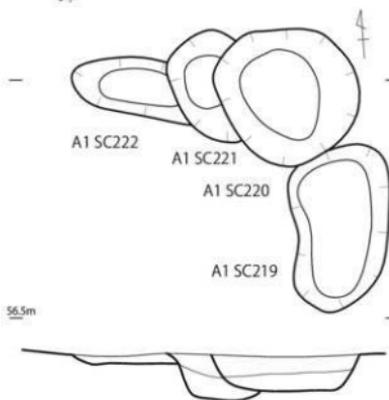


SC230: 緑褐色 (hue10YR3/2) しまり、粘性ともに弱い。
 SC231: 緑褐色 (hue10YR3/4) しまり、粘性ともに弱い。黄土が部分的に混じる。
 SC232: 黄褐色 (hue10YR5/2) しまりややあり、粘性强い。黄土が部分的に混じる。



212. 台石 K7(SC231)
 砂 .19000.0g

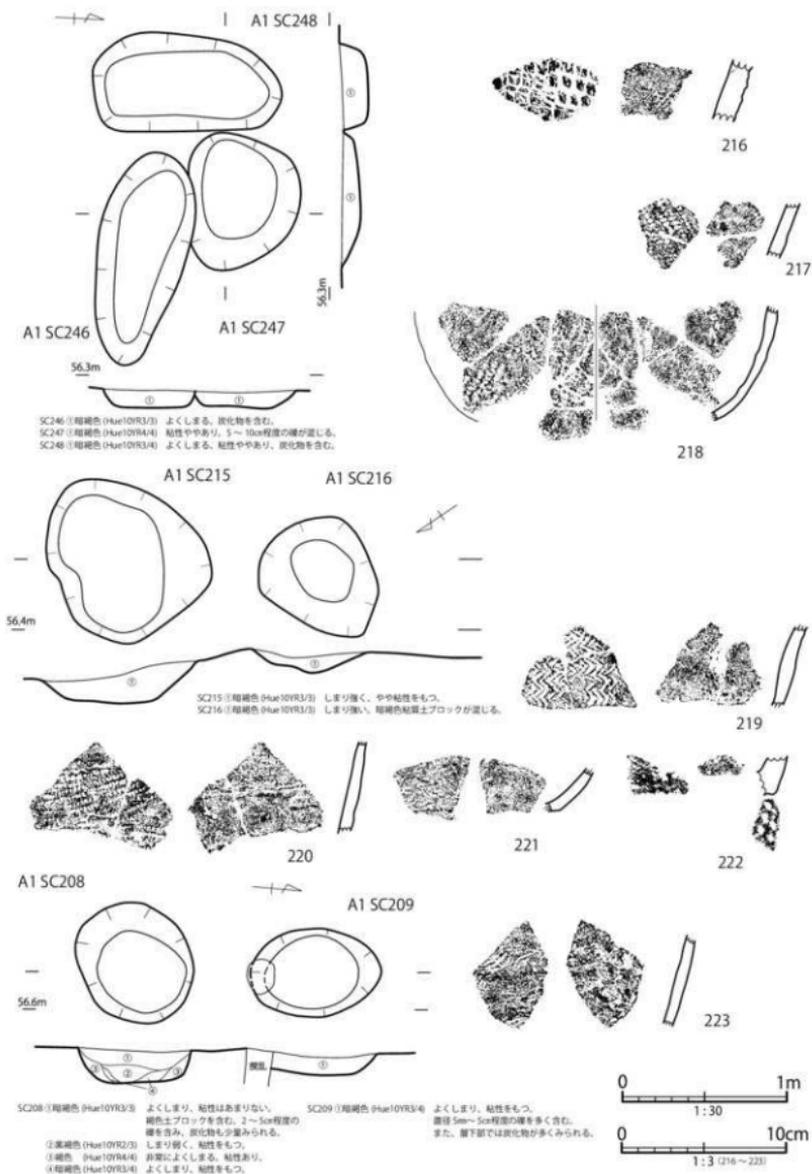
0 20cm



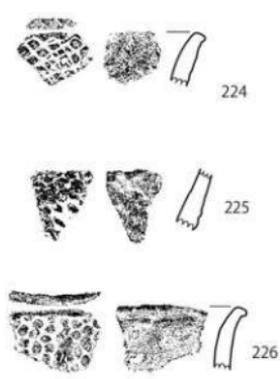
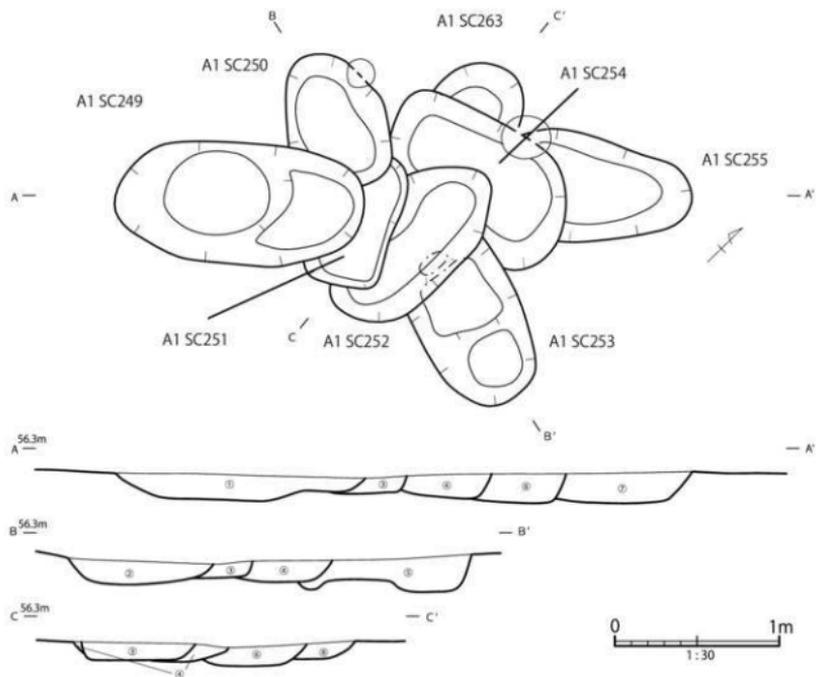
0 1m
 1:30

0 10cm
 1:3 (210~211・213~215)

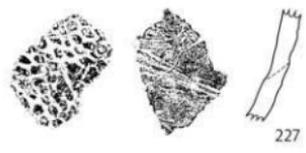
第 55 図 土坑及び出土遺物実測図 (1)



第 56 図 土坑及び出土遺物実測図 (2)

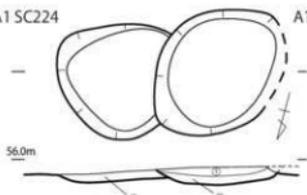


- ① 黒褐色 (Hue 10YR2/3) しまり、粘性ともに弱い。しまりの強い黒褐色ブロックを少量含む。炭化物を少量含む。砂粒を多く含む。
- ② 黒褐色 (Hue 10YR2/3) しまり弱く、粘性やや強い。しまりの強い黒褐色ブロックを多く含む。砂、炭化物を少量含む。
- ③ 暗褐色 (Hue 10YR3/3) しまりやや強く、粘性弱い。砂、炭化物を少量含む。
- ④ 暗褐色 (Hue 10YR3/3) しまり弱く、粘性やや強い。炭化物を多く含む。砂を少量含む。しまりの強い黒褐色ブロックを少量含む。
- ⑤ 黒褐色 (Hue 10YR2/3) しまり弱く、粘性やや強い。砂、炭化物を少量含む。しまりの強い黒褐色ブロックを少量含む。
- ⑥ 黒褐色 (Hue 10YR2/3) しまり弱く、粘性やや強い。しまりの強い黒褐色ブロックを多く含む。
- ⑦ 暗褐色 (Hue 10YR3/3) しまり、粘性ともにやや強い。砂、炭化物を少量含む。しまりの強い黒褐色ブロックをやや多く含む。
- ⑧ 暗褐色 (Hue 10YR3/3) しまり弱く、粘性やや強い。砂、炭化物を少量含む。しまりの強い黒褐色ブロックを少量含む。



第 57 図 土坑及び出土遺物実測図 (3)

A1 SC224

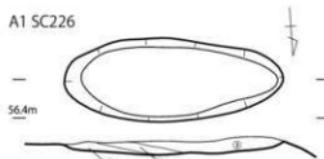


SC224 ①褐色 (Hue10YR4/6) よくしまり、粘性弱い。焼土ブロックや焼土粒を全体に含む。炭化物が少量混在。

SC225 ①暗褐色 (Hue10YR3/3) よくしまり、粘性弱い。褐色ブロックが少量混在。

②暗褐色 (Hue10YR3/4) ③に比べ、強くしまる。

A1 SC226



①に濃い黄褐色 (Hue10YR4/3) しまりやや強く、粘性をもつ。

②暗褐色 (Hue10YR3/3) しまり強い。軽量のブロックがやや混在。

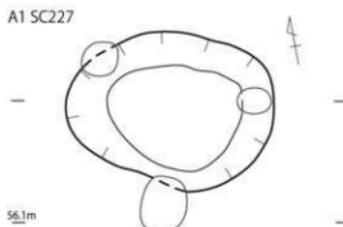
③黄褐色 (Hue10YR2/2) しまりやや弱い。炭化物、焼土粒、小礫が混在。

A1 SC238



①に濃い黄褐色 (Hue10YR4/3) しまり、粘性ともにややある。褐色の焼土が全体的に混在。

A1 SC227

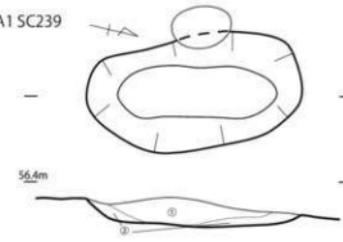


①黄褐色 (Hue10YR2/2) しまりやや強く、粘性をもつ。

②暗褐色 (Hue10YR3/4) しまりやや弱い。炭化物が少量混在。

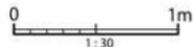
③褐色 (Hue10YR4/6) しまりやや強く、褐色ブロックが混在。

A1 SC239



①黄褐色 (Hue10YR2/2) しまり、粘性ともにややあり。

②暗褐色 (Hue7.5YR3/3) しまり、粘性ともにやや弱い。褐色土がまだらに混在。



第 58 図 土坑実測図

A1SC230・SC231・SC232 (第 55 図)

SC230・SC231・SC232 は K7Gr に位置する。土坑は、SC232 → SC231 → SC230 の順で切られている。SC232 から楕円押型文 (211) と菱形押型文 (210) を施した胴部片が出土している。

A1SC219・SC220・SC221・SC222 (第 55 図)

SC219 ~ SC222 は L4Gr に位置する。4 基の土坑の中で最も新しい SC220 より 213 ~ 215 が出土した。213 ~ 215 は同一個体であり、胴部が丸く張っている。

A1SC246・SC247・SC248 (第 56 図)

217 は A1 SC248 より出土した。器壁の幅は薄く、外面に燃糸文を施している。また、218 は SC248 より出土したものではないが、217 と同一個体であるためここに掲載している。

A1SC249 ~ SC255・263 (第 57 図)

SC249 ~ SC255、SC263 は L4Gr 周辺に位置する 8 基の土坑が切り合う土坑群である。SC255 → SC263 → SC254 → SC253 → SC252 → SC251 → SC250 → SC249 の順で土坑は切り合い、全ての土坑が礫層まで掘り込まれる。また、SC255 は A1 SC27 に切られている (P64 第 44 図)。

8 基の土坑全てから炭化物が埋土中より確認され、特に SC252、SC254 は炭化物が多く含まれる。土坑群のうち、SC249 から 224 ~ 226 の楕円押型文を施された L 形胴部片と胴部片が、SC250 から無文、SC251 から 227 の楕円押型文が施された胴部片が出土している。

(文責：岸田)

第5表 縄文時代早期炉穴観察表

調査区	遺構No.	検出層位	検出位置	サイズ (m)			平面形	焼土	出土遺物	自然科学分析
A1	SC207	V a	J10c	1.93	0.94	0.32	楕円形	埋土層下部に炭化物・焼土粒。		
A1	SC240	V b	L6b	1.89	0.69	0.52	楕円形	埋土全体に炭化物、下部に焼土粒、無文		
A3	SP4	V b	オ 44c	1.72	1.20	0.29	楕円形	埋土①、北側の壁に付着。	貝殻文系 (204・205)	
A3	SP9	V b	オ 44a	不明	0.65	0.27				
A3	SP5	V b	オ 44c	不明	0.88	0.10	楕円形			
A3	SP1	V b	カ 42b	2.60	0.74	0.32			貝殻文系 (206・207) 無文・割片	
A3	SP2	V b	カ 42b	2.04	0.60	0.28			無文 割片	
A3	SP3	V b	カ 42b	2.50	0.94	0.36			割片	
A3	SP6	V b	エ 42b	不明	不明	0.20	不定形	床面付近に残存。	無文 割片	9465 ± 35BP
A3	SP7	V b	エ 42b	不明	不明	0.20	楕円形	床面付近に残存。		
A3	SP8	V b	エ 42b	不明	不明	不明	楕円形			

第6表 縄文時代早期土坑観察表

調査区	遺構No.	検出層位	検出位置	サイズ (m)			平面形	焼土	出土遺物	自然科学分析
A1	SC201	V a	M4a	(1.35)	0.96	0.20	縦丸長方形	埋土中に焼土ブロック・炭化物		
A1	SC202	V a	M4a	0.59	0.34	(0.08)	円形	炭化物を含む。		
A1	SC203	V a	J4d	(2.15)	0.61	0.14	楕円形	炭化物をごく少量含む。		
A1	SC205	V a	J9a	1.42	1.35	0.21	円形	炭化物を少量含む。	無文 (208・209)	
A1	SC206	V a	J9a	1.03	0.68	0.12	楕円形			
A1	SC208	V b	J7c	1.03	0.88	0.27	円形	炭化物を少量含む。	変形磨糸文 (223)	
A1	SC209	V b	J7c	1.05	0.73	0.17	楕円形	炭化物やや多く含む。		
A1	SC210	V b	K6b	0.58	0.42	0.08	楕円形	炭化物を少量含む。	貝殻文系 (200)	8,150 ± 40BP
A1	SC211	V b	K6b	0.85	0.73	0.14	円形	炭化物をごく少量含む。	磨糸文 (201) 台石 (202)	
A1	SC212	V b	K6b	1.67	0.88	0.07	楕円形	炭化物をごく少量含む。	押型文 (203)	
A1	SC213	V b	K6b	(0.80)	(0.80)	0.10	円形	炭化物を少量含む。		
A1	SC214	V b	M5b	1.91	0.93	0.26	楕円形			
A1	SC215	V b	L6d	1.40	1.21	0.29	円形			
A1	SC216	V b	L6a	1.05	0.91	0.16	楕円形			
A1	SC217	V b	L6d	1.18	1.07	0.39	円形			
A1	SC218	V b	L6d	0.85	0.86	0.31	円形			
A1	SC219	V b	L4c	1.35	0.78	0.19	楕円形		押型文 (219・221) 磨糸文 (220) 貝殻文系 (222)	
A1	SC220	V b	L4c	1.16	0.98	0.31	円形		貝殻文系 (213～215)	
A1	SC221	V b	L4c	0.93	0.70	0.17	円形			
A1	SC222	V b	L4c	1.10	0.47	0.08	楕円形			
A1	SC223	V a	H11b	1.23	0.61	0.17	楕円形			
A1	SC224	V b	I10c	(1.05)	0.97	0.10	円形	炭化物・焼土をブロック含む。		7410 ± 30BP
A1	SC225	V b	I10c	1.21	0.98	0.14	楕円形			

調査区	遺構No.	検出層位	検出位置	サイズ (m)			平面形	焼土	出土遺物	自然科学分析
A1	SC226	V b	K5c	1.77	0.68	0.11	楕円形	埋土下部に炭化物・焼土を含む。		
A1	SC227	V b	H11c	1.69	1.22	0.31	楕円形	埋土下部に炭化物を少量含む。		8,420 ± 30BP
A1	SC228	V b	J8d	1.86	1.30	0.32	楕円形	埋土下部に焼土粒を含む。		
A1	SC229	V b	J8d	0.89	1.58	0.20	楕円形			
A1	SC230	V b	K7b	1.01	(0.70)	0.29	楕円形	埋土全体に焼土粒を少量含む。		
A1	SC231	V b	K7b	1.32	1.06	0.24	楕円形	埋土全体に焼土粒を少量含む。	押型文 (円) 台石 (212)	
A1	SC232	V b	K7b	1.71	0.89	0.28	楕円形	埋土全体に焼土粒を少量含む。	押型文 (210・211)	8,280 ± 40BP
A1	SC233	V b	L5a	0.89	0.67	0.10	円形			
A1	SC234	V b	L5c	0.78	0.66	0.26	円形			
A1	SC235	Ⅷ	L4c	0.93	0.64	0.18	楕円形			
A1	SC236	Ⅷ	L4b	0.45	0.43	0.08	円形			
A1	SC237	V a	L4b	1.04	0.82	0.22	円形			
A1	SC238	V b	K5c	1.11	0.76	0.19	楕円形	埋土全体に焼土粒少量含む。		5,865 ± 25BP
A1	SC239	V b	K5b	1.72	0.92	0.21	楕円形			
A1	SC241	V b	I10c	0.86	0.57	0.18	楕円形			
A1	SC242	V a	J8d	0.52	0.49	0.33	円形			
A1	SC243	Ⅷ	I8b	0.95	0.57	0.11	楕円形	微細な炭化物を少量含む。		
A1	SC244	Ⅷ	I8b	1.31	1.08	0.11	円形			
A1	SC245	Ⅷ	K7a	1.34	1.14	0.36	不整形			
A1	SC246	V b	M5d	1.75	0.74	0.13	楕円形	炭化物を少量含む。		
A1	SC247	V b	M5d	1.12	0.87	0.15	円形		押型文 (216)	
A1	SC248	V b	M5d	1.54	0.80	0.23	楕円形	炭化物を少量含む。	捺文 (217) 押型文・無文	
A1	SC249	Ⅷ	L4a	2.02	1.02	0.28	楕円形	炭化物を少量含む。	押型文 (224～226)	
A1	SC250	Ⅷ	L4a	(1.15)	0.82	0.22	楕円形	炭化物を少量含む。	無文土器	
A1	SC251	Ⅷ	L4a	(1.10)	0.68	0.14	楕円形	炭化物を少量含む。	押型文 (227)	
A1	SC252	Ⅷ	L4a	1.61	(0.85)	0.20	楕円形	炭化物を多く含む。	押型文 (円)	
A1	SC253	Ⅷ	M4b	1.53	0.86	0.30	楕円形	炭化物を少量含む。		
A1	SC254	Ⅷ	L4a	1.61	(1.00)	0.24	楕円形	炭化物を多く含む。		
A1	SC255	Ⅷ	M4b	1.42	0.90	0.26	楕円形	炭化物を少量含む。	押型文	
A1	SC257	Ⅷ	L5b	1.44	0.86	0.18	楕円形			
A1	SC258	Ⅷ	L5d	0.84	0.82	0.08	円形			
A1	SC259	V a	L4b	0.88	0.61	0.13	円形			
A1	SC260	V a	M6b	1.14	0.63	0.08	長方形		土器片	
A1	SC261	Ⅷ	L5a	(1.70)	0.78	0.08	楕円形		無文土器	
A1	SC262	Ⅷ	L5a	(1.80)	0.78	0.06	円形	炭化物を少量含む。	捺型文 (158)・無文	
A1	SC263	Ⅷ	L4a	0.92	0.78	0.14	円形	炭化物を少量含む。		
A1	SC264	Ⅷ	L6b	1.09	0.76	0.24	楕円形	埋土下部に炭化物を少量含む。		

遺物 (第65回～第90回:写真図版54-68)

(1) 土器 (第59回～第77回:写真図版54-59)

本遺跡では、縄文時代早期の土器が多く出土したが、完形の土器はなく、大多数が土器片であった。出土した地点は、早期の遺構及びⅢb層(KaH)下位のⅣ層・Ⅴa層からで、その時期は縄文時代早期前葉から中葉に属するものがほとんどであった。

本遺跡から出土した縄文時代早期の土器片を大別すると、Ⅰ「貝殻文系土器」、Ⅱ「押型文系土器」、Ⅲ「無文土器」の3つに分類でき、この3分類ごとにそれぞれ施文や器形・形態の特徴をもとにさらに細分を行った。また、早期土器の可能性のあるものや土器片加口戸摺についても、最後にまとめた。

遺物の掲載については、概要で触れたとおり、縄文時代早期の竈穴、土坑から出土した土器は、その出土した遺構が掲載されている図に掲載している。

なお、それぞれの早期土器の分布域や出土量については、各分類別に重量を計測し、土器重量分布図として作成したので参照されたい(第59～64図)。

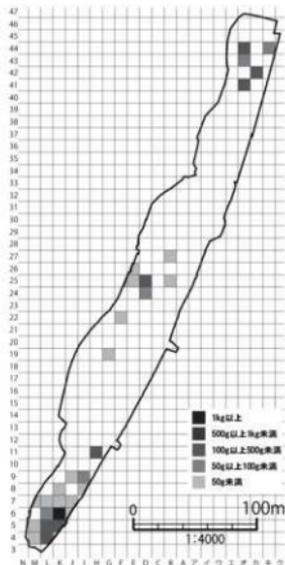
Ⅰ 貝殻文系土器 (第65図228～246)

貝殻文系土器は、多くかり片であったため、分類基準を外面の施文をもとに3分類した。A類:貝殻条痕を施すもの。B類:工具等による条痕を施すもの。C類:貝殻腹線刺突文を施すものである。

Ⅰ A類 (第65図228～231, 238～243, 246)

228は口縁部が直口し、口縁端部に貝殻刺突文を施し、口縁部下位に斜めに貝殻条痕を施す。内面にも貝殻条痕を施し、ナデ調整をする。229は口縁部がわずかに外傾し、その先端部は内湾する。口縁端部には貝殻押し文を、口縁部下位に太い貝殻条痕を施し、補修孔を有する。内面はナデ調整をする。230は直立する胴部で、外面に太い貝殻条痕を施し、補修孔を有する。229とは施文や胎土が共通しているため、同一個体と考えられる。231は外面の剥落が激しいが、器壁が厚く、わずかに外反する。口縁端部に貝殻腹線による短点線文列、口縁部下位に斜めの貝殻条痕を施す。内面はミガキ調整をする。

238～243は、胴部片である。238・240は外面に243は内・外面に貝殻条痕の調整痕が現る。239



第59図 貝殻文系土器重量分布図

と241は胎土から判断して、同一個体であり、239、241、242は貝殻条痕の調整はないが、円筒形の器形や胎土から貝殻条痕をもつ円筒形土器の胴部であると判断した。内面の調整はすべてナデ調整である。246は平底の底部片だが、上記と同様に円筒形土器の底部と判断した。内・外面ともナデ調整をする。

Ⅰ B類 (第65図232～235)

232、233は口縁部が外反する。232は口縁端部に縦方向の短点線文を施し、口縁部以下にナデ調整による擦痕が残る。233は口縁端部に貝殻腹線による短点線文、口縁部以下にナデ調整をした後、工具による条痕文を施す。口唇部から内面にかけて、ミガキ調整や丁寧なナデ調整をする。234は口縁部がわずかに内反し、平坦な口唇部をもつ。口縁端部には櫛状の工具により条痕文列を施し、口縁部以下にもナデ調整した後、櫛状の工具による条痕文を施す。内面は、粗いミガキ調整をする。235は口縁部がわずかに内傾する。口唇部を平坦にし、外面は斜位の条痕文を施し、内面を丁寧にナデ調整する。

I C類 (第66図236、237、244、245)

236は口縁部が直口し、平坦な口唇部には条痕を施す。口縁端部に短な線文列、口縁部下位に縦位の貝殻線刺突文を施し、内面はナデ調整している。237は口縁部が外傾する。内面の口縁端部に粘土紐を貼付して肥厚させ、口唇部を平坦にする。口縁部下位は横位の貝殻線刺突文を縦方向に二列に施す。

244、245は貝殻線刺突文を施した胴部片である。244は底部に近い胴部片で、横位の貝殻線刺突文を右下がりに施し、その上に右上がりの同刺突文を2条施す。245は貝殻線刺突文を山形状に連続して施す。

II 押型文系土器 (第66～74図247～395)

押型文系土器の分類として、A類「施文の細かい薄手の土器」とし、他を外面の施文によりB類「楕円押型文」、C類「山形押型文」、D類「燃糸文」、E類「変形燃糸文」、F類「その他の押型文(「格子目文」・「菱形押型文」・「楕円転文」等)とした。

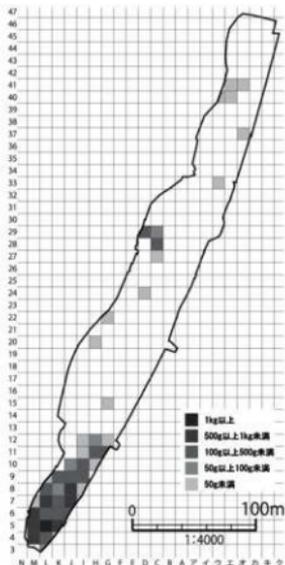
また、B類～F類については、口縁部にも分類基準を設け、(ア)「口縁部が直口するもの」、(イ)「口縁部から外反するもの」、(ウ)「胴部から全体的に外反するもの」とした。なお、(ア)については口縁部が外側にやや開きぎみになるものも含める。

胴部・底部については、その口縁部と同一個体であれば共に掲載し、それ以外のものはそれぞれに分類した押型文系土器の図に掲載した。

II A類「施文の細かい薄手の土器」(第66図247～255)

247、248は口縁部で、わずかに外反する。247は外面に細かい楕円押型文を横位に回転させ、その下に無文帯がある。内面は口縁部に楕円押型文を施し、胴部以下はナデ調整を行う。248も外面に横位の細かい楕円押型文を施し、内面には口縁端部に原体条痕を、その下位には楕円押型文を横位に施す。249、250は胴部片だが、外面に楕円押型文を横位に施し、その間に無文帯を有しベルト状施文をもつと思われる。内面はナデ調整される。247と249は施文や胎土から同一の可能性が高い。

251～255は文様がわずかに大きくなる。251の口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸みをおびる。



第60図 押型文系土器(楕円文)重量分布図

外面には楕円押型文を横位に施し、口縁端部にわずかな無文帯がある。内面は丁寧なナデ調整である。252、253は胴部片である。外面はそれぞれ横位の楕円押型文と山形押型文を施し、内面はナデ調整である。254、255は平底の底部である。外面にはどちらも山形押型文が施され、内面はナデ調整である。

II B類「楕円押型文」

II B (ア)類 (第66図256～262)

256～258は、内・外面に楕円押型文を施す。256、257は外面に縦位の楕円押型文を、内面には口縁部に横位の楕円押型文を施す。また、256には外面の口縁端部にわずかな無文帯を有する。258は内・外面とも横位に楕円押型文を施し、内面の胴部以下はナデ調整をする。

259～261は、外面に横位の楕円押型文を施す。内面には口縁端部に原体条痕を施し、その下位には259、260は横位の楕円押型文を、261は横位の山形押型文を施す。260、261は外面の口縁端部に無文帯を有し、内面の原体条痕も、楕円押型文・山形押型文を施文した後に施される。262は外面と口唇部

にも横位の楕円押型文を施し、内面はナデ調整する。外面上部にはススの付着がある。

II B (イ) 類 (第66図277)

263は外面に斜位の、264・265は縦位の楕円押型文を施す。内面口縁部には263は山形押型文を、264、265は楕円押型文を横位に施し、胴部以下はナデ調整をする。264は口唇部が鋭角に尖り、内面には指頭痕が残る。

266～270は、外面に縦位または斜位の楕円押型文を、内面には原体条痕または沈線文を施す。266は内面に一条の短沈線文を縦位に、267は半截竹管による斜め方向の平行沈線文を施す。268、270は大きく外反した口縁部に右上方向に明瞭な原体条痕を施す。268～270は施文や胎土が同じであるため、同一個体と判断した。また、271も外反した口縁部に、方向を一にしない横位の沈線文を4条施す。

272～277は、外面に縦位または斜位の楕円押型文を施し、内面はナデ調整をする。272は口唇部にも横位の楕円押型文を施し、273は口縁端部に無文帯を有し、口唇部をナデ調整している。274～277は、外面には縦位の楕円押型文を施し、内面はナデ調整する。文様の粒も大きく明瞭である。274は外反する口縁部から底縁型の胴部に続く器形を示す。口縁部には無文帯を有す。275は口唇部に横位の楕円押型文を施し、276は口唇部を平坦に仕上げ、277はナデ調整して先端部を丸くしている。

II B (ウ) 類 (第67図278～285)

278は外面には縦位の楕円押型文を施し、口唇部から内面はナデ調整している。279～281は外面に縦位の小粒の楕円押型文を密に施し、内面の口縁部にも同文様を横位に施す。279と280は胎土・器形から考えて同一個体と判断した。281は口縁部が外反し、内面の口縁部に幅広く横位の楕円押型文を施す。282、283は外面の口縁端部まで楕円押型文を施文した後、粘土紐を貼り付け、折り返して肥厚帯を作っている。肥厚帯は横ナデにより調整される。また、内面には太い原体条痕を二段に重ねて施す。282・283は施文や胎土が同じであるため同一個体と判断した。284は外面に明瞭な楕円押型文を縦位に施し、内面にも外反した口縁部に同文様を横位に施

文する。口唇部はナデ調整して丸く作られる。285は284と同一個体の胴部である。

胴部及び底部とその周辺 (286～313)

胴部については、楕円押型文の粒の「比較的小さいもの」と「比較的大きいもの」に2分類し、頸部付近から順に掲載した。

まず、粒の「比較的小さいもの」(286～290)については、外面の施文方向は縦位または斜位で、内面はナデ調整される。286の内面には指頭痕が多く残り、288、290には植物繊維痕が多く見られる。289の内面は何らかの工具による条痕文が施される。

次に、粒の「比較的大きいもの」(291～308)で、本遺跡から出土した楕円押型文の胴部片には、この粒が非常に多かった。しかし、その中には楕円押型文の文様を明確に識別できるもの(291～293)と粗雑であるため十分識別できないもの(307)や楕円押型文が連なる連珠文様のもの(300、305、306、308)もあった。内面の調整は、すべてナデ調整で、指頭痕が残っているもの(301、306)や植物繊維痕(299、301)も見られる。

309～313は、底部及びその周辺である。309・310は外面に小粒の楕円押型文を施し、内面をナデ調整する。311は内・外面とも剥落が激しいが、外面に楕円押型文を施す。312は外面に楕円押型文を施し、内面を見込条痕より調整する。表面に光沢がある。313は角のあまい平底の底部で、底面に小粒の楕円押型文を施し、内面はナデ調整している。

II C 類「山形押型文」

II C (ア) 類 (第70図314～316)

314、315はどちらも波状の山形押型文を外面に施し、314は内面の口縁端部に原体条痕を、口縁部下位に太めの山形押型文を横位に施す。315の内面は口縁端部に小粒の楕円押型文を横位に施し、その下はナデ調整する。316は外面の口縁部を横ナデにより無文帯にし、胴部以下には山形押型文を施す。内面は口縁部に原体条痕を二段に施し、胴部以下は横位の山形押型文を施す。

II C (ウ) 類 (第70図318～326)

318～322については、外面に縦位の山形押型文を施し、内面の口縁部にも横位の山形押型文を施す。

また、318 と 319 は口唇部にも横位の山形押型文を施す。320、322 は同一個体ではないが、口縁部内外反し傾きも同じで器形も近いと思われる。321 は口縁部内外反するが、口縁部はわずかに内湾する。

323、324 は外面に縦位の山形押型文を施し、内面はナデ調整をしている。また、323 の内面はナデ調整後、条痕を施す。324 は外面に明瞭な山形押型文を三段に施し、内面はナデ調整をする。口縁部は外反するが、頸部で窄まり、再び胴部で膨らみながら屈曲部から窄まっていく器形が考えられる。325、326 は 324 の胴部片の可能性が有る。

胴部及び底部、ミニチュア土器・壺形土器

(第 70 ～ 72 図 327 ～ 359、360、317)

327 ～ 329 までは頸部付近で、山形押型文を縦位に施し、内面はナデ調整をする。327、329 には屈曲部があり、328 は口縁部周辺である。

330 ～ 356 までが胴部片で、縦位や斜位にバリエーションに富んだ山形押型文の文様を施し、内面はナデ調整している。文様には波状のもの (341、342) から大形のもの (345、350、354、355) や小形のもの (332 ～ 334、346、347)、明瞭な文様のもの (335、336、338、354) や不明瞭な文様のもの (333、339、343、351、352) が見られる。また 344 のように山形押型文と櫛形押型文を施したものもある。

357 ～ 359 は底部片である。357 は角の大きい小さな平底で、358、359 は角の明瞭な平底である。

最後に山形押型文を施した深鉢のミニチュア土器と壺形土器について述べる。360 は推定の口径 6.8cm、底径 3.7cm、器高 5.4cm のミニチュア土器で、外面に山形押型文を施す。317 は、口唇部から口縁部外面に山形押型文を施した土器で、口縁部の推定口径 6.0cm であったため壺形土器と判断した。

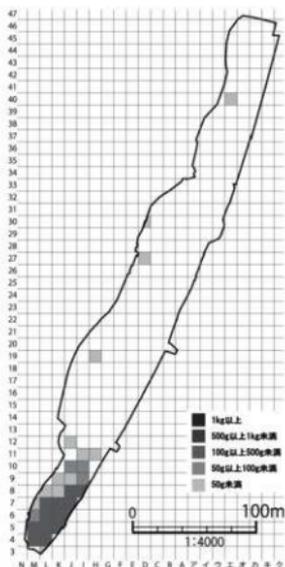
II D 類：「燃糸文」

II D (ア) 類 (第 72 図 361 ～ 362)

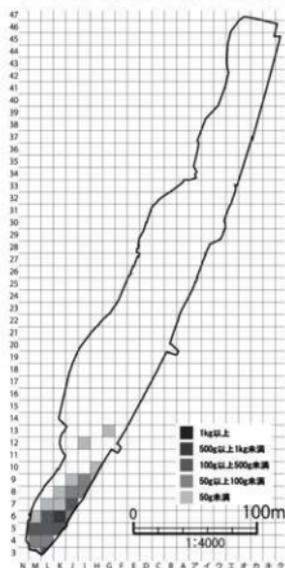
361 は外面に横位の燃糸文を施し、内面をナデ調整する。362 は外面及び口唇部、内面の口縁部にも燃糸文を施し、内面の胴部以下はナデ調整する。

胴部及び底部 (第 72 図 363 ～ 371)

363 は外面に横位の燃糸文を、364 ～ 366 は縦位に燃糸文を施す。内面は、ナデ調整をする。367 は



第 61 図 押型文土器 (山形文) 重量分布図



第 62 図 燃糸文・変形燃糸文土器重量分布図

外面に横立の燃糸文を、368は太めの燃糸文を施し、内面はナデ調整する。369は底部の周辺で細い燃糸文を施し内面はナデ調整する。370は頸部片で、外面に網目燃糸文を施し、内面はナデ調整する。371は平底の底部で外面に燃糸文を施した後、部分的に条痕を施す。内面はナデ調整し指頭痕を有す。

II E 類：「変形燃糸文」

II E (ウ) 類 (第73図372)

372は外面に繊細な変形燃糸文を施し、口縁部や内面の口縁部にはミガキ調整を、胴部以下は丁寧なナデ調整を施す。推定口径が約28.4cmで、口縁部が大きく外反する。373、374は胴部片で、372と同一個体である。373は屈曲部をもち、374はこぶ状突起を付け、こぶ状突起の周りは変形燃糸文を施す。375は底部端が3mmと薄く、底径約6.6cmの平底の底部であり、胎土や器形から上記土器の底部と思われる。これらの土器片を繋ぐと、口縁部が外反するが頸部で窄まり、胴部で膨らむが、「く」の字型に屈曲して、小形の平底に続く深鉢と考えられる。

胴部およびその他 (376～381)

376、377は同一個体である。376は頸部周辺で、376の左上の一部には377の胴部片と同様の細かな変形燃糸文が施されている。378は文様が明瞭ではないが、変形燃糸文と考えここに掲載した。379は外面に細い燃糸文を施し、その一部をナデ消して「8」の字状の変形燃糸文を施す。

380は外面に縄文を施し、内面はナデ調整をする。381は外面をナデ調整した後、微隆起突帯を有する口縁部である。上記の372～375の土器片と胎土や器壁の厚さ、内面の調整等が異なっており、同時期のものではないかと考え、敢えてここに掲載した。

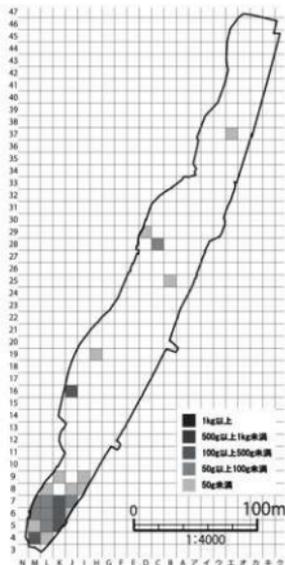
II F 類：その他の押型文 (格子目・菱形・枝回転文等)

II F (ア) 類 (第74図382)

382は外面の口縁端部をナデ調整し、無文帯をつくる。口縁部下位には細かな格子目押型文を施し、内面はナデ調整する。382～384は同一個体で、383は胴部、384は平底の底部片であり、器壁が厚い。

II F (ウ) 類 (第74図385)

385は外面全体と内面は口縁部に明瞭な格子目押型文を施し、胴部以下はナデ調整をする。口縁部は



第63図 その他の押型文系土器 (格子目・菱形・枝回転) 重量分布図

大きく外反し、格子目の文様もしっかりと施文され、格子目文を重ねたような独特な文様である。また、386は385と同一個体の胴部片である。

胴部 (387～393)

387は外面に明瞭な格子目押型文を施し、内面はナデ調整する。388～391は、菱形押型文の胴部片である。外面には菱形押型文が明瞭に施され、内面はナデ調整する。389～391には内面に指頭痕が残る。392・393は枝回転文を施した胴部片で、内面はナデ調整する。

最後に、その他の押型文として394、395がある。394、395は、II F (イ) 類の口縁部で、どちらも口縁端部に無文帯を有す。394は外面の口縁端部をナデ調整し、無文帯をつくる。口縁部には、縦方向に押型文を施し、内面はナデ調整する。395も外面の口縁端部に無文帯をつくり、口縁部下位に棒状の工具で横方向に二列の条痕をつくる。内面の口縁部には原体条痕を施す。

III 無文土器 (第75～77図396～437)

無文土器について、口縁部の器形をもとに3分類した。(ア)口縁部が直口するもの、(イ)口縁部が内湾するもの、(ウ)口縁部が外反するものである。(ア)には、口縁部がやや開ききになるものも含まれた。

胴部・底部は、口縁部と同一個体であれば共に掲載し、その他は口縁部の後に掲載した。

また、早期土器の可能性のあるものや土器片加工円盤については、最後に掲載した。

III (ア) 類 (第75～76図396～411)

396は外面を横ナデに調整した後、斜め方向に二条の沈線文を施す。内面は剥落により不明。397～401は、内・外面をナデ調整し、398には指頭痕が残る。399、401は、胎土や出土位置から考えて、同一個体と判断した。400は胎土中に多くの植物繊維痕を有し、口縁部上部にススの付着が見られる。

402～411は器壁が厚くなる。内面に指頭痕の残るもの(402、408、411)や貝殻条痕による調整痕を有するもの(404)、内面の剥落の激しいもの(403、406、407)がある。406と407、408と409、410と411は同一個体である。これらは口縁部が直口して外に開くが、胴部下位からはそのまま窄まっていく尖底の深鉢の器形になると思われる。また、405は口径11.4cmの鉢である。

III (イ) 類 (第76図412)

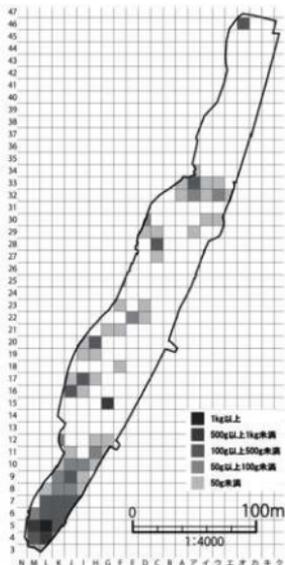
口縁部は、直口するが先端部でわずかに内湾する。内・外面はナデ調整され、口唇部の先端を尖らせる。

III (ウ) 類 (第76図413～415)

413～415は、内・外面ともナデ調整される。413は口縁部が、414は口縁部から、415は全体的に大きく外反し、415は内・外面に指頭痕が残る。
胴部及び底部 (第76～77図416～429)

416～429は胴部及び底部である。胴部については、内・外面ともナデ調整しているが、外面は内面より丁寧にナデ調整されており、内面は剥落が激しい土器片(417、422、424、426)が多い。また、指頭痕(418～421)や植物繊維痕(421、423)を多く残すものもある。

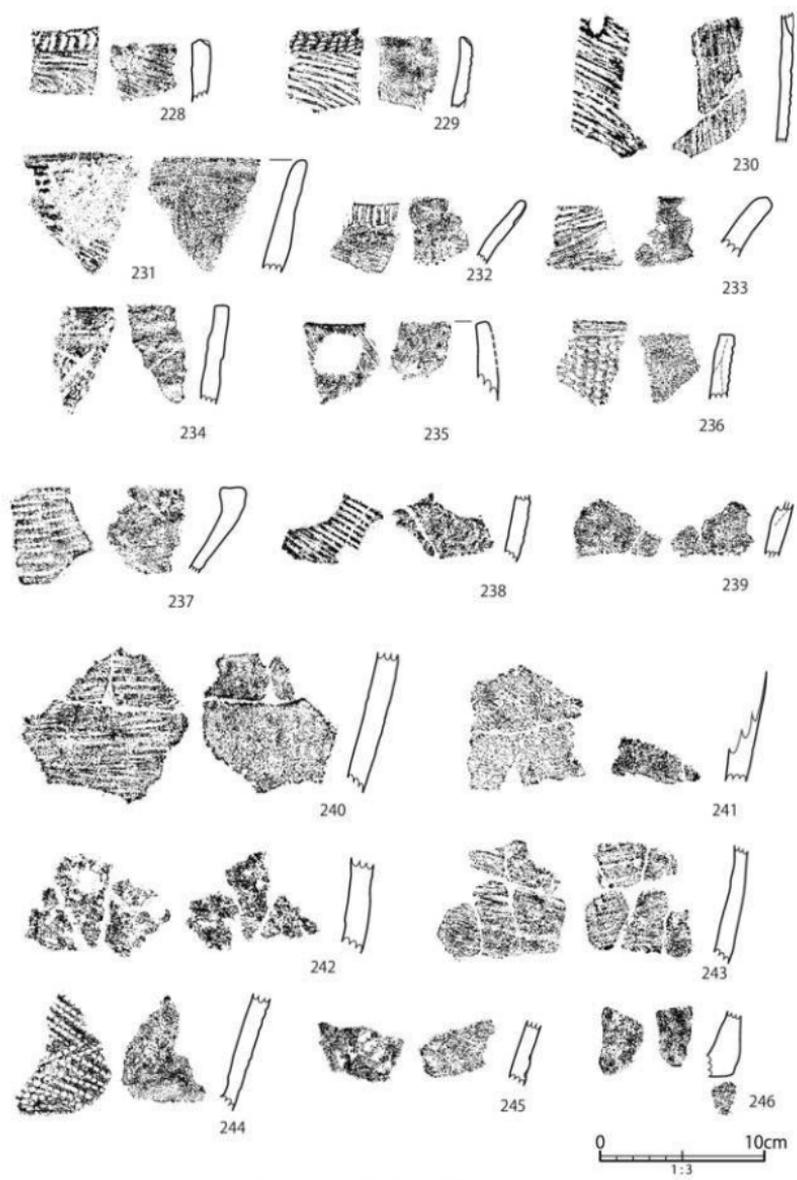
427～429は底部片で、内・外面ともナデ調整される。427、428は尖底、429は丸底である。



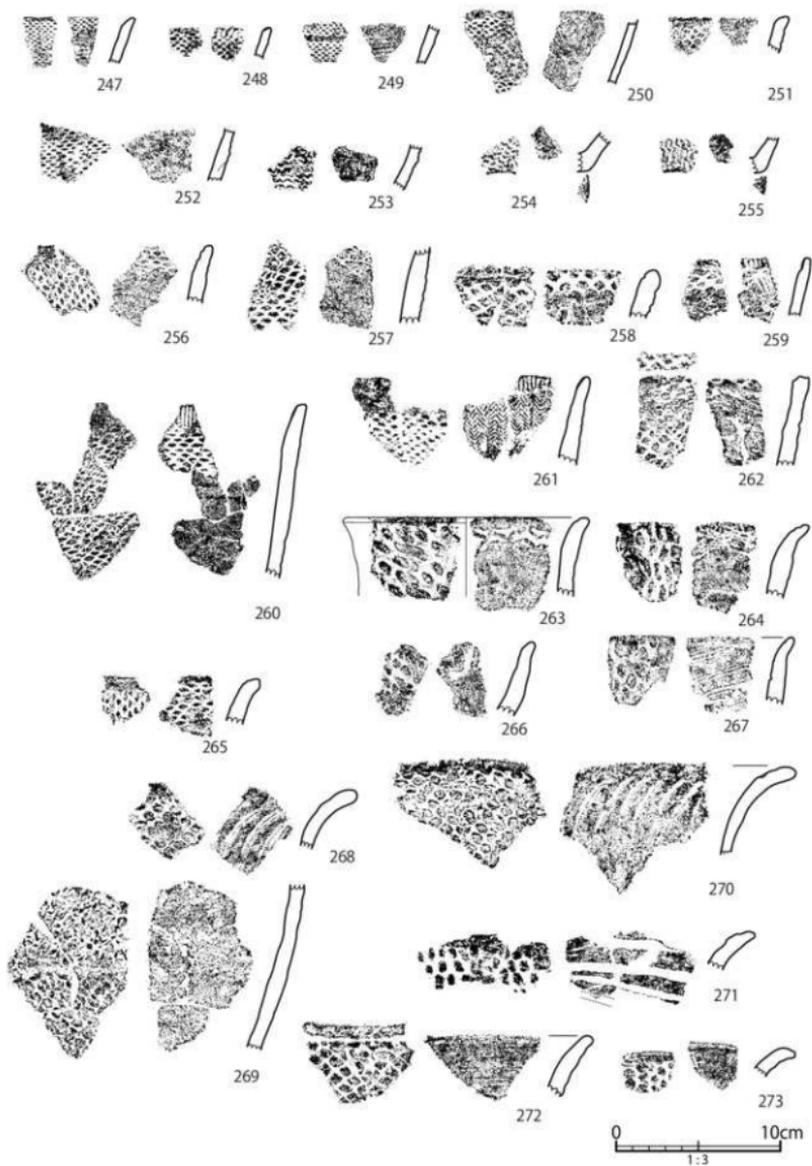
第64図 無文土器重量分布図

最後に、縄文時代早期の可能性を有する土器について記載する。430はKaH上面の遺構内出土の土器で、口縁部が大きく外反し、内面は丁寧にナデ調整される。口縁部に肥厚帯をつくり、その外面端部には刻目を施す。また、肥厚帯の下端は、指で挿入で強いナデ調整して稜をつくる。431は出土位置がIII b層(KaH)下位であったため、ここに掲載した。外面をナデ調整した後、鋭い三角形の文様を沈線文で施す。口唇部に刻目を有し、内面は横ナデ調整をする。432は口縁部近くで外反する。外面は櫛状の工具により縦位の条痕を施すか、燃糸文による施文の可能性もある。内面にも口縁部端部に横位の条痕を施す。433は底径が約70cmの平底の底部で、内・外面ともナデ調整される。434～437は、二次加工された土器片加工円盤である。434は径が約30cmで、貝殻繊維刺突文を施した土器片を加工する。435は網目状燃糸文を施した土器片を径約4.5cmの円盤に加工する。436は片面に、437は両面に格子目押型文を施した土器片を径が約3cmの円盤に加工している。

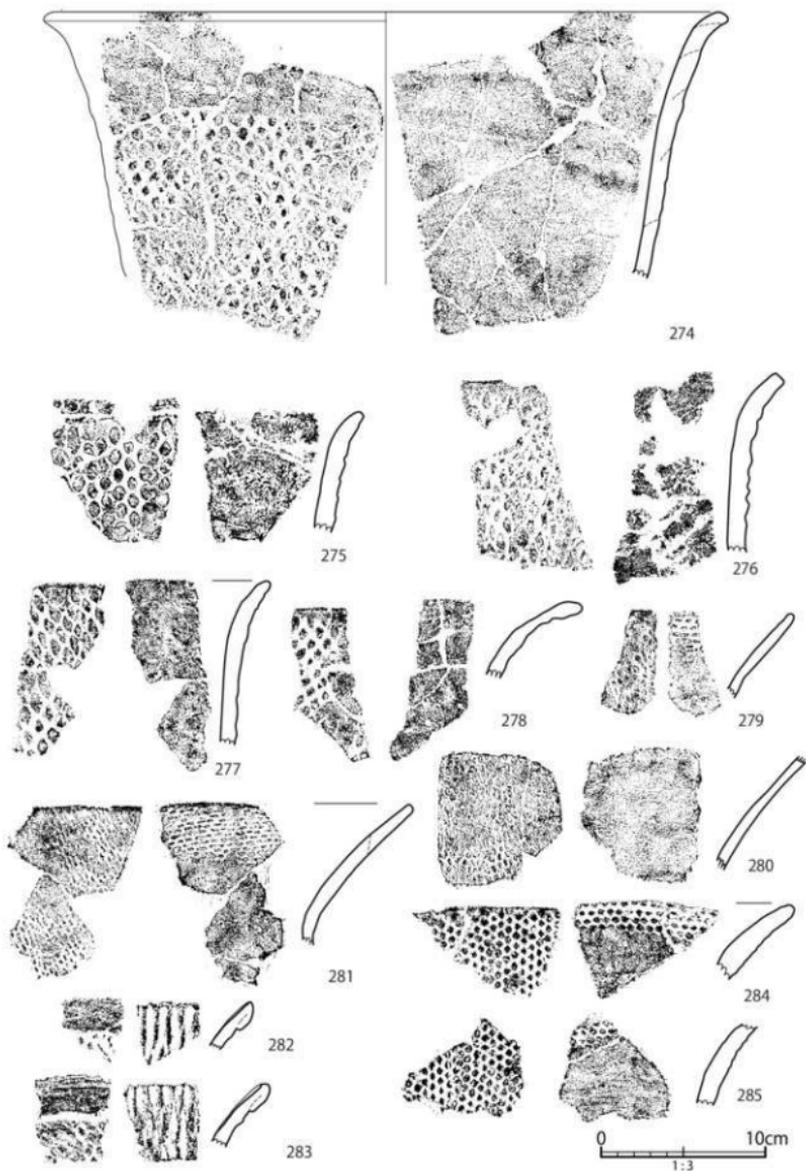
(文責：山出)



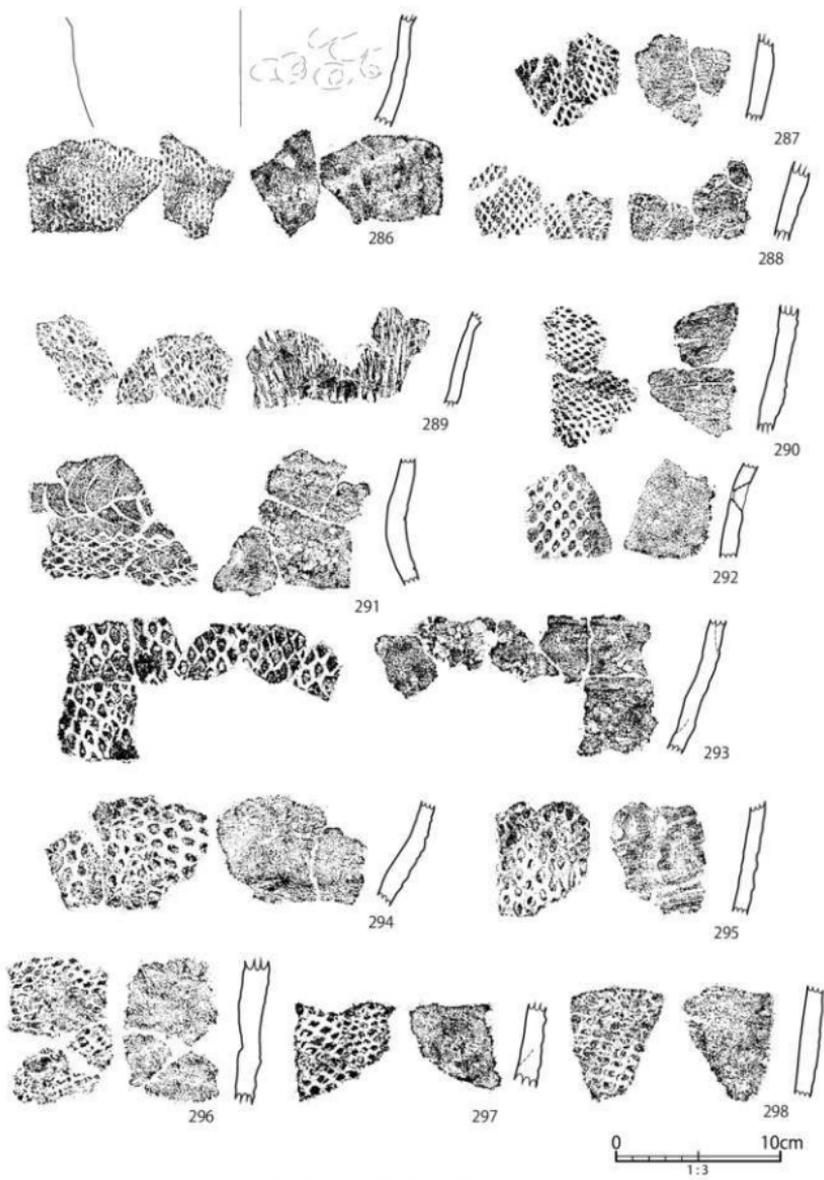
第 65 図 縄文時代早期土器実測図 (1)



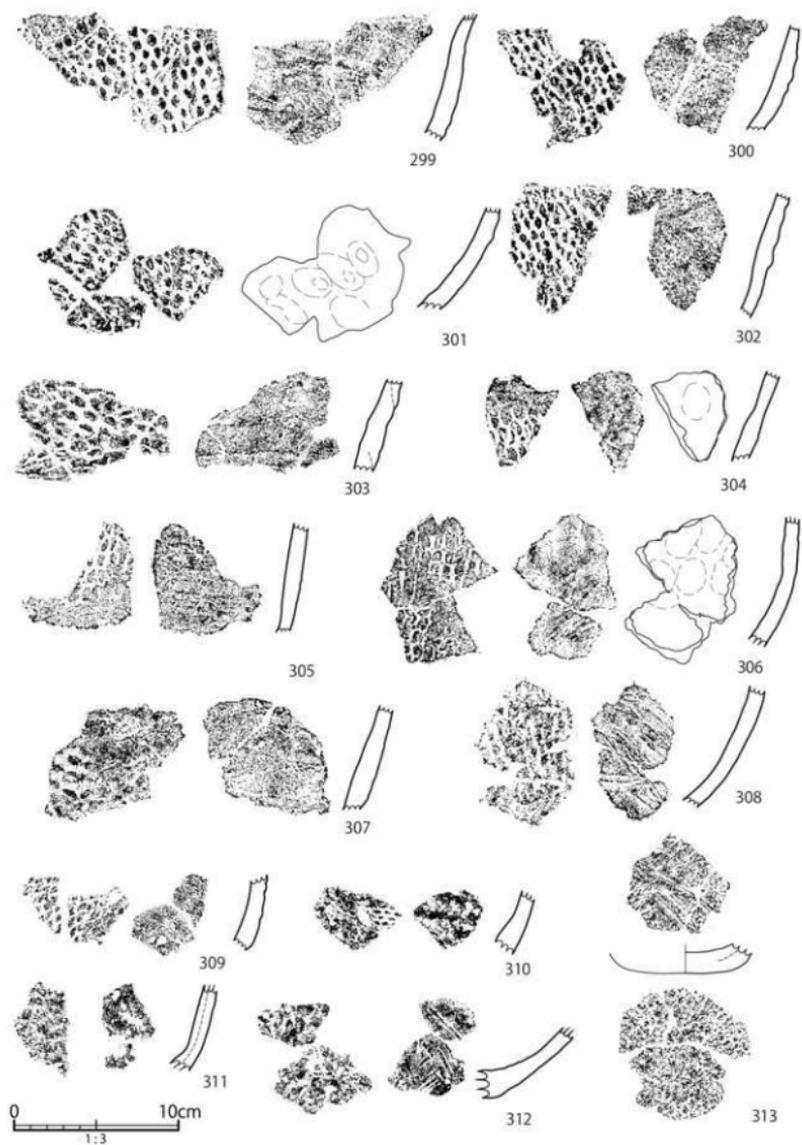
第66圖 縄文時代早期土器実測図(2)



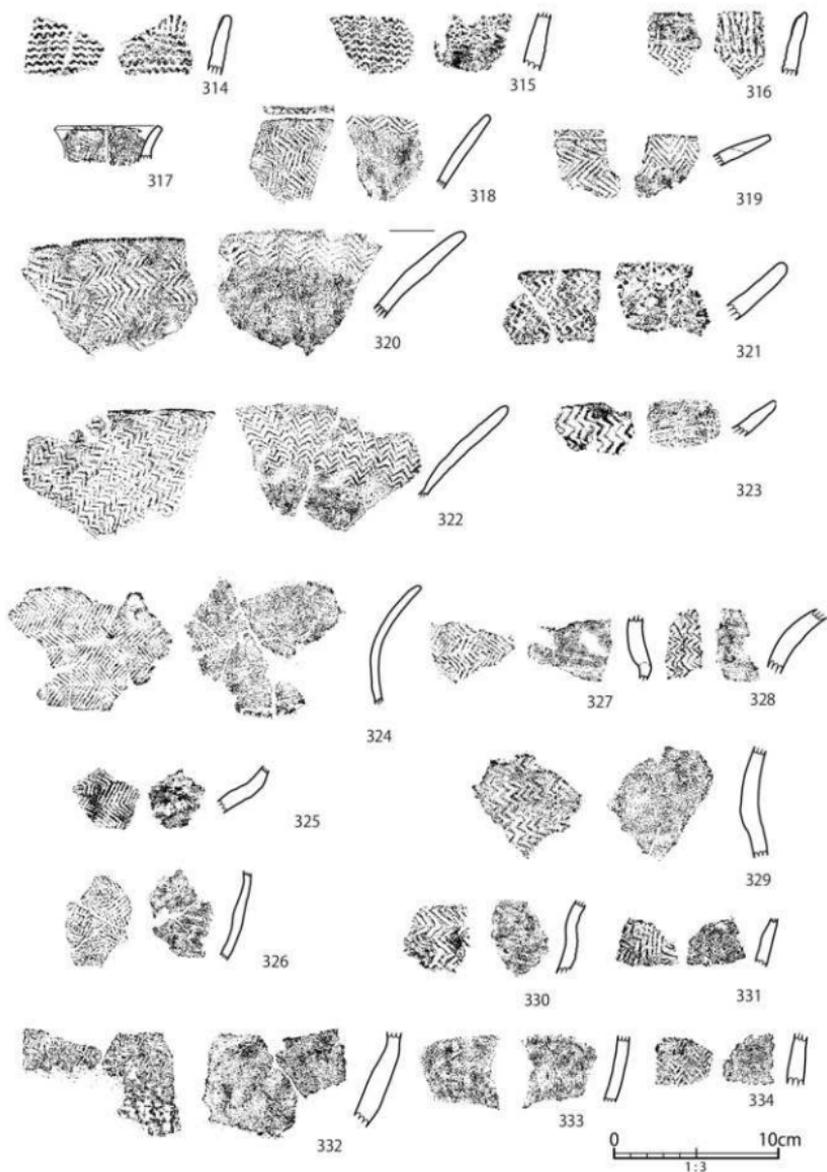
第 67 図 縄文時代早期土器実測図 (3)



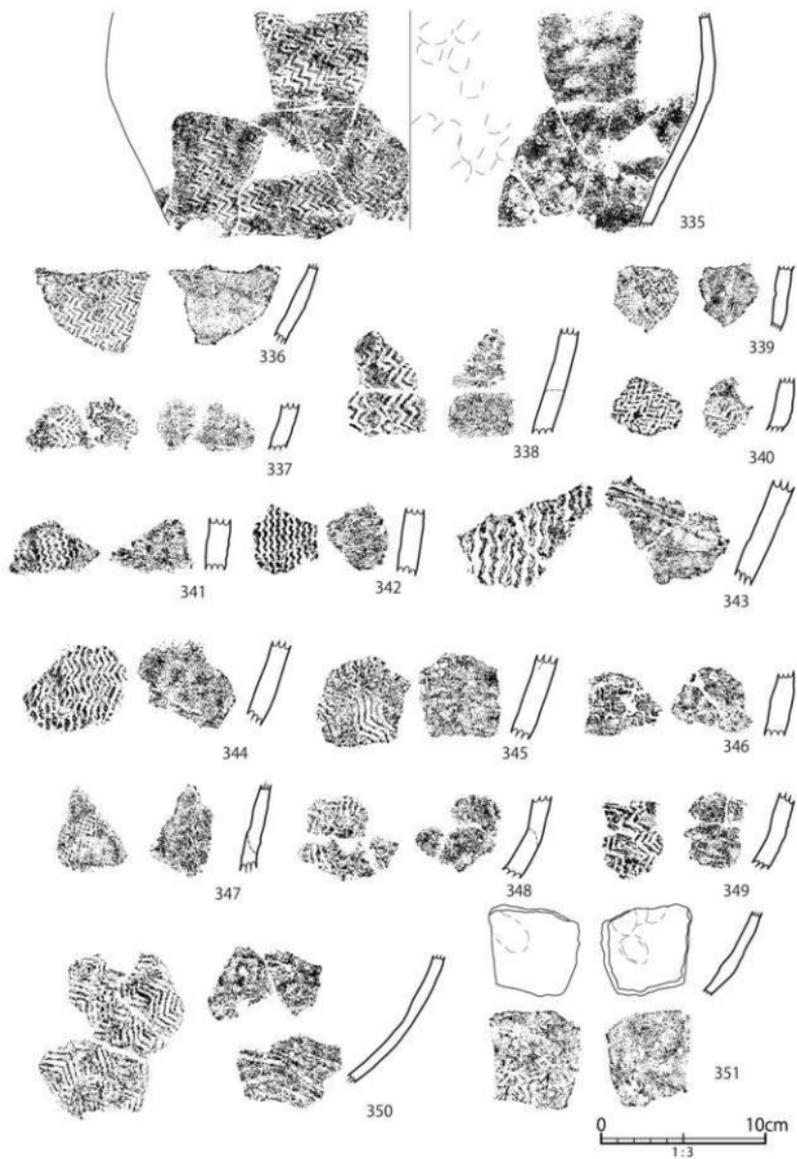
第 68 図 縄文時代早期土器実測図 (4)



第 69 圖 縄文時代早期土器実測図 (5)



第70圖 縄文時代早期土器実測図(6)



第71圖 縄文時代早期土器実測図(7)